

平成十五年十二月一日発（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷九一九号

川柳塔



日川協加盟

No. 919

十二月号

予告

川柳塔創刊八十周年記念

合同句集『川柳塔』平成十六年七月発刊

平成十六年四月二十日 申込締切

一人十五句 参加費 五千元(句集一冊呈)

川柳大会並びに第十回川柳塔まつり

平成十六年十月十日(日曜日)

ホテルアウイーナ大阪

寒中見舞募集

○本誌平成十六年二月号掲載

○締切 十二月二十三日

川柳塔社事務所宛

ペーソスとユーモアで味付けした風刺
世に問い語りかけた個性的で旺盛な
作品の集大成……

核への怒りと平和への訴え「核はゼロ」。共感し
涙する母上への愛情あふれた「前かけ」。長い闘
病からマラソンに生甲斐を見つけ、苦汁を流す男
の「ランパン」……

(序文―要旨から) 学友・日高 宏

岩佐ダン吉川柳句・文集

「熱い汗」

A5判
250頁
2000円

川柳

550句

エッセー

40篇

序文 橋高 薫風(川柳塔社)

同 阿川 静明(元高校教諭)

同 芳地 狸村(岸和田川柳会)

同 田中 正坊(もくせい川柳会)

発行協力 川柳塔社・岸和田川柳会

監修 Ⅱ あかつき川柳会・塩満 敏

申込先

岩佐ダン吉

〒596-0824

岸和田市葛城町八九一―二二

新葉館出版

〒537-0023

大阪市東成区玉津一九十六―四F

Tel 〇七二・四二八・〇三三(五)(Fax 〇七二・四二八・〇三三)

「にゃんぴい」

河内 天笑

信じられないような速さで時が流れ去り、今年も師走となりました。今年は二月八日の三原市での水府句碑建立五十年の会に出席したのにはじまり、七月七日の路郎忌と八月六日の水府忌の交換選者は例年の如く、七月二十一日には堺番傘川柳社創立七十五周年の会に、そして十一月九日には三井アーバンホテルでの番傘川柳本社創立九十五周年の会にと、番傘川柳社との交流のとても多い一年でした。川柳塔社も来年は創刊八十周年を迎え、記念大会への準備も始動しています。

ところで来年は申のうるうどしで長島ジャパンがアテネオリンピックへの切符を獲得。金メダルへの夢をつないでくれました。「申の」としましたがうるう年は十二支の「子」と「辰」と「申」の年にやってくるということに今ごろやっと気付きました。平成八年も「子」のうる

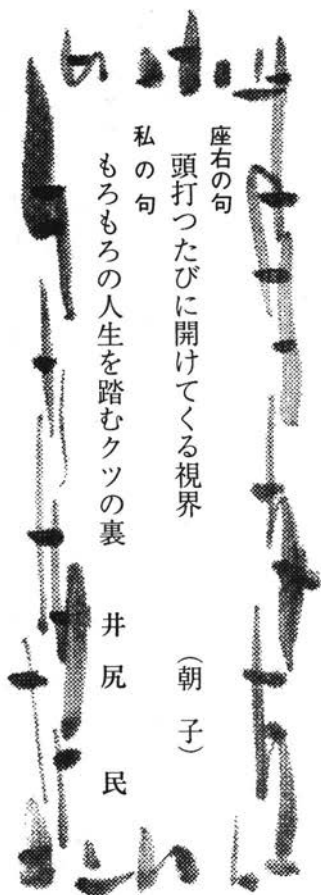
う年でしたが、その年の三月に心筋梗塞になり命拾いをした年でありました。おかげで同時に禁煙も実行出来ましたが、反対に余計口が淋しくなったせいで目方が増えて困ったものです。

平成七年の夏、わが家にちよつとした出来事がありました。胡瓜や茄子のよく成長した畠に子猫が迷い込んで、にゃあにゃあといかにも甘えた声で私に何か言いたそうにしています。お隣から迷い込んだものと思い、そーつと塀の向こうへ返してやりましたが、いつの間にかまたもとの畠へ舞い戻っているのです。おなか为空いているんだらうと思って、お皿に牛乳を入れてやりましたら、おいしうに全部平らげてしまいました。

実は中学生の頃、飼犬を死なせたつらい経験から、生涯犬や猫は飼わないと決めていましたのに、この牛乳を与えたのが縁となり「にゃんぴい」と名付けた雄猫を育てることになりました。ほんの小さな「にゃんぴい」は、その時既に「こを居場所にしよう」と決めていたらしいのです。

「にゃんぴい」は一ヶ月もしないうちに私の掌より大きく成長しました。ちようどその頃黒い子猫が遊びに来るようになり、そのうちにこちらも居ついてしまい、「クロ」と命名して飼うことにしました。クロは雌で二匹はやがて夫婦になりました。

ちようど一年たった初夏、クロは三匹の子猫を出産。黒一匹と茶色が二匹です。黒の赤ちゃんは数日後死にました。茶トラの雄には「寅二郎」、茶トラの雌に「さくら」と名付けました。「寅二郎」と「さくら」はすくすく成長、一家四匹は仲よく暮らしていましたが、その年の十一月一日、常任理事会を終えて帰った夜のこと、夕ごはんの餌は全員食べました。が、寝る前に猫たちの家を見回したら寅二郎の姿がありません。次の日もその次の日も近所を探しましたが、家を出た切り二度と帰ってきませんでした。「寅二郎」という名前がそうさせたのでしょいか。今、親子三匹仲よく暮らしています。が、これ以上増えないように、飼主の責任として手術を施しています。



座右の句

頭打つたびに開けてくる視界

(朝子)

私の句

もろもろの人生を踏むクツの裏

井尻 民

川柳塔 十二月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言「にゃんぴい」

河内天笑……(1)

中学教科書にやつと載った「川柳」

八十田洞庵……(2)

川柳塔(同人吟)

河内天笑選……(4)

自選集

……(52)

水煙抄

板尾岳人選……(57)

麻生路郎物語(24)

東野大八……(77)

同人特集 酒百句

……(80)

愛染帖

波多野五楽庵選……(83)

誹風柳多留二四篇研究

61

茴香の花

藤田泰子選……(88)

中学教科書に

やつと載った「川柳」

八十田 洞庵

いまさら川柳について論じるまでもないが、一柳人として川柳を通じて現在を生きて働く生命とともに、未来への輝かしい展望を求めてゆきたいと願っている。

昨今、生涯学習の時代を迎え、幼児から老年まで、それぞれの分にに応じて何らかの学習に取り組んでいる。川柳もまた種々のカルチャーセンターや、新聞、雑誌で取り上げられ、隆盛に向いつつあることは同慶に存ずる。

しかし書店では依然として、俳句や短歌の立派な総合誌が幅を利かせており、川柳にはそれが見当たらない。また新聞紙上でも俳句、短歌の同人評は度々掲載されているが、川柳はあまり見かけない。非常に残念に思う。

さらに川柳に親しむ人は、比較的年配者が多いのが実状である。これは若い人達に現在の川柳に満足する点が少なかったこともあるが、むしろ先輩柳人の指導啓蒙が足りなかったことが、大きく原因していると思われる。

特に若い人々に、伝統と歴史のある短詩文芸としての川柳は、精一杯生きてゆく人々の

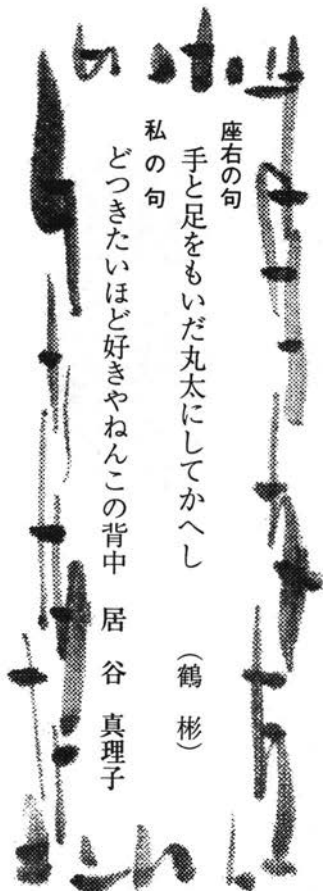
「時」	吉田孔美子選	(90)
一路集「鉛筆」	岩佐タン吉選	(90)
「知恵」	山本半銭選	(91)
初歩教室「ケーキ」	三宅保州	(92)
秀句鑑賞「同人吟」	福井桂香	(94)
水煙抄	菊地政勝	(96)
第18回国民文化祭・やまがた2003		(97)
十一月本社句会		(98)
各地柳壇（佳句地十選／高橋岳水）		(102)
柳界展望		(116)
十二月各地句会案内		(118)
■編集後記	楓楽・朱夏	(120)

座右の句
私の句

手と足をもいだ丸太にしてかへし

(鶴 彬)

どつきたいほど好きやねんこの背中 居 谷 真理子



分身であり、一句一句が自分達で真実を見つめてゆくことを表現する文芸であることを、認識して貰いたいと思う。

わが「岬川柳会」も、平成五年に川柳不毛とも言える地に「川柳の火を灯そう」として、岬町の住民に限ること、初心者ばかりで始めるとして公民館講座を発足した。やがて常時三十名近い会員で、どうやら川柳の火が灯った。

私は泉南郡岬町の人材バンクに登録されているので、何をおいても川柳に親しむ新人の育成を図り、川柳人を増やすことが肝要であると、ジュニアの部を作った。地元中学で選択履修として川柳講座を持った時、時には三年生の授業に初歩教室を開いた。さすが明日を担う若者の躍動するのが、ひしひしと感じられた。

当時私は、中学の教科書に俳句はあるが川柳が無いことを慨嘆していた一人である。やつと昨年から中学三年の「現代の国語」に掲載されたからには、短詩文芸としての川柳を知って欲しいと願うものである。

紙と鉛筆があればどこでも川柳を作ることの出来る楽しさを、若い人々に与えてあげたいと思う。こんな句を作ってくれた。感動です。

先生の化粧もおちる冬休み (小六)
いい気分勝手に足が靴をはく (中三)



河内天笑選

宝塚市 嵯峨根 保子

はつとしたショックで五年若返る

ハイすだち 秋刀魚は買って下さいね

染めもせず染まりもせずに無二の友

藍ぞめの木綿は人を騙せない

美ら海のおばあバインガルになり

もうここでもいいとは言わぬ影法師

八王子市 播本 充子

正直な人だなすぐに怒りだす

ファミレスのコーヒー愛を語れない

羨まし過ぎて意地悪してしまふ

偉そうな人とは違う偉い人

ひまわりの涙焙つて食べている

下手だから道具のせいにするのです

箕面市 岩津 ようじ

星野はん次は総理になつてんか

五千人飛び込んだやて ようやつた (道頓堀)

物忘れ痴呆の初期か中期かも

なめくじの脳の研究してる人

モルモット代くれてもご免その手術

ざまあ見るアメリカ イラクもてあます

静岡県 藺田 獏 杏

飲めぬのに飲めは残酷物語

ふる里は大編隊の赤トンボ

明月や今年は火星連れて来た

朝の窓ひんやり秋が流れ込む

旅先のそれぞれの地に富士がある

迫真の演技涙で幕が下り

和歌山市 楠見 章子

秋高し茶碗触れ合う音が澄む

上品に焼けたさんまが売れ残り

青空を犬と一緒に吸っている

華やかな笑顔あだ花かもしれぬ

本当の涙は見せぬオホホホ

忘れん坊のわたし長生きできるかも

愛知県 早川 盛夫

秋なんだ無性に旅がしなくなり
うどんより蕎麦 海よりも山が好き
駅裏の鄙びた酒が性に合い
ウーロン茶で頑張っている三次会
人間は獣とてつもないイビキ
丸餅と角餅分ける関ヶ原

東大阪市 谷口 義

忙しい日は忙しく歯を磨く
おとなしい川だと思つてはならぬ
沈下橋二つ渡つて帰ります
やけくそで縄飛びしてる十二月
お葬式髪の量など見比べる
初めての正月でなし十二月

鳥取県 蔵本 悦子

すすきの穂揺れて大きな冬が来る
田の煙冬が来るのを知っている
季節風吹いて心を整理する
目や眉をつり上げ冬に立ち向かう
日本を守り続けているサクラ
人生の桜そろそろ咲かせたろ

唐津市 樋口 輝夫

一度だけ才媛だったことがある
煌めいた巨人の星は流れ星(原監督解任)
落ちが付く法話が終り南無阿弥陀

画に描いた餅かも知れぬマニフェスト

陰口を叩いた口で言うお世辞

日暮れても兵器探しのバグダッド

唐津市 市丸 晴翠

定年の夫テレビの評論家

温室で同じサイズの子が育つ

まだ解けぬ謎があるので生きて行く

ボケットにもぐり込んでる夢の屑

無位無冠楽しんでるスニーカー

孫にだけ蚊が寄ってくる墓掃除

富田林市 大橋 鐘造

ど忘れを武器にまあるく生きている

遺伝子が私のやがて知っている

降り続く雨に一夜の深情け

脱ぎ捨てた鎧に未練まだ残る

お迎えへ一人芝居の幕下ろす

一枚の鱗で生きる無位無冠

堺市 村上 玄也

用件は一分 後は無駄話

マイウエイ歌うといつも音外す

もうノルマ抱え込みたくない老後

幼女から少女になった孫娘

三猿が染み付いている無責任

平均寿命越えれば後はロスタイム

砂川市 大橋政良

枯れすすきちよつと淋しい風の音

周囲みな秋です旨い物ばかり

晩酌に猫と煮干しを噛んでゐる

死ぬ前に美しい夢見ておこう

枯葉ひらひら一枚秋の絵をもらう

十和田市 阿部進

倅せは笑顔の中にひそんでる

何事もやる気になればできるもの

もう少し大事にしたい日本語

冷夏にため息をつく海の宿

浅漬のキュウリで弾むコップ酒

黒石市 相馬一花

清らかな空気を侵す排気ガス

あの世から恩師が覗くクラス会

ターザンのように女房が吠えている

古稀過ぎて妻に夫がぶら下がり

生臭い話に伸びる僕の耳

弘前市 高橋岳水

帰る灯があるから安堵して酔える

不夜城の底をさまよう深海魚

矢のような帰心を乗せる終列車

定年の駄馬に安らぐ森がない

六法の死角でほくそ笑む詐欺師

弘前市 須郷井蛙

葉を積んだ堆肥はやがて海になる

縄文の器に燃える美の世界

酔うたびに魚拓の額が下りてくる

イラクテロなんで今更自衛隊

アデランス付けてダンスの墊へ行く

弘前市 相馬銀波

長雨に食味問われる柿の秋

冷夏以後淋しさ募るキリギリス

コオロギの合唱村は文化祭

種初も痩せ来年の策を練る

初不稔愚痴を聞いている蝗たち

弘前市 今愁女

蟪蛄の終の月見の十三夜

人棲まぬ庭に金色一石路の花

逢いたさに後追うごとし返り花

初冠雪十二単の岩木山

枯菊を弔うように焚いている

佐倉市 岡井やすお

国連も各論に来て一致せず

あの国とは当分ジャブで探り合い

抜擢にあつと驚く幹事長

大臣の椅子が餌なら釣り易い

米不作麦飯とろろなどいかが

東京都 岸 野 あやめ

お転婆もバージンロード神妙に(孫娘結婚 4句)

新郎は想像よりも好男子

振袖で仲良く話す従妹達

花も実もある未来へと続く道

お婆さんと私を呼んだよその爺さん

東京都 清 原 悦 子

悔しいがじつと我慢の子であつた

地下街で迷い地上でまた迷い

悩みごとわざわざ拾う苦勞性

赤とんぼ遠い昔を連れて来る

手応えがあればあるほど湧く力

東京都 後 藤 早 智

北国の地震に揺れる旅日記

紅葉の山も煙るか苦小牧

金色の稲穂気になる旅の窓

ひっそりと絵島の墓はここに在り

予定した囲み屋敷を阻む雨

横浜市 小 野 句多留

手が空けばメールにのめるフリーター

手話覚えパントマイムを家で見せ

ITに無知な余命が不安がり

成長も散歩もしない犬で良い

雪を待つ初秋の富士は能の面

横浜市 清 水 潮 華

一匹の猫に自由を奪われる

感情の露出にお人好しを見せ

常識が声の大きな人に負け

百円の秋刀魚に貰う栄養素

お元氣と言われるほどに歳を取り

横浜市 保 田 絹 子

水族園七つの海をひと潜り

頂点で止まって欲しい観覧車

高層のリバーサイドに緑欠け

交番にお巡りさんは今日も留守

十三夜 月下美人に愛でられる

横浜市 菊 地 政 勝

根腐れは過保護のせいと責められる

直そうと思う短所がすぐに出る

賑やかな見舞い手術の跡よじれ

げんこつの父偉かった熱かった

希望者は抽選という墓地売られ

静岡市 安 本 晃 授

菊花展早や来年の芽を選ぶ

この橋を渡れば神の風に会う

今日の貌創る朝茶のおおらかさ

気兼ねなく無職と言える歳になる

売り言葉買わねばならぬ時もある

富山市 舟渡杏花

目がさめて元のまんまの団子鼻
ついに父産湯の中の乱反射
説得に行つた仲間もそれつきり
ひとりになった時の準備がはかどらぬ
秋を囲んで焼きたてのサンマ食う

富山市 島 ひかる

時雨たり晴れたりひとつ屋根の下
外は雨 小津作品を見るふたり
熱燗を鯛大根とゆずで酌む
湯の宿で聞かされている一代記
アルバムを整理している十二月

京都府 稲葉冬葉

退院が近いと分かる身の軽さ
コンビニで売る葉なら害はない
青春の空白今も無念なり
逆子で生んで真つ直ぐな子に育つ
生きざまを教えてくれた回顧録

京都府 丹後屋 肇

ヘルパーとおしゃべりをする秋日和
ナイターがヤキモキしてる午後の雨
カップルがあわてるライトアップの輪
カタコトで道を尋ねる遍路笠
線香の煙にむせる彼岸花

京都市 都倉求芽

さしづめの目標毎日明日に置く
どの道も野の風向きは変らない
同じめしなのにこぼすときたながら
父母や友身近な仏増えました
くすり指 芽はえはじめた恋心

京都市 高島啓子

よく嚙んで食べるとおいしくない御飯
錦市場このごろ煮えた豆を買う
自由さは乳母車ほどないバギー
川を見ていると無口になってくる
百までも生きるつもり歯をみがく

大阪府 米澤俣子

慌てても今更先は見えている
そこそこ踏んだわたしのミステーク
先のことがわからないから笑えてる
夫禁煙わたしはケーキ止められぬ
一日のしあわせ包み陽が沈む

大阪府 初山隆盛

秋の絵にどっぷり浸る芒原
祭り囃子に母のまないたよく弾む
こんこんと名水の湧く里の山
検診に一喜一憂する数値
七十の血が七十の恋に揺れ

大阪府 澤田和重

ああ夫婦そんなこんなで五十年
飲む人と知らずビールを出しそびれ
妻病んで家事の重さを思い知る
重宝に使われ税あがらない
蟹まつたけ疎遠で今年終りそう

池田市 栗田久子

トナカイをつので選んだサンタさん
がんばりを見せる日暮れの木守柿
俺流と男は求めない手本
にぎやかな中で味わう孤独感
嫌われぬほどの美人でいいのでは

和泉市 中川楓

お伊勢さん昔のままに生姜板
神の前皆善人のふりをして
旅人に島人二人定期船(神島)
出会う人皆あたたかな島言葉
海女さんは良き妻であり母であり

泉佐野市 山本蛙城

戦争の語り部 夏を休めない
争点は年金平和皆言うが
マニフェスト知りたいことが書いてない
保釈中当選ありという不思議
散り敷いて落葉が輪廻喋り出す

茨木市 藤井正雄

古里の山に会いたい闘病記
高層ビル夕陽奇麗なエレベーター
真ん中の横の笑顔が次期社長
大胆にカット庭師の冴える腕
女同士嫉妬含んだ辛い点

大阪市 西出楓楽

介護保険証が届いた秋日和
おばあさんと国に言われることはない
プチ家出したのに気づかない家族
お茶漬を食べる男は隙だらけ
サラリーマン今や気楽でない稼業

大阪市 前 たもつ

凶作は祈り忘れた報いかも
大阪城の銀杏ですとお裾分け
優勝して寮長までも株上げる
一病にとうとう酒の縁切られ
歳重ね夕日だんだん赤く見え

大阪市 川原章久

吉野山民話と出会う柿すだれ
下駄放って試したい秋気象庁
年金の一円けずり赤い羽根
平凡に今夜夫婦で豆腐鍋
出歩くな医者と家族に四面楚歌

大阪市 鶴田遠野

休肝日妻の留守日に振替える
父方のDNAが娘も吞ませ
自画像まで貴方の色に染まってる
マナーモード解除して待つ昼下がり
詫びるたび離婚届を書かされる

大阪市 神夏磯典子

甘い汁たっぷり吸って辞任する
魂が疎通になっっている無口
サンマ一枚より高い猫缶よ
急いでも急がなくても番がくる
大胆に捨てて我が道広くする

大阪市 川端一步

秋風や大地と握手する落葉
秋夜長鬼遊豆秋喜寿薫風
峠までなかなか行けぬ大菩薩
戦争のことばときどき出て怖い
左手で字を書く人に目が止まる

大阪市 川久保睦子

茶柱が真ん中にある夫婦の絵
自信など無いが一年無事にすぎ
これも技 水で酔えます踊れます
組板を立てて時どき主婦忘れ
二人だけの内緒ないしょもまた楽し

大阪市 小糸昭子

白い月私の心波立たせ
上弦の月に盛ろうか団子汁
十五夜に月と火星がランデブー
これからは大事な時間巻き戻す
政治家の老人パワーに負けられぬ

大阪市 板東倫子

のらりくらり生きると医者者の養生訓
食卓にうれし地酒と松茸と
才長けて見目うるわしく姦しい
ミサイルの脅し波立つ日本海
寝そびれて墓のデザイン考える

大阪市 奥村五月

家計簿が何時もいやがる赤いペン
借り畑へ車を飛ばし妻の趣味
遺言を書くとき親父に脅される
ぼちぼちや言うて上手に儲けはる
淑女でもバーゲンセール鬼になり

大阪市 岩崎公誠

生活の速度を下げて深呼吸吸
合併がご破算となり村瘦せる
クラス会渾名で呼ばれうれしかり
目測ではかり損ねた着地点
百均で黒タイ買って通夜の席

大阪市 町田 達子

彼岸会を息子にまかせ留守居役
ふっと思う花屋で逢うたあの美人
郷里からの絵手紙秋が真つ盛り
暑かった夏がちよっぴり恋しなり
美術の秋見たいものだらけ忙しい

大阪市 津村 志華子

前むきに歩けば風も味方する
授かった運はしつかり握っとく
見果てない夢を描いてる秋の画布
お供えを一つ戴く午後三時
森一つ抜けたらうつが消えていた

大阪市 鈴木 トヨ子

わだかまり漸く解けた秋日和
食べ残し飢餓の子偲ぶオムライス
息子夫婦どちらも味方出来ぬ親
撫で仏外人さんに真似られる
ストレスを捨てに行きます甘党屋

大阪市 古今堂 蕉子

折角の寝酒もさかず闇夜の目
自己嫌悪心の奥がしびれてる
寝たふりも聞こえぬふりもむつかしい
心眼で見きわめること増えてきた
震度五で私を揺らす甘い声

大阪市 榎本 日の出

奥さまがにつこり笑う選挙前
一言がヒントになつてばれていた
使い捨てモッタイナイのくり返し
スイッチの利かぬ頭に油さす
酒タバコ止めても若いお葬式

大阪市 西川 更紗

涼風が玉の緒ゆらし夕茜
栗ごはん御前に供え秋まつり
菜園のきゅうりトマトを大皿に
雨音も静かに去つて夜が白む
虫が鳴き浮いた話もない暮し

大阪市 星野 きらり

飛鳥路はのんびり時の人にいる
ローレライふと胸キユンの頃よぎる
カレンダー残り少なくて足早に
幸せ度問う子に敗戦記を語る
トラ勝つて笑い絶えない家となり

大阪市 玉置 英子

体調が戻り体重ふえ過ぎに
読むことは出来て書けない字の多さ
磨いとく自分の顔を見る鏡
自分から決めたルールに縛られる
もう九年生きて金環食見よう

大阪市 大川 桃花

大袈裟に残念がつて思うツボ
ペットまでお揃いにするペアルック
山頂で喉越しの良い水と風
好意だと思われ愛想とも言えず
うそ泣きは母見抜いてる無視してる

大阪市 中村 叡子

やる気出し高枝鉢買ったけど
旅プランみな立消えの老いふたり
夜長の碁 喜ぶ妻に負けてやる
手鏡に忘れた笑顔して見せる
阪神の葉書のブレイ見てニマリ

大阪市 伊藤 博仁

ひさびさに雨を降らせて孫嫁ぐ
ほめ言葉割り引いて聞く癖がある
友達の祝辞聞き耳立てておく
区別せずよってくる蚊だ吸わせよう
八十を痛めつけてる五十肩

大阪市 寺井 東雲

廃刊になっても好きで読んでいる
花名刺やさしさがある刺もある
刃物より恐い女の目がにらむ
聞き上手忘れ上手なお父さん
流れ者深い訳など話さない

大阪市 杉澤 汀

初孫に恵まりました喜寿の秋
さあみんなグランドパパと呼んでくれ
銀木犀のあつた古里思いだす
鯖ずしを食べにおいでと笛太鼓
わかる気がせんでもないよ狂い咲き

大阪市 渡部 さと美

老境のつるべ落としに身がすくむ
篠山の瓦見なおす城下町
品川駅祝詞をあげてのぞみ止め
パソコンになめられ七十処置がない
指はさみ玄関ドアーに慣れてくる

大阪市 安達 はじめ

ジングルベル貧富の差なく鳴り渡る
関東煮き ここは男の別世界
紅葉の全山神の贈りもの
除夜の鐘過去と未来を分けて鳴る
胃の痛む話ばかりの十二月

大阪狭山市 矢野 梓

食事会もう気にしないダイエット
外食にしよう勝手な主婦になり
ずばり言われて納得をしよう
また揉めている聞き違い言い違い
正論が寄り切られそう多数決

交野市 森 本 弘 風

雨の日の函館山は雲の中

アイヌ語が地名に生きる北の島

雨に来て松島の島消えかかり

松島を借景にしないでずんだ餅

俺も来た弁慶も来た中尊寺

河内長野市 加 島 由 一

赤福は妻へ真珠は子の嫁に

繰り返す血はあらそえぬ親不孝

飲む支度しつつ夫婦の大掃除

パソコンにひらひら泳ぐ熱帯魚

カレンダー楽しい予定赤く書く

河内長野市 石 堂 潤 子

胃カメラを吞んでいるのに返事さす

かじらせてもろうています夫の脛

贅沢な茶漬だ鯛が乗っている

その昔松茸たーんと食べました

糠床を掻きまぜ今日も無事終える

河内長野市 井 上 喜 酔

若返りブランドゴルフの派手なシャツ

虫の音が先祖の供養してる墓地

熱狂のファンが虎を育て上げ

臆病はドック行くより竹を踏み

へそくりに決心させる十二月

河内長野市 村 上 直 樹

かつと咲く恋いま一度曼珠沙華

あどけない電話癒しの神の声

一翼を担って耐えた日の誇り

錦秋のはつと息呑む神の筆

一碗の飯豊かさを嘔みしめる

河内長野市 山 岡 富 美 子

時刻表ひらくと羽根が生えてくる

スベアーが欲しいノルマを追う翼

傷ついた翼をいやす屋台の灯

生きて来た証の皺を嘆くまい

母の忌を彩っている曼珠沙華

交野市 山 川 日 出 子

滑らない高層窓の軽業師

自分史の始まり満洲事変から

缶やシャツ色んなものにトラ旋風

赤い羽根 高見盛の大きな手

五十年私の仲間古ビアノ

岸和田市 岩 佐 ダ ン 吉

工場の灯消えサラ金が煌煌と

眠気さそう総理が実のない話

ゆつたりと生きようお金ないけれど

税金で支える銀行のノレン

三秒で話せるロマン抱いている

岸和田市 原

さよ子

かあさんの心が温い走り書き

お喋りが弾み眠れぬ旅の宿

こけなやのその一言ににじむ愛

一言が胸につかえて夜が白む

お辞儀して受話器をおいたよい話

岸和田市 木村 正剛

母さんの苦勞話にいつも僕

居眠りの紳士もちゃんと降りる駅

辞書繰って脳の軟化を食い止める

飼い主に似て誰にでも尻尾振る

紅白が終るとひとつ歳をとる

堺市 神原 文

マニフェストなんて言葉で誤魔化され

そつ気ない出会い大きな愛拾う

木犀の風とふんわり雲の上

終章へ翔ぶか歩くか転がるか

ライバルは夫と思う酒の量

堺市 齋藤 さくら

雀にも生きるルールはきつとある

次の世も父ちゃん尻に敷くつもり

よく笑う友がスランプ消してくれ

子育てを終えてもいまだ揺れている

兄と姉ばかりのカルチャー楽しけれ

堺市 源田 八千代

だんじりがそーりやそーりやと街を練る

許せない収獲物の搔っさらい

ファミレスにシルバーサイズ欲しい昼

ベベタにはベベタ同士のせめぎ合い

日本の行方しつかり見る株価

堺市 宮本 かりん

目の前の山が一步もゆずらない

寝転んで空の青さに同化する

ポーズする雲遊ばせる青い空

ずばり切る言葉に愛が洩れている

迂闊にもまたくり返す同じ怪我

堺市 矢倉 五月

いつだって母さん阿呆になれるから

ビール滲みやつと歯医者へ御輿上げ

長々とお礼言われて人違い

売り物になるが口癖自家菜園

病院長の奥様若死されました

堺市 山本 半銭

月の出よ火星の瞬き従えて

ゴッホには遠く向日葵冬に入る

確かな手順串カツが出来上り

絵手紙に季節をちよつと先取りし

たしなみは手櫛で済ます秋の風

堺市 志田 千代

吹田市 早川 棲世

チャリンコをゆっくり押して下校する

ペンキ塗り鼻の頭をかいてやる

土産より土産話を待っている

ルンルンと真ん中の子は飛んでった

古稀すぎて小春日和の日向ぼこ

堺市 和田 つづや

石榴爆ぜこの家の主別居中

愛情の豊かさ少し手に余り

わたくしが優先席を譲られた

停年後腹に癩癪玉がない

お早ようは殊に大きな声でいう

堺市 柿花 和夫

立秋に木陰拾って御堂筋

火星では地球観測年だろう

独り言 一人で居ても出る夜寒

うちの犬趣味は人間ウオッチング

御みくじにまかせるほどの安い恋

吹田市 山本 希久子

子には子の思い口数減るばかり

絵の中の母がだんだん小さくなる

DNAすぐ熱くなるすぐ冷める

終点に近づいてから揺れ出した

新しいことは素通り記憶力

みな同行二人発心みな違う(遍路道 5句)

接待のうどんへ布施として笑顔

立ち並ぶ地藏は行き倒れた遍路

酒都高知輪袈裟並んで夜の町

病む老母へ結願急ぐだけが孝

吹田市 太田 昭

日の丸よ君の懺悔は見たくない

秋風に仲間だろうと誘われる

捨てて来た男の影にぶら下がる

孤独なのだろう遠吠えよくひびく

盗人の理屈を聞いて民主主義

吹田市 穴吹 尚士

雑談になると俄かに弁が立つ

熱弁を生かす行動力がない

歯軋りをこらえお愛想笑いする

勝ったはずなのに戦死者増え続け

表では敷いてる振りを見せぬ妻

吹田市 大谷 篤子

善人で媚を売らない友にあり

魔女になりきると楽しい酒になる

善人の財布はすぐに軽くなる

お茶漬でゆっくり終るクラス会

善人が大きな声で笑ってる

四條畷市 吉岡 修

大法螺を白手袋が撒いてゆく
ひととおり世間に耐えた皺してる
告白をテストされてる気配する
ひと呼吸おいて返事の来た重味
福耳と見せてどっこい地獄耳

大東市 児玉 蛙

一病を抱いて甘える車椅子
筋書きの通り歩いて突き当り
節くれた指を真珠に嫌われる
居酒屋の男の背なに明日がある
階段に試されている老いの足

高石市 浅野 房子

味噌汁の香りで朝を目覚めたい
くじら幕引くまで勝負あきらめぬ
身内とて味方ばかりと限らない
失言をしては弁解ばかりする
異分子に寄り切り切られてはもう終り

高槻市 江原 秀夫

やっと来た自由の歳だ八十路坂
米寿まで目指す傘寿のマニフェスト
老い楽し元氣な妻とうまい酒
ひまという悪魔に負けぬ趣味一つ
一つ二つ茶番劇あり今日の幕

高槻市 乙倉 武史

胴上げをされる男にある冥利
原辰へ同情甲子園の秋
政治にも客寄せバンダ役もいり
晩節の花道飾るむつかしさ
米泥棒瑞穂の国のなさけなさ

豊中市 安藤 寿美子

売り言葉まともに買うてバカにされ
顔立ちは癒し系だがいけずです
忘れられた女の哀れ見えています
ぬいさしの布切りさしの布ばかり
朝刊のない日はんやり雲見てる

豊中市 吉田 あずき

熱い茶がほっと嬉しい今朝の膳
秋刀魚盛るために選んで買った皿
風呂敷に包みきれない昭和の荷
花柄のカードの裏は地獄絵図
諦めがつづき仏の顔になる

豊中市 江見 清

孫が来て祭の連れができました
妻は留守夕陽がおちて買物へ
五万人皆真ん中の甲子園
遅刻した言い訳はせず汗を拭く
妻の客二階でそっと帰り待つ

豊中市 水野 黒 兎

土砂降りにラガー走るをためらわず

傘と傘触れ合うも華 法善寺

曼珠沙華いのちは天にまた帰る

夕日見る男の背中溶けている

四つ角を四回曲がりまたあした

富田林市 藤 田 泰 子

コンピューターいつも冷たい答え出す

自画像を描くと男の顔になる

くもの巣が冬が来るぞと揺れている

赤星のように私も抱かれない

小休止 只今軌道 修正中

富田林市 中 井 ア キ

足踏みの私へ秋が落ちてくる

ライバルにしたい話の合うた人

逆流の絆ひとつが強くなる

ネクタイの裏に男の自尊心

七十の坂でしみじみ亡夫を恋う

富田林市 中 崎 深 雪

日陰でも元気に咲いてくれた花

子や孫と暮らしていても一人旅

アジアから孤立していく日本国

ありがとうという美しい癒やし語よ

スタッフの笑顔うれしい小医院

寝屋川市 江 口 度

日誌空白 満ち足りた日が続く

死んだふりすればすかさず蟻が来る

まずくともうまい言うときマイクには

語り合う家族豊かな海を持つ

豊作のマツタケ我が家にはそつば

寝屋川市 森

コンピニはたてこんでいて乾いている

忙しい人に急用助けられ

メイク終えにんまり魔女が降りていく

立ち話どこまで転ぶ孫自慢

鼻曲がるほどのくさやも旅の膳

寝屋川市 平 松 かすみ

鉢かつぎ姫生まれた里に住んでいる

自転車で自由に縫える街が好き

駐輪は二時間無料お買物

目も口も開けてベゴニア見ています

母の部屋年の暮れにも片付かず

寝屋川市 坂 上 高 栄

模糊としてあれよあれよと蜃気楼

不死鳥と名にふさわしい法善寺

リハビリは命洗濯する処

許す気になった心が軽くなる

傷心の友と一緒に泣いたげる

寝屋川市 籠島恵子

純粹の一途近よりがたくいる
ふるさとに登れぬままの山がある
アンパンが好きなどが似る夫婦
乗客がいつも少ない路線バス
動線を今日は動かぬ台所

寝屋川市 富山ルイ子

ありがとう幸せな日々ありがとう
大の字で犬と一緒に羽根伸ばす
軒並みにピッキング泥七軒も
山ほどの悩み綴りに直指庵
すぐ涙流す母見てもらい泣き

羽曳野市 安芸田泰子

笑い袋の底に溜っていた涙
同情の言葉を飾る他人事
満ち足りた心が見せる優しい目
悔いのない一日だったよい寝付き
ライバルを慰めている優越感

羽曳野市 徳山みつこ

パレードも銀杏もなにわ黄に染まる
たっぷりのおろしとサンマ食べている
虫の声湧いてわたしに満ちるもの
どんぐりも童話も拾う森の中
枯葉舞うおやもう冬の手紙だな

羽曳野市 三好専平

コスモスになって宇宙を見ている
三人も主治医がかえて生きてます
名水となり近所へおすそわけ
観音のうしろで笑う鬼がおり
横綱が悪役になる大相撲

羽曳野市 吉川寿美

十二月その場凌ぎの傘をさす
森を出て帰って来ない男下駄
回想のページで月日の走る音
その日まで病夫に嘘をつき通す
人並みという尺度が違う姑と母

東大阪市 中岡妙

田が消えて大型店のセール中
飾らない言葉はときに傷がつく
あれもこれも先へ伸ばして良く遊び
目印の赤い帽子でバスツアー
汗の分減っているかと乗る秤

東大阪市 笠井欣子

豊かさを書いた構図が笑っている
ゆれるだけゆれて捨てましょ恋の花
私から春がだんだん逃げて行く
ゴールまで喧嘩しながら山登る
疲れ果て御託並べてあおる酒

東大阪市 安永 春

藤井寺市 太田 扶美代

箸休めお多福豆がついて来る

音程も気にせず威風堂堂と

ボテボテと三味線けいこやつてはる

河川敷テニスコートは華ざかり

気がつけば早や一枚のカレンダー

藤井寺市 高田 美代子

飛び込んでいいとは誰も言うてない(道頓堀川)

生きるとは左右前後に敵がいる

頑張れと書いてなかった見舞い状

もうひとりのわたしと遊ぶ腹話術

催促ができないままで大晦日

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

朝までのいのち枕に預けてる

時々はショックの欲しい胸の内

葉が落ちて風の行方がわからない

相性のせいにしている負け惜しみ

天高く君呼ぶ声も高くなる

藤井寺市 中島 志洋

駆け足で時が流れる年の暮れ

紅白に知らぬヤングの歌が増え

台所姑に任せてアルバイト

大正の美人と入る露天風呂

来年はやつと不景気さるの年

お祭りの中で独りになっている

包帯の奥まで沁みる思いやり

お隣のチャイムに返事してしまふ

友達はいつも弾んだ声を出す

正直に生きると世間狭くなる

枚方市 海老池 洋

だんだんと仏の匂う詩日記

娘も門限破つてくれる日を願ひ

哲学の道ランニング車椅子

ゲーム機も塾もなかった紙芝居

残照にはつとずする日と空しい日

枚方市 安達 忠央

人恋し老いてますます祭りずき

パソコンのエラーエラーに老いめげず

面かぶりアホになりきる村祭り

新人類どこまで変えるニッポン語

改革が増えてゆくのは青テント

松原市 小池 しげお

美辞麗句ならべ空気を白くする

村人はみんないい人ねぎ坊主

噂とは違うニュースが飛んでいる

五人共男でメロン切りにくい

コンセント抜いて頭を休ませる

松原市 國 見 蘭 香

置きざりの案山子怒った顔で待つ
深追いはせぬが闘志は燃えている
裁くのは神様だけよ止しなさい
美しい言葉で隠す肚の虫
くたびれた服を着た人馴染み好い

箕面市 出 口 セツ子

舌先で人を揉めさす趣味らしい
人間で居たくて笑顔忘れない
騙される方が幸福だと思ふ
キヤッチボールしてる言葉にある温み
善良な顔留守電にお辞儀する

守口市 井 上 桂 作

なにげないお世辞の中の嫉妬心
じいさんと呼ばれ周りをたしかめる
立話 目下電話に変えました
北朝鮮は通らぬ拉致を詭弁中
経文は耳にいただけ意味不詳

八尾市 宮 崎 シマ子

あの世でもまさか夫婦じゃあないだらね
ロマンなどと見えない糸に操られ
芒一枝団子の味をひき立てる
見事な空白乙姫からの玉手箱
角まがった隣の町は違う彩

八尾市 生 嶋 ますみ

貸本の武蔵についできた手垢
娘さんの歳適当に若く言う
ライバルを誉めれば嫌な顔される
米のない頃の話が通じない
同窓会若く見えてもおおない年

八尾市 高 杉 千 歩

赤い羽根つけてる人が珍らしい
しんみりとヘルパーさんは聴き上手
おみやげのお守り札をもて余す
執着を捨てると恐くなってくる
もう一人のわたしが元氣演技する

八尾市 長谷川 春 蘭

雲一つおいてけぼりの秋の天
障子張る老いの手狂いなかりけり
美しく老いるを願ひ星祭り
農具皆小屋に集めて盆休み
踊りの輪回り来る児を心待ち

八尾市 内 海 幸 生

咲くまでの命を下さい種撒いて
掃く人の横では落葉踏めぬ靴
利子一円知らすハガキの切手見る
荒れ屋敷人恋うように百日紅
初期の絵にピカソがぐつと近くなり

八尾市 井尻 民

透き通る心になっていく襖
あたたかい一言霧が晴れていく
一枚のカルテに揺れている私
生きていく脆さの中の人間味
好きだから弾むボールを投げ返す

八尾市 神原 まさと

収獲の喜び盗む人非人
快便快眠身近にある宝
目薬を差したしるしの赤い丸
腰痛が天気予報をしてくれる
公約と言えばいいのにマニフェスト

八尾市 村上 ミツ子

マイナス一の暮らしにやつと慣れてくる
がんばるのやめてゆつくりあたりみる
わたしにも低い山なら登れそう
いらんこと言うて自分を追いつめる
毒舌の味方がひとりいる強味

八尾市 山本 宏至

年よりの恋 変化球多すぎる
医者の前聞きわけのよいお父さん
塗り箸にいかの刺身が逃げまわり
敬老会出席をしたことがない
十三夜たまには散歩いいもんだ

兵庫県 大谷 幸次郎

祭り笛吹きたし太鼓も叩きたし
芋畑猪が親仔でご挨拶
栄転の活字も踊るご挨拶
晩酌で今日の平穩締め括る
夕立が洗い上げたる二百軒

相生市 中塚 礎石

新婚の干場に目立つ作業服
干からびた五体しめらす恋拾う
癌告知嘘をつらぬく夫婦愛
電話では笑いこらげている二人
老いらくの恋堂々と趣味の会

芦屋市 黒田 能子

二人きり緊張してるエレベーター
秋の天風船ひとつもどらない
ルール違反人の日記を見るなんて
パノラマのごと水平線に日が沈む
まだチャンスなくて優雅にひとり者

尼崎市 田辺 鹿太

泣かすより笑わす方が難しい
読めないが領いて見る書道展
ありがたい事だ毎晩夢を見る
東京に負けたらあかん くだおれ
すかたんが多くなつたと自覚する

尼崎市 松下比ろ志

輸入松茸それでも夕餉秋の味

朝鏡 顎撫でてみる癖がある

絵にならぬ年金暮らしの横並び

脇見する暇もなかった向かい風

小さいがこころ安らく椅子がある

尼崎市 山田耕治

天下りしてくす玉の下にいる

何かあればすぐ転機だと思ふ癖

酒飲みの無遅刻無欠勤を支え

日記閉ず書かざることを思いおり

寒い日は重ね着ルック老い二人

尼崎市 長浜美籠

一喜一憂する日々だから老けられぬ

手短に言った話が縫れ出す

雨の日は雨の音色に漂うて

千変万化見ている駅の鳩時計

若人の焦りが並ぶ秋の絵馬

尼崎市 林昭三

初冠雪 素顔の山が薄化粧

東京に皆出なさって柿実る

丹念に刈り残された彼岸花

客が減りママが整形すると言う

子沢山せめて一人は女の子

伊丹市 山崎君子

アルバムに八十年の物語

身辺整理欲も捨てよと亡母の声

キミちゃんスミちゃん幼なにかえるいところ

金木犀秋はとなりの庭からも

ブルーサルビア炎えずに終る今日寒露

川西市 米原雪子

顔中を口にして孫喋り出す

綻びも破れも似合う若い人

汗かきで働き者に見られてる

ガラクタで身辺整理道険し

思い出を手繰り寄せつつ寝入る癖

川西市 西内朋月

絵はがきの月が御無沙汰詫びてくる

線香を燻べて飲んでいる残暑

眠れない時に広げる定石書

悪口の罪しゃっくりが止まらない

飲んだ朝頬を叩いて顔洗う

神戸市 山口光久

一休みすれば視界がまた開け

まだ欲があるから明日が生きられる

一合の酒が私の力瘤

札束が人を迷路に誘い込む

蟻曰く人間さまはよく遊ぶ

神戸市 木村 貴代子

西宮市 亀岡 哲子

声上げて笑う元気が出るように

メル友の素顔素姓は闇の中

お疲れの若者ねむる優先席

土俵にも上げてもらえずフリーター

子は宝 親も宝と言つてほし

三田市 久保田 千代

どんぐりを拾う小さい秋拾う

行楽の客が残したゴミの山

ゴミ袋我が家の無駄を知り尽くし

ゴミ袋さげて男を消している

食膳に秋が一足先に来る

西宮市 西口 いわゑ

壺のばらお疲れでしたありがとう

きっぱりとノーとも言えず渦の中

真つ青な空へわたしを放り込む

どんな時も本はメッソージをくれる

空青し子はそれぞれに港もつ

西宮市 山本 義子

鈴虫はシナリオどおり鳴いている

人形の位置かえてみる応接間

丸木橋むかしはヒョイと越せたのに

シャツ一枚着たり脱いだり季のうつり

うかつにも喧嘩相手をまぢがえた

ゆつくりと花を選んでなごむ店

トルコブルーに暮れてふるさと夢の中

激辛麺 胸の悩みも汗と消え

主治医にも子にも内緒の一人旅

冬布団出すにも二人助け合い

西宮市 井上 松煙

ギャル御輿天神さんもお満足

誘われて私つつまず輪の中へ

拙作もうきうきしてる文化祭

実行をしない知識が増えてゆく

コスモスのダンス見飽きぬ日向ぼこ

西宮市 秋元 てる

生きている確証欲しい老いて旅

旅なれや瀬戸の落日果てるまで

高齢を武器に相席取りしきる

方言も効果の一つ旅楽し

最前列拍手こまめに義理を立て

西宮市 門谷 たず子

いつまでの快楽か露天風呂の月

心電図が乱れて冬が近くなる

身の内の鬼をなだめて日が昏れる

手術記念日やつと二年が過ぎました

終章になぜか待ってた罰ゲーム

西宮市 坪井孝一

ITがペンもノートも奪い取る
他人の名忘れる事がうまくなる
乾杯の時は仲間と穏やかに
酒に合う肴より先ず人を選ぶ
お父さん仮面屋台に置いて来た

西宮市 長谷川 淳

ごめんねと心で泣いて猫捨てる
八時だなテーマ音楽聞こえてる
残暑から断層あつて秋冷へ
無縁の墓夫婦の杖が挿してある
ポインセチア街に溢れて十二月

生駒市 飛永ふりこ

胸の中阿修羅ときどき揺れている
バツイチの苦さをバネにマイウェイ
突然に足を蹴られる梅田地下
スマートになれば着れると捨てられず
シャンソンに恋路重ねて秋夜長

香芝市 大内朝子

それなりの達成感へまだやれる
手の平をかえすまさにぎよつとする
苦労した友がとつてもよく笑う
阿呆になれ あほになれよと広い空
カマキリの何処見てるやらにらめっこ

橿原市 居谷真理子

ずでんどうやがては立てぬ時が来る
ホスピスの朝新聞が配られる
家一軒あつてせつない遠景色
真つすぐな木だけ伐られて連れ去られ
水族館人は淋しく服を着る

橿原市 安土理恵

他人ならほんに夫はいい男
遺言書 健忘症になる前に
ひっそりと人待つ軒に来る時雨
何故だろう夫とタンゴが踊れない
なあ獺よもうやめようよダイエット

奈良市 天正千梢

筑波山雄岳雌岳は雲の中
リストラに妻はゆうゆう舵をとり
縄電車仲良く乗つてもう傘寿
二度三度石橋たたき渡らない
片道の切符を持つて青テント

奈良県 渡辺富子

祭りの夜天狗に娘さらわれる
みちのくの血潮爆発するねぶた
幸福論私の書架に積んである
ダイエットできて小皺が増えました
てっぺんで輝いている木守柿

和歌山市 桜井千秀

はぐれ者同士で話弾み出し
良いことが続いて籠を締め直す
ひとり暮らしの気楽さからか斑惚け
後味よい毒舌貰う別際
ときめいて脳細胞へ栄養素

和歌山市 木本朱夏

おはようと野辺の花にも声かける
紀ノ川のほとりに生まれここで死ぬ
図書館の森で充電しています
矢印に導かれゆくお手洗い
来る人が来て華やかになる宴

和歌山市 牛尾緑良

熱燗で今年一年締め括る
温泉にしようか二人の羽繕い
コーヒーマシンの合間に別れ話など
靈感があればと思う宝クジ
微罪まだ残したままで年を越す

和歌山市 福本英子

スポーツの日を替えるから雨が降る
雷鳴で起こされ一日しゃんとする
道一つ曲りそこねる秋の天
とんぼりの橋もガタ口も虎嫌い
安心のためとケータイ持たされる

和歌山市 松原寿子

肩の荷が降りたら空気踊りだす
そうなると読んで次の手打っておく
根性が甘い涙を赦さない
塀越しで犬のあいさつ受けておく
砕け散る石にも意地はあるだろう

和歌山市 田中みね

家長という太い柱に凭れ切る
傷心へなんとも言わずに抱き寄せる
こっそりと塗って鏡へどう若い
癒やし系の顔で周囲を和ませる
午後からの予定へ昼寝入れている

和歌山市 青枝鉄治

お日柄もよろしくみんな借り衣裳
うちの娘も才媛となる披露宴
旧姓で呼ばれて和むクラス会
流行を追わぬと決めて古を着る
勝ちとった予算余して叱られる

和歌山市 武本碧

熟したらきつと渡ると決めた橋
よく出来た部下で気楽な回り椅子
群れている方へ勝手に動く足
何度でも咲いて見せます再生紙
枝折れない柳のように生きている

和歌山市 西山 幸

傾いた家にもまるい月が出る
いさぎよく別れた鬱がまだ続き
敗けた日は辛いカレーを食べに行く
投函をするところの音がする
無言電話だから無言で応えよう

和歌山市 吉村 さち子

ふつくらと湯豆腐浮いてくる初秋
二つ返事不安が先になってくる
退屈な話に鮎のお裾分け
わかって利用されてる親心
ストレスを溜めてグルメの食べ歩き

和歌山市 細川 稚代

素人の剪定鋏よくはずむ
故里の原風景は夢の中
空澄んで気にかかること多かりき
重ね着へ恋しくなった熱いお茶
まばたきの数ほど恐いニュース聞く

和歌山市 福井 桂香

愛子岳に雲なく屋久の海は風ぎ（屋久島を訪ねて 3句）
はろばろと来て屋久杉に癒やされる
仏陀杉 釈迦の在世が偲ばれて
振り向かす金木犀の自己主張
豊潤な大地とおもう母の胸

和歌山市 古久保 和子

強かに街のカラスの太い足
ブリブリと歩く若さの似合う街
かあさんと夫に呼ばれ無抵抗
松茸も蟹もかまぼこで済ます
お相伴という妻の飲みつぶり

和歌山市 山口 三千子

一休み長くエンジンかららない
脳細胞萎縮記憶がとぎれだす
人の世も儚く滝の水涸れる
茶柱に気の緩みから指はさむ
約束をそつと見ている薬指

和歌山市 木村 初子

浮雲の一つに乗って娘の許へ
あるがまま生きて詩あり夢もあり
ばあちゃんの窓を赤トンボがたたく
眠られぬ夜毎心経くり返し
懸命に生きて十指にきざむ詩

和歌山市 玉置 当代

巡り会い火星と月を見る至福
遺伝子を継いだ因果で同じ癖
治安悪化 日毎に滅びゆく地球
秋祭り金木犀となれずしや
親離れ谷の深さを知らされる

海南省 三宅保州

倉吉市 松本よしえ

十二月の実感折り込みが増える
ああ娘 臍の整形すると言う
許容量以上を背負いすぎないか
一身上の都合に深いわけがある
匿名の深さを測りかねている

海南省 谷口義男

喧嘩する子供の声が消え失せる
耐えるより利口に回りたい世代
単純に行動起こす模倣犯
泣けるだけ泣いた女は強くなる
崖つ測立った時こそ出る真価

海南省 堂上泰女

ドクターを信じて上る手術台
曼珠沙華 一氣に炎えている原野
初恋も時効と燃える同窓会
懐メロが流れてきそう葺の家
秋空がこんなに素敵 百日紅

和歌山県 中後清史

粗大ゴミなどと言わせぬ予定表
痛いところ突かれて補聴器を外す
運がよい人と他人は片付ける
音無しの構えで待っているチャンス
言うことを聞いてくれないダイエツト

青い空子に羽搏きの刻が来る
図書館のカードでグリム童話集
野放図なカードあれから恐怖症
イランにも踏み絵があった自爆テロ
賭けごとに溺れ喇叭がやめられぬ

倉吉市 山本玲子

引つ込み思案損が先行してしまう
口だけは達者になった祖母見舞う
ぞくぞくと背筋を襲う秋の冷え
バス旅行元気で往くが寝て帰る
手の届く位置に電話をおいている

倉吉市 森川あらた

弱いのでわがままばかり言っている
怒鳴り声聞くと心臓止まりそう
歌唱力ないが自分に酔っている
人込みをさける息切れしないため
神様の寝床は雲の上にある

倉吉市 米田幸子

善悪がわからんようになりました
美容院の椅子に掛けると船を漕ぐ
一滴の悔し涙を撥条にする
遅しやばあちゃんリング丸かじり
あなどった海にうっかり吞まれそう

倉吉市 牧野芳光

長いこと待たされてハイお大事に
千切れ雲風の形になつていく
じつと見る鏡の顔が困りだす
聞かなくていいことばかり耳が選る
芸術の音に聞こえる鎗の音

倉吉市 野口節子

雑草の叫びが痛いほど解る
長寿国担う世代を思いやる
効きすぎる鼻で縁談まとまらず
梅干になるまで生きる家系です
先回りする友人に肩が凝る

鳥取市 植田一京

母は怪物何んでもお見通し
ときめきと別にうどんの食いつ振り
寝て食べて運の開ける日を待とう
人生は謎解くためにあるんだね
シヨックにも慣れて今日まで無事生きる

鳥取市 武田帆雀

見え透いたお世辞聴いてる菊の鉢
依怙最良して可愛そう病い菊
菊の枝 要所要所を盗りに来る
よく飯を食えばかあちゃん嬉しそう
鳥の脛箸置きにして飲んでる

鳥取市 徳田ひろこ

あちこちで警鐘が鳴る身が一つ
弦月に掴まり待つているチャンス
セールの声が土足でくる電話
手のひらに怒濤を抜ける道がある
負の章を抜けて人生バラ色に

鳥取市 倉益一瑤

ガラスの靴主婦も履きたい時がある
リハビリの杖に余力を試される
噴火する前の無口は恐ろしい
力むのはもう止せと夕焼けが言う
居直つてみたら呼吸が楽になり

鳥取市 春木圭一郎

人のためまず出来ることやつてるか
三猿もいいがずばりと言う勇氣
ウマが合う友もいるから抜けられぬ
友情はささいなことで育まれ
リーダーはいつも落度を探られる

鳥取市 岸本宏章

目の位置を変えると粗も見えてくる
年金が入ると消える軽いうつ
食べ残し昭和一桁にはできぬ
皇室の御辞儀のような稲の出来
主催者の発表鯖を読みすぎる

鳥取市 岸 本 孝 子

鳥取市 福 田 登 美

ときどきはうどんで胃腸ととのえる

本当のファンは川へ飛びこまぬ

血糖値実りの秋が怖くなる

すばらしい人生今を絵に残す

午後三時また飲めそうな気にさせる

鳥取市 録 沢 風 花

ひとりばち急いで帰ることもない

温暖化季節はずれの花が咲く

名残り惜しここを先途と虫が鳴く

挨拶がこだまになって還る過疎

試着室 女ごころを弾ませる

鳥取市 有 沢 せつ子

選ばれて出た玉入れは皆外れ

商品券普段買えない物を買う

虫たちの楽園となる売れぬ土地

秋らしい風肩先を吹き抜ける

編集後記見えぬ苦勞も読んでいる

鳥取市 永 原 昌 鼓

金のあるうちは回りに人も寄る

何彩に染めていくのか孫の画布

迷ってるうちに幸運逃げて行く

一流の人は言い訳などしない

神だのみしても幸運寄って来ぬ

木曜日必ず来てる焼いも屋

不況にも障子張り替え暮れを待つ

愛読書抱けば心に灯が点る

肋骨のひびを守ったコルセット

介護の汗心の襷に染み込ます

鳥取市 美 田 旋 風

好きな飴しやぶる老母の仏顔

火傷せぬように間を置く恋心

横文字が溢れる日本どこへ行く

何でだろう娘がへそを出したがる

墓場まで連れてく秘密整理する

鳥取市 加 藤 茶 人

汚くて臭い代名詞が親父

神様はいたずらが好きブスと美女

愛情が冷めるとレンジ役に立ち

まあ仕事あるだけいいとして師走

親が子に迎合してる反抗期

鳥取市 山 宮 愛 恵

スランブを解してくれるいい便り

尺取虫の正確さには負けている

理由ありの品を選ぶのに汗が出る

単純にのっておりますお人好し

その時はその時回れ右をする

鳥取市 福島 庸二

沈滞の雰囲気変える徳な人
修羅場でも心の余裕忘れない
晩酌の出来る幸せかみしめる
二人して歩んだ過去を刻む音
お祭りが好きでいつでもかつぎ役

米子市 政岡 日枝子

神々と繋がるものを持つ田んぼ
どこまでも生きようとする太極拳
ささやかな気遣い湯豆腐がならぶ
歩け歩け鮎のひとつで癒やされる
どこまでも我が血脈の未完成

米子市 門脇 晶子

コスモスの海を泳いで浮気する
妥協してからは口かず多くなる
下駄履きをして見たいのは車椅子
今朝もうろこを一枚はいで夜が明ける
知恵袋もてど解けないボケの紐

米子市 中井 ゆき

ケセラセラそれほど長い道でない
群生のコスモスゆれておしよせる
花屋さん三軒のぞいて落ちついた
ステップの低いバスだよほっとする
今朝もまだ化粧してます生きてます

米子市 野坂 なみ

政局へ秋の舞台が動きだす
群衆の乱舞はとかく行きすぎる
美代ちゃんの下駄をかくして泣かせた日
どこまでも独り立ちして矢面に
大銀杏 散華のように舞っている

米子市 光井 玲子

陽が沈み湖はこしかた振りかえる
こころの病いやす葉は愛だろう
つつがなく人生の午後通りこす
無理からぬ話にふつと気を許す
散る日まで笑い袋は離されぬ

鳥取県 鳥羽 直市

浮き沈みしながら余生泳いでる
さり気ない一言で知る人情味
よく噛んで食べるご飯に味が出る
親と子の橋をしつかり架けておく
きつと来る米を大事にする時代

鳥取県 鳥羽 玲子

完成の納戸静かに日も暮れる
男みな技に命をかけており
薄味に馴れて体調リズム生む
つい油断して大役が肩にのる
火星みる我が家の窓のお客さま

鳥取県 新家 完司

秋深し郵便受けに請求書

散髪をして新しい顔にする

午後六時晩酌待ちの顔になる

スイッチピッ好きな女優をお茶の間へ

この星の端っこ借りて蒲団敷く

鳥取県 小谷 孝美

合鍵で君のハートを覗きたい

家計簿の赤字夫がスポンサー

欲望に溺れスッカラカンになる

愛される今地獄など考えぬ

携帯を駆使できぬけど持っている

鳥取県 太田 幸枝

解散で日本列島動き出す

二三人寄ればそろそろ逝く話

よく出来た姑で嫁さん目立たない

辛抱が金婚式に花開く

曲った事いやで貧乏しています

鳥取県 奥田 保子

人生は一回きりと思わない

ガッツでは誰にも負けぬはずだった

スランプの出口なかなか見付からぬ

調子よい人には一寸気を付ける

年金のおかげ何とか食べている

鳥取県 平井 栄翁

落ちそうなぼたんに縋る老いた妻

振り向けばまたねと誘う目に見える

慰めの言葉にうそも入れておく

そばの花咲かせて休耕田守る

戦争を憎めば浮かぶ竹の槍

鳥取県 近藤 春恵

子をかばう母も時には鬼となる

人妻に溺れた傷が疼き出す

泣き笑いして病む姉と語り合う

寝たきりへ笑顔つくって会いに行く

再会の涙絆を強くする

鳥取県 田村 きみ子

エリートになれずに農を守りぬく

わたしなら踏絵はヒョイと跳ぶでしょう

温い目と出合うとわたし赤くなる

大根がスクスク育つありがたさ

午前二時ザワザワ風が眠らせぬ

鳥取県 山本 正光

大山を今朝も拝んでいい笑顔

避けられぬ老いを死ぬまで楽しもう

喜寿すぎてまだ燃えつきぬあばらほね

凜として華やぐ君に魅せられる

妻百句これも供養とまだつづく

鳥取県 澤 裕子

用心が過ぎて幸運通りすぎ
あやまれば今なら出来る仲直り
給食のメニューにヒント貰つてる
ゆるめても妻は手綱を離さない
すっかりと信じて罫にはまつてる

鳥取県 前坂 なお美

髪を切る昨日のわたしグッドバイ
わたくしと遊んでくれてありがとう
雨蛙おまえもひとり私もひとり
目を皿にしてバーゲンの群れにいる
三姉妹の真ん中にいて太れない

鳥取県 埜 寛子

解散バンザイいざ国盗りの進軍歌
絵にかいたマニフェスト餅甘く見え
それで今テロが消えたとお思いか
戦止み日毎戦死者ふえていく
他人の子をやたら連れ去る闇つづく

鳥取県 土橋 はるお

あいさつに笑顔も添えてしたいもの
捨て難い男もくもくたくましい
図書館をたくさん利用した背伸び
乗るは乗ったが降りる切符が見当たらぬ
単身赴任よろこぶ夫にご用心

鳥取県 土橋 睦子

スランプに呼んでも夫は知らんふり
臆病で早目に受ける厄払い
一物を腹に収めて歳の暮れ
無限だと思ふ地球も病んでいる
富士さんに恥をかかしている日本

鳥取県 石谷 美恵子

悠々と河は見たこと喋らない
いい歳をしながら辛抱が足りぬ
糖尿へ目の毒旅のバイキング
カスばかり掴む不運な薄い耳
嬉しくてすっかり乗ったお世辞口

鳥取県 村上 信子

生野菜たっぷり食べて血はきれい
さつま芋冷夏に負けずよく太り
木枯しと共に父の忌めぐつて来
良い人にときどき罰が当たつて
返事だけハイハイ気持後ずさり

鳥取県 西原 艶子

懐が軽く淋しい奇数月
家計簿が直撃されている米価
本業は主婦年金に養われ
大臣を変えても暮しよくならぬ
いつからか狂い始めた羅針盤

鳥取県 石尾 かつ乃

嬉しい日目覚まし時計抱いて寝る

盛会を機はずして待つて居る

時々可愛い孫とする内緒

玉の汗出して奉仕の輪の中に

結論は一風呂浴びてからにする

鳥取県 佐伯 やえ

柿酢のおかげ理想どおりに痩せました

ぼろ雑巾まだ捨てられぬ用がある

世をすねる掌に夕焼けが美しい

梅もどき愛した母の七回忌

煙突のけむりが書いたわらべ唄

鳥取県 西川 和子

師走風について行けない身の動き

天井が回り二日も寝てしまう

ベッドから聞く公園の子等の声

足跡を残す言葉を模索する

定休日午後は我が家の年忘れ

鳥取県 山下 節子

背伸びして隣の喧嘩覗き見る

ゆっくりがすっかり板に付いた老い

二世代がつろく合わせてまるく住む

決めてから何だかんだと愚痴こぼす

やっとこさ建てた家には子等住まぬ

鳥取県 谷口 次男

大晦日鳥取砂丘紅白に

鬼なのにやさしい鬼で村八分

甘柿と渋柿分ける鳥の舌

中指は涙を拭いて汗も拭く

国会へ押しかけないねブラカード

出雲市 竹治 ちかし

子の新居 親の気持は解さない

チャンネルは一つチャンネル権二つ

幸せも不幸も知っている布団

それなりに皆患っている胃腸

古戦場 歴史を変えた風一つ

出雲市 多久和 敬子

一言が今夜の私眠らせぬ

嘘の無い手の温もりを信じてる

いい知らせお米研ぐ手も弾んでる

クラス会優等生の影薄い

走ってもなかなか越せぬ母の背

出雲市 佐藤 治代

CTが内部告発してくれる

肉体のへこんだところが病んでいる

太い足太いまんまに歳をとり

黒髪になるやもしれぬ昆布汁

誰に見てもらおう訳でもない化粧

出雲市 園山 多賀子

戒名を用意してから二十年
秋刀魚焼く煙は人を疑わず
小春日に羽化が始まる仮面脱ぐ
丸い輪の中で誰かが耐えている
出る釘は打たれる覚悟万全だ

出雲市 吉岡 きみえ

手を振って一——二歩いてみる
ねそべってあああひとりもいいもんだ
正直な写真にがっかりさせられる
人間が笑わなくなったなぜだろう
幸せが明るく点っている隣

出雲市 城 多喜

言い訳を黙って聞いている白髪
庭の木に淋しがりやの鳥が来る
箱庭に小さな四季を植えておく
半月に私の窓を覗かれる
ワntenポずれて泣いたり笑ったり

出雲市 伊藤 玲子

もう少し一緒に居たい青い月
看板よ屈んでおくれいい月だ
つなぎ目を濡らして強くなる私
ときめいて覗くネットの小宇宙
機械化にうろろしてる古狸

出雲市 岸 桂子

結論が延びたまんまの夏帽子
母と子の一味違う設計図
いい別れ握手を長くなくする
泣いて笑っていつしか丸い石になる
ふところの花火は耐えることに慣れ

出雲市 小玉 満江

浅草で迷い子になったおじいちゃん
一人飲むお茶は空しや秋の風
いただいたカバン チャイナと書いてある
松茸を信用しなくなつて秋
米ぶどうしいたけまでも取つて逃げ

出雲市 小白金 房子

残暑耐え野菜息づく秋の風
収穫を祝う鎮守の神楽笛
四世代揃う笑顔を撮つておく
節くれた手に生き甲斐の夢を編む
新米をあの子この娘へ里の味

松江市 津川 紫晃

浮かぶ月掬えば洩れてまた浮かぶ
さようなら たった五文字にあるドラマ
腕組みのまんま無口になるも秋
一コマは空けておきます待つてます
枯れてゆく草の命を土が抱き

松江市 川 本 畔

ちよつぴりの老いを見つけて目をそらす

願いごと斜めに書いてしまう癖

燃えるだけでもえて虚空をつかむ蟬

トイレット至福の時をみつけたよ

いぬふぐり大きな声を出し給え

松江市 佐野木 み え

修羅場を幾度くぐったこの判こ

大社から出雲の阿国蘇る

障子張り一際映える茜色

柿熟れて豊かな空を仰ぎ見る

棚田から実りの秋がやってきた

松江市 銭 山 昌 枝

結果論やつぱりあなたしかいない

時効でもとてもあなたに話せない

あるがままやさしい風が吹いている

旅の宿ごそこそ葉服む姉妹

ヨサコイを踊る余力を溜めている

松江市 三 島 湊 丘

茜空話し尽きない鬼瓦

谷川の落葉は海へ遠い旅

善人は腹の底まで透けて見せ

割り勘と聞いて見直すお品書き

ご機嫌がいいのか妻の長電話

島根県 森 茂 美

時間待ち火星を探す無人駅

赤とんぼ乱舞する日や夏が近く

片仮名で書くヒロシマという地名

どくだみの匂いに偲ぶ母の影

敬老日あまり褒められ肩がこり

島根県 榊 原 秀 子

服選び派手目なものに手がふれる

慰めに少し送った柿の艶

何となくただなんとなく仰ぐ空

救急車大事な友をのせてゆく

慰めの言葉もなくて抱く肩

島根県 持 田 多 輝 子

幸せは昨日と同じお茶の味

幸せを受けつぐ祖先の墓洗う

母のとし越えて感謝の花手桶

風化した無縁仏に花手向け

判断がつかぬ私の委任状

倉敷市 井 上 富 子

男らしい人に魅かれるイヤリング

ホルモンの乱に慌てる更年期

味のある文章手紙の底力

惚れているちよつかいばかり出している

出会系サイト悪魔が笛を吹く

倉敷市 小野 克 枝

濁り水いつか大河の夢を見る
貝の砂妻に言いたいことがある
幾百の吐息を聞いた星だろう
近況のただ一声を母は待つ
帶きり泣かぬ女になって行く

岡山県 小林 妻 子

おばあさんの前で弱虫おじいさん
怒ったら負けです妻の思う壺
大勢の意見納得しておこう
百姓も暑中見舞のいらぬ夏
百姓の痛いところ突く米盗人

岡山県 大石 あすなろ

肩のこりほぐす三時の桜餅
サスペンス秋の夜長の拾い読み
向き合つて歳のことには触れずいる
急がねば青いテントに冬が来る
ハッピーな人に分らぬこの苦勞

岡山県 山 本 玉 恵

自惚れは止しなと歳が顔を出す
背比べは止そう所詮はカタツムリ
風一掬 噂まとめて舞いあがる
空想の狭間を横切る飛行雲
負け犬の背なにはんのり昼の月

宇部市 平 田 実 男

父の齢越えても父の背を越せず
タクシীরメーターへ酔い覚まされる
口数が少なくなると怖い妻
鑑定士家宝を粗大ゴミにする
二枚目の舌で開く選挙戦

竹原市 時 広 一 路

退屈の虫 鉛筆が追っ払う
カタカナが苦手で花の名も忘れ
飛び上がる一瞬地球から離れ
海風いで真つ赤な太陽愛でている
全部好きファンに理屈など要らぬ

竹原市 正 畑 半 覚

人間を忘れて生きていやせぬか
雪女一夜の宿の戸をたたく
安楽死したいなどは虫のいい
ぜひばくに飾つてほしい青いバラ
いつ骨になつても悔いは残すまい

竹原市 森 井 菁 居

美術館通いが癖になつて秋
たかがカラオケされどカラオケ忙しや
年寄にもてると手相に書いてある
慌てまい一晚置けば出る答
添書きの方に本音が詰めてある

竹原市 古谷 節夫

凍て付いた火星を覗く宇宙ショー
善人の境界線で死んだふり
ふるさとの時計ゆっくり時を告げ
赤提灯イキナ女が独り酒
躓いた石に教わる明日の風

竹原市 岩本 笑子

クリの皮そんな意固地にならずとも
坂いくつ私の好きな道だけど
孫抱いてかたい話をやめにする
生きざまのそのままに靴ちびており
足跡の一つは妻と信じ切る

広島市 森田 文

気品ある街並み竹のオブジェたち
一年がこんなに早い一周忌
うっかりと子の厄年を忘れてた
かけっこに着順はない運動会
敗北のかたちで眠る議員さん

広島県 福島 万年

揚羽蝶 葉っぱの味は忘れない
ブッシュからオレオレという請求書
バスデー和菓子が似合う六十九
殺されたゴキブリ何もしていない
治っても治らなくても治療代

広島県 藤解 静風

浄土への通行手形いただいた
浄林静薫居士の手形が立派すぎ
黙ってはもう従いて来ぬ妻となる
婦唱夫随 風邪も妻から移される
鈍行の夫婦みちくさしてばかり

美祿市 安平次 弘道

闇魔帳に僕の名前が載っていた
新聞の切り抜きみんな宝です
切り捨てた過去が私を追って来る
ゲームセツト女は勝ちを急がない
年金があつてあわてぬ二度の職

唐津市 久保 正剣

真っ直ぐに生きて無冠に恥じぬ父
恋破れ途中下車などしない駅
百歳を目指し八十路の万歩計
DNAどの子も母に味方する
神隠し噂辿れば不審船

唐津市 山口 高明

鴛鴦と言われたふたり離婚する
儲け時来たと不作へ手を叩き
終電へ駆け込む前の一気のみ
同僚の世渡り上手従いてけず
狂いたい日もあつたわと独り言

熊本県 岩 切 康 子

後継ぎは呆けないうちにして欲しい

同齡の欠席気になりテレコール

省略をするから本意伝わらぬ

朝市に慣れて注文一つする

洗濯のつづきは頼み外出し

熊本市 永 田 俊 子

少子化を嘆く祭りと地藏様

稲光り心の傷を刺してゆく

我慢した言葉を入れる箸袋

うしろの顔色読んでいる背中

監獄がよいと犯人言うそう

東かがわ市 池 内 かおり

自画像の眉間の皺は消して描く

秋本番友から届く栗の艶

お札しかないので弾む募金箱

警察を過ぎて元気な街宣車

回る寿司マゴに指図をされながら

東かがわ市 川 崎 ひかり

許されて許して回る夫婦独楽

喝采が聞きたくピエロまたおどる

老女だって若い男の方がいい

最後にはやはり神様ほとけ様

とても倅せ夫と二人で旅に出る

東かがわ市 原 賢

風向きはどうあれ私の道を行く

天高し三段跳びをしてみよか

ひかえめの想いが車間距離をあけ

古希すぎてまだチャン付けで故郷が呼ぶ

汗かいて三度の飯が食える幸

東かがわ市 清 川 玲 子

送迎のバスに母子の弾む朝

気弱になった友の再起を願つてる

観光慣れの鹿と一緒にハイチーズ

時間守らぬガイド泣かせの居るツアー

白露の季 庭先かざるハギさきよう

東かがわ市 伊 勢 八重子

黒い手が虫も殺さぬ顔で来る

好きと言うだけで本心まだ読めず

他人から見れば些細な事ばかり

赤裸々な話に何時かひき込まれ

土地付きの家でも同居嫌と言う

東かがわ市 神 保 坊太郎

泣くほどでないぞと影に嗤われる

方向に迷って父の樹をゆする

冷めた目で見るとハッキリした正体

甲賀の血が流れ時々雲がくれ

坂道の小石夢にも踏むなかれ

松山市 高橋 宏 臣

高知県 小澤 幸 泉

欲少し足してマニユアルから外れ
スキップをしたが軽く見られそう

老斑の数へ男もみる鏡

独り言だんだんあがるオクターブ

痛い目に遭った骨から強くなる

松山市 丹 下 美津子

野仏におすそ分けして秋彼岸

新米が里から届くまつり寿司

まつり囃子流れて五感騒ぎだす

八十八ヶ寺大師残した杖の跡

一つずつこなしてゆこうスケジュール

松山市 古手川 光

今夜咲く月下美人を待つカメラ

木犀の香りの方へ回り道

バラ色の夢を見ていた頃がある

賑やかでないが綺麗な水空気

震度六 明日はわが身かも知れぬ

愛媛県 中 居 善 信

実篤のカボチャに土の匂いする

鍵をせぬ蔵のお米が盗られない

諦めの悪いおとこよつゝ本音

擁締めた指の隙間を水が漏る

種なしのブドウに明日の話など

ふと思うこのまま消えて逝くのかも

空白の時を楽しむ老いの部屋

原色を重ね描いて老いつづけ

人生のアカ胃カメラに溜めてある

自画像の最後の色が決まらない

高知県 赤 川 菊 野

あの人が来ると空気がショートする

赤ちゃんのこぶし無限をにぎりしめ

正義感男に勝る土佐女

ロボットも今にリストラされるだろ

アリランの唄が聞えるエアメール

高知県 北 川 竹 萌

勿体ない思いで老いの生むセンス

卒寿越え誠実一路淑やかに

秋晴れの遊歩道鳩の送迎で

誘われて名所見物今日も無事

まんじゅしゃげ里道行くと始祖の墓碑

高知県 小 川 てるみ

女にも幾つか恋の偽証罪

自由化の波に弱者がはじかれる

郊外の余得に虫のシンフォニー

印刷にされて紛れもない受賞

おしゃべりがしたくて雲を呼びとめる

弘前市 高瀬霜石

飛び飛びに飲み会がある十二月
何もできないが焼き芋買つて行く
不揃いの林檎よクラスメイトたち
ともだちが死んだらどこ雪が降る

弘前市 福士慕情

スピーチを頼まれそうで目を逸らす
試乗会欲しくなるから遠慮する
目立たない石にもあった自己主張
目高にはメダカの餌が売っている

弘前市 櫻庭順風

腹一杯食べるによいと相撲とる
敢闘をパフォーマンスに秘めている
実直な人柄を知るその仕草
教職を投げて飛び込む国技館

弘前市 一戸ツネ

てのひらの温みが消えた命の譜
ずぶ濡れの俺を呼んでる弥陀の声
じゃじゃじゃんと激しく消えた命の譜
お静かに今日の暮しに幕をひく

弘前市 岡本花匠

初冠雪里人急かす冬囲い
張りつめた五体を癒す紅葉狩り
きのこ狩り笑いをこぼす鍋の味
八十路まで歯の健康へ夢繫ぐ

青森県 小寺花峯

振り返る過去でおろかな釘拾う
孤独から離れられない舌下錠
風力三我が家の池に波が立ち
自販機の酒を手繰っている右手

滋賀県 中宗明

ドジを踏み瘦せる思いの苦勞する
夢に見る尊敬される先生だ
古希来ても正義の炎残っている
決勝戦目指し頑張る球児たち

亀岡市 井上森生

スタンドが戦力となる十人目
敬老のエールをくれる孫や孫
生き甲斐はこれぞ私もマニフェスト
週二日働く暮らしのゆったり度

大阪市 清水絹子

苦勞して育てたつもり育てられ
虫干しの母の形見と小半時
病む友へせめて夜なべの千羽鶴
老人の証明ですと無料パス

大阪市 本間満津子

豊かなくらし何かだいじなものが欠け
日薬がやさしく癒やす胸の疵
宝くじもし当たったら怖いなあ
吾ながらしゃべりと思う話好き

大阪市 中田 あい子

石だたみ水打ち露地に月を待つ
子にあまい親が子の道まよわせる
やれやれとおもたらアカンが母のくせ
食いはずれない唇の福ぼくろ

大阪市 熊代 菜月

腹立てた数だけ心にしわが出来
思い出も写真も色が変り出し
毛虫さえ農薬なしを知っている
遅刻した夏が邪魔する更衣

大阪市 小泉 ひさ乃

人はどうあれ夫敬う妻でいる
老いたかな優しい言葉欲しくなる
リストラの世に年金のありがたさ
お粥頼めばレトルトを買ってくる

大阪市 榎本 舞夢

待合せ時間ゆつくりとつて行く
月の出に介護の帰り癒される
二つ三つ行方不明の老眼鏡
満月を両手で掬う露天風呂

大阪市 津守 なぎさ

にわか雨相合傘も久しぶり
天高しスリムな服がうらめしい
まわり寿司どちらの席も家族づれ
大輪の菊に魅せられ歩をとめる

池田市 岡本 吉太郎

欲ふかく生きて八十路になりました
だまされて嘘をつかずに生きている
あらためて銀河の偉大さに感激
負けても負けても阪神ファンでここまで来

大阪市 津守 柳伸

無駄遣いさせるチラシは見ない主義
遠い日の想いがよぎる細い月
独りではさまにならないプランデー
真つ白に干し鼻唄がついて出る

和泉市 西岡 洛醉

空白を憩う窓辺が姦しい
無人駅すすき静かに秋を告げ
野仏に明日の指針を問い掛ける
マニキュアの赤に女の妥協癖

大阪市 松尾 柳右子

置き時計四方にあつて忙しい
診療待ち時計忘れた腕淋し
客待ちも仕事のうちという不況
放置車のゴミがまたゴミ呼んでいる

河内長野市 植村 喜代

歩いても歩いても金木犀匂う
子供の頃こんなに人がいなかった
蟬が消えると秋の虫が騒ぐ
食べられぬ国もあるのにダイエット

河内長野市 水谷 正子

阪神が優勝の日に友が近く
風物詩 第九を歌う人も老い
わたしから見れば古稀などまだ若い
平成はあつと言う間に十五年

柏原市 永浜 加津子

初対面先入観は無しで会う
年重ね家財道具の荷が重い
マイホーム建てて暮らせず赴任地へ
秋時雨 腰を患う友のこと

堺市 西村 りつえ

アメリカもハリケーンには打つ手なし
頂点で紐しめ直す下り坂
にらまれているのか頬が凍り付き
甘言に溺れブレイキ踏み外し

吹田市 瀬戸 まさよ

いい本に出会う古本市初日
中高年ばかり南座松竹座
看病の辛い話を聞き流す
信じない期待しませんわが政治

吹田市 野下 之男

蒔いた種一人で刈らず手伝わせ
真ん中にいつも居りたい永田町
優勝の祭り忘れぬ戎橋
幼稚園言うこときくは今の内

吹田市 岩屋 美明

堀の上猫うずくまる菊日和
終わりだけ立ち読みをする新刊書
運動会朝から暇な散髪屋
一年を懺悔するよな柘榴の実

高槻市 西谷 治三郎

北新地 社長と呼ばれた頃が華
土俵ではガムを噛む人おりません
バーゲンで奪ったコート身に合わず
妻の留守飲み放題は家でやる

高槻市 井上 照子

好きな人いてもいいでしょ喜寿の坂
ステップが踏めたら貴方あの曲で
添削の赤い字さすが師は深い
お粗末な経験命とらないで

高槻市 生田 義一

病院で待つ間凌ぐに川柳塔
殺人の記事が賑わうこわい国
肩書きが消えても元をつけたがり
乱闘の中に交じった紅一点

高槻市 左右田 泰雄

やがて咲く月下美人を待つ今宵
後手ごてに回ってツキに見放され
お出かけはちよつと小粋な鮫小紋
へらず口叩くと飛んで来るつぶて

高槻市 傍島 克治

富田林市 片岡 智恵子

定年後妻に丸投げされた家事
告白をすれば許すを信じない
昨日今日明日と繋がりない暮らし
実をつける果樹はこまめに世話をする

豊中市 岸田 知香子

秋日和平和かみしむ子等の声
金木犀そぞろ歩きの道標
籠の鳥夜長夢見る一人旅
ぶつかった壁に逃げ腰行き止り

豊中市 榎谷 郁子

秋の風きつちり秋へ滑り込み
せかされて冬もちよつぱり連れて来た
不況風百均からも吹いて来る
野仏がずつと守った千枚田

豊中市 山門 タミ

天びんで量れぬ生命と我が寿命
握り合う手に暖流が湧き出づる
手をとって入れてもらいたい湯だな
車椅子孫に押されて来た旅路

大東市 南原 正和

腰伸ばし母が手を振るUターン
お隣の雨戸が開いて変りなし
ぴりっとも動かぬ浮子に雲掛かる
祭りの灯遠くに見つめ肩を寄す

リラックスして飛びだしてきた本音
ふっきれてプランコ急に軽くなり
一枚の舌持てあます無言劇
騙し絵の絵皿に盛った唐辛子

羽曳野市 酒井 一壺

チャンスなど何度も来ると負け惜しみ
遊ばれているとは知らず有頂天
好きなだけ遊んでこいと放り出され
遊び方知らぬ男に魅力なし

東大阪市 指宿 千枝子

遠い日の私を探す村祭り
美しい夕日私の道標
トマト トマト夕日の色のミニトマト
夕日見に行つたまま拉致されたまま

東大阪市 北村 賢子

ロマン抱く眼は少年の頃のままだ
ふたり船何度も揺れて風の海
よそさまは睦まじそうな共白髪
底辺の暮らし尻目の天下り

枚方市 森本 節子

要支援継続とのこと役所より
ニコニコと政界を退く塩爺
コスモスにとても優しい彼岸の風
まくらもと七つ道具をたしかめて

枚方市 二 宮 山 久

年金の暮しへ妻は笑み浮かべ

同窓会若き血潮が躍りだす

毎日の散歩かかさぬ体重計

まだやれる体鍛えている散歩

枚方市 宮 川 珠 笑

Dカップ老いればきつと垂れるだら

茶柱の湯呑みとなりへ配られる

胎動に耐えるだろうか脚線美

自販機のつり銭じゃまくさそうに出る

枚方市 鈴 木 政 子

大阪弁の敬語を知らぬ新興地

ダイエーのファンでないがセール待つ

貧乏でも気前だけ大きく持ち

投句せず厚かましくも句会に出

寝屋川市 太 田 とし子

地に迷い天に迷っている命

料理研究しているのだよつまみ食い

心地よい眠り借金ありません

はんなりと紅一刷に癒される

寝屋川市 酒 井 勇 太 朗

錯覚をしない男の味気なさ

麗人のあの一言で座が和む

太陽の塔 新婚当時のモニュメント

孫五人変った奴が一人いる

寝屋川市 堀 江 光 子

月天心 音一つ無き大伽藍

文を焼く一筋白いうすけむり

ムンクなどに凝りだした子の気掛りに

虫時雨これからの事過ぎたこと

寝屋川市 山 本 三 郎

くすり飲み竹踏み励む母元氣

常備薬持って老母は旅に出る

一二三 一二三四と寝る呪文

百歳が老眼鏡のレンズ拭く

八尾市 宮 西 弥 生

いつか来る老いへみやげのバスポート

いい夢の向こうにこわい橋が待つ

華やかな過去をたたんだ蛇の目傘

日当りを選ぶ女の無防備よ

八尾市 吉 村 一 風

欲みんな捨ててベンチで夢見てる

カレンダー生きる努力の赤い丸

卒業の孫に仕事の寄りつかぬ

じゃんじゃん街右へならえとコップ酒

大阪府 野 田 栄 呼

平等に年齢だけは積んでいく

万民のための政治家出て来ない

日記には書けず秘めとくこともある

研究が進み高齢増え続け

百姓に衝撃走る米泥棒

大阪府 桑田 ゆきの

スッピンになったべっぴん湯が弾く

見上げれば都塵を掬う観覧車

マニフェストいざ出陣の党固め

神戸市 池田 善守

七十と二十が同居気と体

女房に正論はいて成果なし

先送りのツケが一気におそい来る

生存を確かめあっている賀状

神戸市 山口 美穂

御嶽へ入り陽が赫い木曽の秋(中山道を旅して)

中山道歴史の節目知っている

昔日の旅人思う峠道

自分へのお土産ネズコの下駄を買ひ

尼崎市 春城 武庫坊

芒見て雲さすらいの旅に出る

阪神優勝各地で桜狂い咲き

ギヤを切り換えて若さと呼び戻す

飯つぶをこぼす歳にとまったのか

尼崎市 春城 年代

焼酎をチョッピリ鍋の音や良し

老境もこんなに他愛なく過ぎるか

指圧師はわたしの猫背指摘する

シャッターの閉まる空家の増える街

尼崎市 内田 美也子

ひとり旅鏡の中に秋を入れ

目的をもつと弾んで来る手足

人並に生きてることに掌を合わせ

一日があつと言う間で年の瀬へ

尼崎市 軸丸 勝巳

よく生きた平均寿命通過中

最高の読み物だった本の帯

散歩道匂う金木犀に足

美術展出て一幅の秋の雲

伊丹市 小熊 江美

急に秋つめたい雨が降り出した

ブランコへ秋の訪れ赤トンボ

定年後さて遊ぶのに慣れてない

万引を遊び心でする恐さ

三田市 北野 哲男

ああまたも背が一センチちびました

自分への手紙と終らない日記

嘘少し興奮剤にして元気

仕舞風呂モンロー風に太い足

西宮市 刈田 泰司

ゆっくりと噛めば正体見えてくる

善と悪同居している凡夫われ

月並みな言葉で恋をすてました

名月が照らす小さなくしごと

西宮市 緒方 美津子

あの声はどうも無心にきたらしい
恋人の頃の遅刻のなつかしや
割り切って書いたつもりの遺書をまた
けんかの出来る末吉ほどの夫婦です

西宮市 牧 渕 富喜子

風それて勢いついた犬ふぐり
旅三日秋はいっ気に来るらしい
万全を期しては水の漏れる音
おしなべてプラスマイナス零でよし

西宮市 菊 池 トミエ

ブドウ園豊かに稔り柵重く
墓まいり本音を祈りついほろり
ジーパンの膝が抜けてる帰省の子
兜虫勝負させてる男の子

姫路市 古 川 奮 水

百選の水の地ビールのどが鳴る
禁煙を奨めて税金だけ上げる
口喧嘩すると一日長くなる
試着して最初選んだ服になる

奈良市 米 田 恭 昌

毒饅頭食わされ組閣から外れ
ラッシュアワー忍の一字に耐えている
ゴミ出し日うちの文化を覗かれる
パソコンを駆使する妻は魔女だろう

大和郡山市 坊 農 柳 弘

落し蓋秋が煮こぼれせぬように
以心伝心おなじレベルの夫婦傘
衣食住足りて情けに飢えている
みぞおちの辺りで秋が溶けてゆく

和歌山市 榎 原 公 子

次の球ちゃんと読んではる妻である
おしなべて数え易しは他人の齢
街に出て逢うは他人の顔ばかり
芋の葉に宿るあの頃の命

和歌山市 上 地 登美代

指切りの温もり残し孫帰る
五七五ボツケの中で踊る指
豊かすぎ人の痛みに気付かない
テロのない国を望んで月静か

和歌山市 松 尾 和 香

監督の心も揺れた辞任劇
午前午後仕事に趣味に駆け回り
スケッチに絵筆を入れる雨の午後
お陰様達者で続く趣味の道

和歌山市 宮 本 三喜夫

寄せ集めやつと体制整うた
時の人のこのこです国会に
失言の波紋仲間にひびができ
長老で辞めざわるいのが二人

鳥取市 田中 童子

通り魔がゲームのように人を刺す
病室へ笑顔整え入る妻
形より生まれ育ちで野菜選る
輪の中に溶け込めぬ子に目を向ける

鳥取市 富山 檳榔樹

稲不作雀ご存知踊らない
月重ね夢と膨らむ娘のおなか
子沢山育てた母はたくましい
生き甲斐をポストに掛けて耐えてゆく

鳥取市 宮脇 道子

少しずつ記憶の袋穴が空き
秋桜がしなやかに媚び彼を待つ
白萩に母の面影揺れて散る
しゃぶられた骨痛んでる憂いてる

鳥取市 中村 金祥

手に汗を握るガッツに飢えている
憧れの先生稼業案でない
歳をとるたびに診察券も増え
元総理元老院のように就く

鳥取市 夏目 一粋

こつこつと貯めたお金が飛びたがる
モノクロのガッツに一目惚れをする
推敲をしすぎて並のものになる
このイビキ止まりそうなの眠れない

鳥取市 山本 益子

駆け足で太陽沈む秋が好き
地獄絵の餓鬼の炎に目を覆う
付け睫他人めく顔おもしろい
極楽の短い時よ明日も来い

鳥取市 杉本 孝男

ひらひらと紺のスーツに花が降る
何よりも自然の笑顔美しい
平和産むための苦しみまだ続く
支持率に溺れた総理耳貸さぬ

鳥取市 西村 黙光

ど忘れの責めを深酒負わされる
淋しくて毎晩通う縄ノレン
好きなだけ飲み食い勝手縄ノレン
躓いた石に暗示をかけられる

鳥取市 前田 一枝

我が家にもやつと五月の吹き流し
持てばじゃま持たねば俄か雨にぬれ
線のない電話どこまでついて来る
長風呂をのぞいてくれる嫁がいる

鳥取市 下田 茂登子

共白髪なるまで添えぬ縁だった
夫婦の縁繋げる神がみつからぬ
老い二人会話の見えぬ日日続く
目減りする年金だけど糧にする

米子市 林 瑞 枝

潮待ちの刻 陽だまりの二人連れ
近寄つても一度耳にいい訛り

太陽が眩しいところ透き通り

夜行列車に寝てヨーロッパひとり旅

米子市 木 村 富美子

手に余るカードで選ぶお医者さん

大空にまず挨拶をして動く

仲良しの犬が挨拶してくれる

全国の祭り集めて貌がない

米子市 木 村 春 枝

街変わり袋小路に迷い込む

ほんのりと匂い袋が慰める

引導を渡されてからする勝負(妹婿のガン告知)

田舎街外人さんの声高い

米子市 青 戸 田 鶴

護身術ならおうかなと思案中

コスモスの中のあなたが頼りない

閉院した弟送るケアハウス(弟が医院を閉じる)

澄んだ目に出逢えた今日を感謝する

米子市 白 根 ふ み

城島がかぶるとカリスマ性になる

天たかく稲架整然と老いる背な

亡母の日に合わせ友禪菊が咲く

6Bで小さな秋を太く描く

倉吉市 山 中 康 子

赤いばらピンチを抜けた過去をもち
ご苦労さんしこりを少しとってやる

目を覚ます頃にはいない父母の恩

嘘を書きマスコミ飯の糧にする

倉吉市 猪 川 由美子

六連覇柔も恋も実を結ぶ

失言の本音を聞けばもう消えぬ

独り居は泣きは出来ても笑えない

真紀子氏の夫何かと大変だ

倉吉市 最 上 和 枝

秋刀魚焼く秋刀魚喜ぶ長い皿

明日来る新車へ車庫の模様替え

泣きそうな空に慌てるコンバイン

透明な湖底に魚も住んでいる

鳥取県 林 露 杖

雲も無く風はコスモス揺らすほど

好物を一つまた減しダイエット

天高く老体肥ゆる旬の秋

食うことのほかは総てが衰えた

鳥取県 平 尾 菜 美

ほとぼりが冷めないうちに叱ってる

横槍が的を外して叱られる

父さんに叱られたくて碑銘みる

故郷を担う祭りが盛り上がる

鳥取県 上田 俊路

部屋中に広げて夏を干している
泳がずにプール歩いている余生
口うるさい主婦に戻った退院日
柿をむく指先小さな秋に触れ

鳥取県 奥谷 彩子

お砂場は羽ばたく児等の小宇宙
彼岸花とんぼ私も紅く燃え
晴れ舞台黒子にもある芸の自負
全山紅葉男引き際考える

鳥取県 吉田 孔美子

大丈夫女の海は未だ満ちる
風呂敷と傘は返品いりません
送る道傘には重いボタン雪
介護してアイディアの力を見せる

鳥取県 岩崎 みさ江

価値観の違いを埋めて来て夫婦
淋しさに開けてしまった玉手箱
地獄極楽この世のことで御座候
ゆっくりと生きる一病いだいて

鳥取県 乾 喜代志

木で建てた住まいの方が美しい
立腹を忘れる古くなった耳
夕食の一人ぼっちがゆつたり
杖ついてぼとりぼとりの足を練る

鳥取県 国森 武子

歳とつて心切りかえむつかしい
心地よい日帰り旅行久しぶり
体さえ続けばやはり出る事に
あしたからまたがんばると床につく

出雲市 板垣 夢酔

古写真まだれ掛けたこれが僕
ママゴトの女性も今は孫の守り
落椿まだまだ赤く未練燃え
ちらちらと赤い紅葉が散る山路

出雲市 富田 蘭水

ほのぼのと私をほぐす酒二合
頂いた命室にボランティア
美術展やつぱりモノとみつめてる
コスモスが荒れた心を慰める

出雲市 岡 あきら

旅立った師のぬくもりは懐に
まつたけの値札拝見して帰る
風船に嫌われビリでゴールイン
聞きたくもない奇麗ごと聞く選挙

出雲市 久谷 まこと

双方の誤解もとけた酒すすむ
思い出を辿りながらの頁くる
満月の憂いもつ影うなだれて
十六夜の月中天で独り待つ

出雲市 石倉 芙佐子

然りげなく母の芝居を見ていよう
踊りつつ貴方をライトに浮かせたい
ぶきつちよな人に食われてしまう芸
脇役の穴を私が埋めておく

出雲市 青山 久子

時々金魚になって人を観る
何も彼も許してくれる空がある
芝居だとわかっていても泣けてくる
届かない想い流れてゆく月日

松江市 小川 注湖

出雲そば馴染みの味がまた誘う
止めようかもう一杯か考える
昭和一桁飯の早食い直らない
嫁が島夕日背負いてもの哀し

松江市 松本 知恵子

三十年夫に持たせる手弁当
体調の良さで決めてるノーマイク
里神楽 鬼も踊るよ秋夜長
静けさに身をおきたくて里の秋

松江市 安食 友子

ハーンすら下駄のからころ好きだった(小泉八雲)
刺や毒言いたいことは言って抜く
怨憎の握りこぶしはおどろしい
天女さま慕って行こう月明かり

島根県 多々納 テル子

ストレスをマイクに吸わせ張り上げる
ぐるぐると病気探しをする検査
今チャンス平和たのしむパスポート
踊り果て月が足跡照らして

島根県 伊藤 寿美

音の無い花火見た日の白い部屋(夫遠く)
残されたものの悲しみ雲を追う
蝉しぐれの恋周平を読み返す
新刊を開くと潮が満ちてくる

岡山市 川端 柳子

タイガース万歳いつかの花火こだまして
開店休業 母は何時でも待つてます
一番を二番に替えて楽になる
シルバースhirt友達一人得て帰る

岡山市 井上 柳五郎

ひぐらしが秋を迎える風に鳴き
松食いで枯れた樹の跡マキ繁り
切り捨てた枝にも蓄ついたまま
いつまでの余生か米寿もうそこに

岡山県 富坂 志重

人間の命小さくはかないネ
寄付帳と祭りばやしがやって来る
平凡を継ぎ足しながら生きてます
よくぞ歩いた足だ まあるくなでてやる

岡山県 国米 大きくゑ

道ならぬ恋を許した星月夜
点滴の窓からもう祭り彩
茶目つ気も詩心も少し残る喜寿
秋深しひそやかに老い訪れる

竹原市 三宅 不朽

公園を抜けると伸びてくる背筋
河の流れのようにはいかぬ酒女
話まじしたことがない顔見知り
防空壕いつでも掘れる所に住み

竹原市 石原 淑子

世紀経て願ひは一つ木彫神像
また今日も心の凍る自爆テロ
反戦の願ひを込めて花の種
三回忌しっかりせいと母の声

唐津市 宗水 笑

新民主 小泉さんと喧嘩四つ
政治家を叩けば売れる評論家
脳回路どこか切れてる物忘れ
どっこいしょ骨が欲しがる潤滑油

唐津市 井上 勝 視

老いも嫌呆けは尚更ただ歩く
つぎはぎの五体でやっとな傘寿越え
腐っても鯛が通用しなくなる
老いたらし先送りする癖がつく

松山市 宮尾 みのり

ご無沙汰を詫びて切り出す金のこと
贋作と鑑定されてから無口
一生の不作と思う味オンチ
利害ない遠い他人へ打ち明ける

東かがわ市 成重 放任

思い切り生きよう二度とない人生
風雪に耐えて余生を恙なく
彼岸花舗装を割ったど根性
旅先の孫より不意の土産つき



(つづき)

高知県 西森 善蔵

やま勘で解いた答が的を射る
公約は投票までの命かな
太平洋にらんで龍馬何思う

高知県 百田 幸

強がりを言って内心落ちつかず
大げさな話割引して聞こう
自己チェックそろりそろりと冬の音

自選集

新世紀一二三四 七八究

鰯雲往きと帰りの修行僧

上弦の月アフガンの銃の先

平和来よラマダーン過ぎてクリスマス

鳴の嘴の優雅さ強かさ

お隣の草が気になるお人好し

手の味を盛る幸せな夫婦箸

玄関の雰囲気褒めて集金人

雨止んで一升びんがやって来る

荒れている心に欲しいみどり色

寺までの日課が足に合うて来る

台風一過 天守閣から秋が来る

惚けたとは言わず勇退すると言う

のびのびの余生田もなし山もなし

いろいろとあったが妻の灯に還る

橘 高 薫 風

恒 松 町 紅

遠 山 可 住

誉められて俳句に迷い書に溺れ
月下美人が咲いている見において
極楽へ行くと決っているんだよ
先生が知らないことを知っている
幸福の方へ傾く自由席

西 田 柳 宏 子

歳末へ口だけ達者うとまれる
他人事が妙に目につく年の暮れ
もう二人近所の事から閉め出され
日本の仕来たり消えてる年の暮れ
町内にノ縄一つ目につかぬ

西 村 早 苗

み仏も彼岸団子の味をほめ
その角を曲つてごらん夢に逢う
この次の風で翔びます風車
こりもせず夢追う列の中にいる
余生とはわびし寝返りくり返し

仁 部 四 郎

塩焚いた浜のホテルは外資系
おにぎりの塩味ここがわが家です
デパ地下で買った干物に塩を振り
父として伝える汗の塩の味
地の塩とおだて月月木金金

土 橋 螢

野村 太茂津

巖に散る浪から覚る体当たり
散つて崩れて波の姿になる男
昂ぶりをしずめ漣繰り返す
倅せは米寿で孫の結婚へ
長生きのお陰曾孫と友達に

波多野 五楽庵

蟋蟀の形で死んだ十二月
絵日記に茄子の花咲き花が散り
恵まれた小窓が並ぶ分譲地
観覧車ホームシツクが一人居る
ボジョレー又飲んで男の暮色かな

藤井 明朗

会えば笑顔で疲れ忘れる友
紅葉の見事ドラマにしたい晩秋
子らの純情だます男が見えかくれ
ひい孫ふたりしあわせな長生き
としよりは返上寿の余生

藤村 メ 女

和解を誓うお月様丸くなる
誓いの言葉すっかり録音されていた
路地裏に美談こっそり咲いている
この路地もピアノが鳴っている平和
ふり向けば手を振る曾孫五人

芳地 狸村

宮入りに こなから坂が燃えている
やり回し晴れの舞台のかんかん場
母ちゃんの背が舞台の祭りの子
神灯にずらり並んだ街の顔
神灯の柱にまちはまつり彩

宮口 笛生

一日の疲れを癒す縄のれん
サンマ豊漁値くずれ有難い
七十のおめかしをして妻の旅
癌告知少ない余命考える
俺は癌だ俺は癌だと生きている

森下 愛論

照り付ける陽に雑草の和む彩
一寸した殺し文句にほだされる
もう力抜いてそろそろ檜山へ
会う人に笑顔振りまく老いの知恵
無為無策国に合わせて生きている

八木 千代

蛇口から夜明けの水がほとばしる
手を振って水飲みにくる一族よ
仏壇の水もどうやら減っている
水甕の空はあくまで曇らせぬ
洗い易くてなるべく深い甕を買う

八十田 洞庵

かくてまた今年も金の工面かな
スタートはトップの入社だったのに
笹舟になやみを積んだ頃の無垢
いつもつらい話母さんごめんよ
ね
力では負けるが僕にベンがある

両 川 洋 々

エプロンの似合う男になってやる
ああメダカ死ぬと故郷も過疎も死ぬ
ブライドのために死ぬなど真つ平だ
難民の目にひもじいと書いてある
極楽はきつと美女美女美女がいる

阿 萬 萬 的

も一人の自分を叱る妥協癖
じくざくに歩き淋しさ胃に溜る
軽い捻挫それから揺れる自己主張
馴れという隙間時々ねらわれる
木から落ちた猿にも似てる落ちこぼれ

石 川 侃流洞

病院から百葉の長締め出され
飲み仲間に酒でなかつた養命酒
マニフェスト場当り政治に揺れている
オイとハイ阿吽に動く老夫婦
アルバムへ僕にもあつた青春譜

板 尾 岳 人

あいうえおかきくけこさしすせそ愛
齒ブラシで届かぬ恋を噛みくだく
母の死をよろこぶべきか曼珠沙華
愛と死のどちらを選ぶ冬の嘘
空っぽの壺を覗いている嫉妬

奥 田 みつ子

見詰めればみんな影には尻尾あり
パパ パパと返事の来ない闇に問う
机這う小さな蜘蛛と話す
花活ける心に邪心消えている
おだやかな顔で明日が待っている

河 井 庸 佑

追い詰める一隅開けておく情け
耳学問 意外なときに役に立つ
空元氣出した昨日を悔いる日々
古里の母へ便りを書く夜長
折衷案まとめて肩の荷を下ろす

川 島 諷云児

愚かとは知りつつ愚痴を繰り返す
物忘れころの旅のはじめかも
血圧は生きる証のパロメーター
おたやんであれ糟糠の妻いとし
歳月は待つてくれない除夜の鐘

一日一善 極楽浄土見えてくる
明け暮れにやすらぎの梵鐘千光寺
幾山河越えて卒寿へまっしぐら
太陽の恵み今日一日に感謝する
襟立てて掛取りがゆく師走

木村 あきら

工藤 吟笑

百年の計も崩れる長不況
大海を知らず養殖魚は太る
左遷地の地酒に生氣取戻す
母の愛月々宅配便で出る
号笛も高らか瀬戸のミカン船

黒川 紫香

午後に着く予定の旅でパンを買う
優しさの言葉にゆれる言葉尻
一年を無事に過した年の暮
九十台残り少なくなつて冬
土産などない来客の尻重し

小西 雄々

叱られて姿を見せぬ冬堂
祭まで忘れて戯画の街に棲む
弥陀の手をさけて雑念多い貌
虹追うて世間を泳ぐ嘘ひとつ
養生訓知っているけど二日酔い

美辞麗句並べお祝い申し上げ
カーナビに案内されて無事に着き
生きていりやいつかどこかでまた会える
晩酌がうまいまだまだ生きられる
ネギ刻むリズム姑にはかなわない

小林 由多香

斉藤 荔

白菜の芯の白さを信じよう
土からの贈り物です芋煮会
遮光器土偶哀しげに寂しげに
新幹線に乗るはずだった落ちりんご
祝勝の二字も踊っている校歌

田口 虹汀

明神を出雲へ送るのが供日
赤獅子の御幣が町を浄め行く
宵山笠が町を浄めて前夜祭
皆様に見てもらいたい唐津山笠
お供日が済むとお寺のお会式だ

田中正坊

遥遥と来て憧れの句碑を見る
鶴彬したいて集う碑前祭
枯芝の句碑に捧げる花一枝
句碑眺め先祖の墓に会う思い
暁の句碑ひっそりと卯辰山

第3回 川柳マガジン文学賞 作品大募集

応募要項 所定の用紙またはB5原稿用紙に、
課題「音」3句（未発表作品）・住所・
氏名（雅号）・年齢・電話番号・性別・
所属結社を明記・複数投句可

第一次選考 河内天笑・小林由多香・山本蛙城
ほか26名。各選者ごとに特選1句、秀作3
句、佳作15句を選出

第二次選考 選者15名で第1次選考選出句120句
から大賞ほかを選出

賞 「川柳マガジン」大賞1名（賞状と盾・副
賞として句集発刊）準賞3名（賞状と楯）
第1次選考特選者30名（賞状）

締め切り 平成16年1月15日（消印有効）

参加費 2000円（郵便小為替）

発表 第一次選考 川柳マガジン16年4月号
第二次選考 川柳マガジン16年5月号

応募先 〒537-0023 大阪市東成区玉津1-9-16-4F
新葉館出版内「川柳マガジン文学賞」係
TEL 06-4259-3777 FAX 06-4259-3888

目標は高く早起きする散歩
四コマの次はスポーツ欄を見る
幸せのひとつ保険を掛け捨てる
欲ひとつ消えふたつ消し下り坂
バーゲンに俄かファンになりすます
タテ縞の込む天気図と冬に入る
歩かない日は腹筋を二百回
ギアチェンジしてゆつくりと暮してる
阪神に恋煩うてから久し
にゃんぴいも妻も軒をかいてる

河
内
天
笑

玉
置
重
人

第5回 文学ルート川柳募集

文学ルート（松江市・尾道市・今治市・松山市・高知市）

募集作品 文学ルート（5市）周辺の自然や衣食住・信仰・年中行事等に関する習慣・民俗
行事などを題材とする川柳。（未発表のオリジナル作品に限ります）

宿題・応募先（宿題に応じてご応募下さい。各2句）

松江市 「しじみ」「怪談」 松江市産業振興部 観光文化課 TEL(0852)55-5293
〒690-8540 松江市末次町86 FAX(0852)55-5564

尾道市 「塔」「眺める」 尾道市産業文化部 観光文化課 TEL(0848)25-7366
〒722-8501 尾道市久保1丁目15-1 FAX(0848)25-7293

今治市 「港」「焼き鳥」 今治市教育委員会 文化振興課 TEL(0898)36-1608
〒794-8511 今治市別宮町1丁目4-1 FAX(0898)25-1700

松山市 「ロマン」「野球」 松山市企画財政部 国際文化振興課 TEL(089)948-6634
〒790-8571 松山市二番町4丁目7-2 FAX(089)943-9001

高知市 「はりまや橋」「黒潮」 高知市教育委員会 生涯学習課 TEL(088)822-6394
〒780-0870 高知市本町4丁目3-30 FAX(088)823-1095

応募方法

- ・専用の応募用紙、または官製はがき、封書に書かれた作品（FAXによる応募可）
- ・応募作品には「宿題」及び、氏名（ふりがな）、郵便番号、住所、年齢、性別、電話番号
等、必要事項を明記して下さい。（雅号の場合は本名も明記）
- ・入賞作品の著作権は主催者に帰属します。応募作品は返却しません。

応募締切 平成16年3月31日（水）（当日消印有効）

出品料 無料 **選考** 平成15年5・6月

発表 平成16年7月、入賞者に通知します。（表彰式は、16年9月下旬予定）

選考委員（第二次選考）吉岡龍城・塩見草映・橘高薫風
（第一次選考）柏井日出子（松江市）三浦 宏（尾道市）木原 鶴子（今治市）
関谷 省三（松江市）曾我部佳風（高知市）

賞 大賞 1点 奨励賞 5点 佳作賞 若干

水煙抄

板尾岳人選

米子市 足立 由美子

鳥取県 竹森 富久江

カラフルな袋に入れて差し上げる
胃袋のあたりで解けぬ物がある
気構えが伝わってくる白い足袋
しっかりと腰の座った下駄がある
日記にもまだ言っていない事がある

愛媛県 黒田 茂代

お茶室の二畳小さな大宇宙
有頂天すくと落ちた水溜まり
叱られた卒寿の父のすねた耳
嫌われてばかり長女の役回り
煩惱をすっかり捨てに行く浄土

出雲市 小豆沢 歌子

壺の中私の恥に蓋をする
寝て起きて泣いて笑って眠る独楽
ここだけの話遠くで泳いでる
響き合う友という名の杖がある
青空を抱きしめたくて手を翳す

手の内を読ませて駒の進むみち
背負う荷を少し減らして老いている
除夜の鐘旅の系譜の中におく
疲れたよ少し充電しようかな
夕焼けに誓った来年のはなし

日立市 加藤 権悟

北風を冬將軍が来て煽り
どの顔もハローワークの目がうつろ
落葉くるくる風の喝采かも知れぬ
十二月八日平和の風がわく
一年をながい影法師と語る

八尾市 平川 幸枝

老木にサプリメントの花が咲き
指切りのままで終った親不孝
夏の果て諭吉は家を出たまんま
原石を採用試験で掘り当てる
目薬は頬を身ぶるいして落ちる

河内長野市 大西 文次

大ジヨッキ女が飲んだ謝恩会

そんなはずでなかったと言う資産分け

長生きはするほどよいと言われても

肩書きのとれた名刺とごろ寝する

烙印を押し短冊に箔をつけ

横浜市 川島 良子

扱いに注意 思春期更年期

歳相応なんの不足があるものか

これ以上望むとバチが当たります

整理整頓リズムが狂う探し物

嫁姑平和でいたい車間距離

和歌山県 森下 順子

文化の日 多分私は野良仕事

五分間だけでもほっとする休み

休まないコンビニどこか疲れている

冷蔵庫で休眠させる花の種

誤字脱字父が遺した農日記

和歌山県 土屋 起世子

人の手の温さに稲穂頭下げ

苦も楽も音色は同じ落葉踏む

頑固さを子に諭されて秋の道

凜として生きてはいるがメカ音痴

愛だけを数えて結婚五十年

和歌山県 喜田 准一

割り算で余った一人かも知れぬ

この不況サンタ リストラされている

雑音を選つて聞くよな耳を持ち

背伸びした途端に足を掬われる

横顔も角張っている頑固者

秋田県 湊 修水

充電も手入れもせずはまだ動く(九十二歳と七ヶ月)

秋祭り夜店で買ったいい笑顔

難儀やなあ卒寿も少し金が必要

ゆっくりと歩こう人生おもしろい

打って出て何をか言わん真紀子節

札幌市 三浦 強一

はいはいのはいが余分な妻の乱

やつれたと誰も言わない見舞客

買って出た苦労に老後報われる

また一つランク落として生きる知恵

単身赴任慣れて半熟茹で卵

南国市 小原 圭二

好況へ捨てられた石残される

世界史をまだ動かしている戦

家計簿に載らぬ野菜に水をやる

ドリンク剤値段は問わぬ二日酔い

半世紀手順変わらず入る風呂

北九州市 岡田幸生

神戸市 両川無限

トンネルの出口が見えてきた介護
悔しいが辞書には妻の言う通り

お喋りの妻が無口になる怖さ

年金に錨降ろした父の船

わが子には出来ずベットにする羨

神戸市 山田 婦美子

熱爛をつぎ合う人と共に居る

少々は呆けて通るも処世術

生き甲斐はドアのむこうの笑い顔

秋蝶に我身重ねし風の中

まといつく余力も失せし秋の蚊よ

神戸市 木村 忠義

雑草が教えてくれる罅^{ひび}の箇所

こんなにも濡れてしまうと邪魔な傘

何事も燃えろ燃えろと曼珠沙華

よいところはシーズンオフに行く決め

蜘蛛の巣があると哀れな家に見え

神戸市 田中 章子

一生は苦楽バランスとれている

いたずらは笑って流すほどがよい

友だちとその友だちと旅の宿

ノスタルジー夕陽の赤によく似合う

国宝も風邪をひきます 雁治郎

ロボットに負けてしまった力瘤

思い出と一人相撲をして負ける

死なれては困る妻には負けておく

死ぬという大事な謎がまだ残り

焼き捨てて欲しい手紙を書いている

尼崎市 河津 正治

一芸に長けて世間にうとく棲む

謙虚さが譲り合つて負の遺産

身中の虫に難儀をもて余す

難儀した過去を消したいシュレッダー

ふらふらとして逆光に虚を衝かれ

西宮市 片山 忠

病んだこと無いのか舌鋒よく冴える

借り農園ゴルフ焼けだと見栄を張る

その先は言わぬ約束サンマ焼く

捨てられた石の言い分聞いてみる

核心を突かれてペンは口籠る

池田市 多田 契子

軽々に男の下駄が泣いている

柔らかい声で冷たく身構える

秘めたもの柔らかき掌にこぼれ花

阿呆やなあしみじみ思う目の鱗

気まずさに話の種をさぐる笑み

三田市 堀 正和

庭師来て大きくなった秋の空

くせひとつ直れば好きになれそうな

三日ほど飲んでみるかと葉くれ

時々は機嫌そこねる改札機

自分史のところどころに汗の跡

川西市 井本 清山

連休は体やすめている無職

詳細に書きすぎ判りづらい地図

朝ドラに合わせて食事する平和

ライバルは何時も味方の中にいる

強がりと言って未練を切り捨てる

伊丹市 延寿庵 野鶴

あげ底のドーナツにある不況風

ロボットに元気を出せと叱られる

托卵ヘルル無視するヒナの孵化

ストレスをゆつくり癒す写経筆

このごろは笑っておれぬ十二歳

大阪市 寺井 弘子

秋終り宣言しますダイエツト

十人が十色で私何の色

体重計そつと乗ってる食の秋

美術展納得いかぬ絵にも会い

適当に手を抜いている夫の留守

大阪市 升成 好

本当は相槌ほしいひとり言

人の字の支えがたわむ倦怠期

下町は善人ばかりというドラマ

妻の愚痴ながながと聞く午後のお茶

お願いは三度目ですと絵馬に書く

藤井寺市 西村 栄一

病院食とてもスリムにしてくれる

一言もしゃべらなかつた日が暮れる

いい笑顔苦勞を刻み込んだ皺

鳳仙花愛の言葉をはじき出す

一と花を咲かせることも無く生さる

羽曳野市 福田 悦子

介護保険使える年の誕生日

二人者どうして聞こう除夜の鐘

冬ごもりコタツで亡母の夢を見る

亡母の名を書けぬ淋しい年賀状

木枯しが元氣ですかとノックする

泉佐野市 稲葉 洋

夏痩せの倍りバウンドしてる秋

山海の幸を味わい過ぎた罰

欲言えは切れない年を振り返る

しがらみをつつ解く風師走

もう気負いとつくに消えて老い晦日

寝屋川市 岡本 勲

シナリオを書いて出直す定年後
自己流のシナリオ書いて生きてます
どれがどう効くのか薬たんとくれ
年金改定早く逝けよということか
異常気象地球危険のサインかも

八尾市 松葉君 江

おしゃべりなオリオン冬のお客さま
年輪が生んだ老母の知恵袋
ライバルに差をつけられた汗の量
いい事もよくない事もみな鏡
弱音など吐けぬ人生二毛作

八尾市 赤木 妙子

移り香を家に残して娘が嫁ぐ
ポケットに小粒の善を持ち歩く
人間を壊すミクロのケシの粒
今日の暑さ連れて夕陽は海に入る
引いてみせまた抱き寄せる母の海

八尾市 田中 トシエ

お荷物といわれるほどは重くない
そり返り方も秋刀魚は忘れない
今朝の膳皿に昨日の顔がある
じっと見る手に金運の相もない
人生を知りつくして日回ほこ

八尾市 笹倉 ひろし

少子化と老化が日本消して行く
熱帯びる割りに政治が動かない
豊かさはおやじ国産子は外車
カーナビはこんな路地まで車入れ
チラシ見て突然変わるお惣菜

今治市 渡邊 伊津志

蹴った石血相変えて跳ね返り
疑問符を風に預けた深呼吸
自惚れを三面鏡に牛耳られ
幸せが飛び出る母の手巻き寿司
天と地の狭間に生きて日々多忙

今治市 野村 清美

生きるとは喜怒哀楽をくり返す
再会を約し命の芽を育て
八十の手習いだって夢がある
鬼よりも仏に近くなる余生
傷心を癒してくれる青い空

高知県 桑名 孝雄

悠久の大河を悟る年の暮れ
特記することもない日記帳
宮総代神が飲もうと言ってくる
骨太のプランを歳に噛まれる
緋けば孫ばっかりが出る日記

秋田県 秋野 宏

一生を地下で支える木の根っこ
一円の違いで迷う生タマゴ
愛も寄せ別れも寄せて秋の波
深呼吸いくら吸っても無限大

東京都 やまぐち 珠美

にくまれるように生きぬく餓鬼の術
コーヒーで押して機嫌の戸が開く
夕刊へ今日の余禄を探り出す
眠らない街に夕闇ちぢこまる

武蔵野市 亀井 円女

まだ死ぬぬ余りに夢がありすぎて
有難や食べて眠れて笑えます
あと僅か頑張らないでふんわりと
青空に未だ半端だと笑われる

横浜市 芦田 鈴美

ごきぶりの姿に妻のストライク
椅子取りのゲームに強い皮下脂肪
校則にめだかの学校消えていく
苦肉する心見すかす十三夜

横浜市 布山 嘉信

決め球を打たれて自信揺るぎだす
それなりの自信で臨む見合い席
リタイヤの余白寂しいカレンダー
神様は頼りにしない祭り好き

新潟県 高野 不二

酒吞まぬ夫に今日は気を遣い
賽銭の音神様に届かない
独り者レンジ料理に腕振う
ダイエツトなど知らなんだ握り飯

岐阜市 平野 あずま

大義なき戦に荒ぶ砂嵐
プライドを捨てると尻尾よく動く
ごみ出しの夫カラスにからかわれ
タイミング計る女の涙蜜

京都市 清水 英旺

マツカサを踏めば乾いた秋の音
台風が根こそぎ残暑持つて行く
暮れなずむ空広重の色に似て
秋の日はなに未練なく落ちてゆく

大阪府 前田 ゆい

大志など見えず青年の茶髪
十三夜綺麗ですよと電話する
舞台には立たず黒子は秘策練る
応挙展夫と束の間のデート

大阪府 神野 千恵子

寂しさの色深くする秋の風
メリハリが無くても年の瀬やって来る
待つことが自然にできる思いやり
善悪の境界線がばやけてる

大阪市 池上清治

気楽でも本音は侘びし一人旅
駅の椅子近寄る鳩の悲しい目
長話呆れ見上げる伴の犬
米の出来まああながら秋まつり

大阪市 尾崎黄紅

そのうちに介錯法もできそうだ
孫と呑む子と呑むこれを美酒という
天が知る地が知るそれは昔ごと
遊び心が五十余年のペンネーム

大阪市 伏見雅明

あちこちの部品取り替え生かされる
メル友に晩の献立教えられ
今日食べて明日からにするダイエツト
襟正し俺を私に言い直す

和泉市 竹中歌

雑踏に独りぼつちを知らされる
雑草のように育った戦中派
ネクタイもお蔵入りする定年後
エアメール差出人が先に着き

和泉市 小坂凡英

曼珠沙華群さみしくも咲き誇る
陸奥に西行想うひとり旅
アレホレソレ喉まで来てる名が言えぬ
十万に利子三十円の有難さ

和泉市 横山捷也

箸を持つ手も重たくて職さがし
口ベタで老人会に入ってます
一翼を担ったつもりナツパ服
豊作にハミングの出る軽い鍬

河内長野市 木太久正一

食欲の秋だ入歯の補整して
色のよい秋刀魚二匹を摘み入れ
もやもやを晴らす男の台所
喜寿ですよ絶えず自分に言い聞かせ

河内長野市 坂上淳司

父さんのメール長いぞデスとマス
赤暖簾押そか引こうか休肝日
お迎えに早く来てとは本心か
豊太閣虎が制覇をしましたぞ

岸和田市 亀井咬月

あれこれと暮れには用が溜り過ぎ
まだ死ねぬ年金政府に貸しがある
まだしばし元気で居たく歎ふるう
年金を見詰め直してプラン練る

岸和田市 土橋房枝

良く学び良く遊んだ頃なつかしい
今生の別れの美学考える
平凡な幸せだけど今が良い
花一輪置くだけで良い和やかさ

岸和田市 雪本 珠子

女房のエキスをもらう二番風呂

豊中市 藤井 則彦

よもすがら月を相手に酒を呑む
眠れない夜は銀河の旅に出る

川床は幸せそうな顔ばかり

今もなお青春の影引き摺って

役に立つ歯切れの悪い京都弁

道草を重ね人間まるくなり

年金で金婚式の下準備

岸和田市 森元 ふみよ

富田林市 稲川 恵勇

こんなにも軽く縮んでなお生きる

ここだけの内輪ばなしがじつとせず

CTで脳の軽さを見破られ

老婆の紅に負けじと曼珠沙華

三姉妹真ん中何時も叱られる

お遍路の杖止めさせた彼岸花

叱られてだんだん絆深くなり

神様のタクト偶にはミスもある

堺市 大久保 伸子

寝屋川市 中川 恵香

群れ遊ぶたのしみを知る老いの坂

病んでいる地球見舞いか火の星よ

なめられているなとわかる人の笑み

食欲も量より質と年も秋

退屈の時間を売りに百貨店

姑とナス食べ無難秋がゆく

月冴えて心の裡を見すかされ

若者の所業見据える秋の空

堺市 河盛 龍三

東大阪市 小川 賀世子

亀に負け月で杵搗く罰ゲーム

嘘ひとつ今夜の鍋に煮えている

屋台骨譲って妻に負けている

パフ軽く叩いて今日の幕あける

綺麗ではないが心の母の文

タクト振る手もと狂わす朝寝坊

二人旅一度は揉める仲が良い

袖ぬらし底う児がいる女傘

吹田市 二宮 栄子

枚方市 荘司 弘之

盆踊りのビデオの顔に里心

老後にもひよつとしてある玉の輿

夏ばてに元気を出せとちろろ鳴く

玉手箱開けてしまつて温暖化

大根が届きさんまを買うて来る

妻と僕月と火星のようなもの

三億の夢見る列に引き込まれ

水墨画黒で無限の色を出し

藤井寺市 俣野 登志子

夫か娘か夜中にビール飲んだ跡
影法師たまに一人で歩きたい
妻の留守だった二日で音をあげる
丸く掃く母の教えに逆らつて

藤井寺市 吉田 喜代子

玉葱を食べると友のご親切
嘘一つ吐くのもいい鬱もとぶ
日記帳何事もなし晴れと書く
ひとり居に急がなくても来る師走

藤井寺市 鈴木 いさお

また師走ほんに一年早いこと
食欲は無いが酒なら少々は
坊さんもやはり人の子般若湯
当分はお待ち下さい閻魔様

八尾市 西川 義明

乗客のほとんど降りた花の駅
老夫婦鍋に昨夜が残ってる
愛妻と言えば美人と勘違い
遠花火亡妻の姿を横に置き

八尾市 脇 俊子

翔んでます熟女ですよと言つてみる
子離れをした分 夫にプラスする
匙加減すこし控えて生きる知恵
夢の中泳いで渡る朝の岸

八尾市 寺川 はじむ

ほほ笑みが時に悪魔になる小指
中吊りの見出しが喋り出す雑誌
根回しを終えてネクタイ踊りだす
勝つ味も染みつき弾む縦の縞

神戸市 伊勢田 毅

見栄と義理はざまで揺れるのし袋
亡父の歳越えて分つた塩の味
雨男の柩に傘を入れてやる
やけどせぬ距離で夫婦が四十年

兵庫県 黒崎 美紗子

やってみる事が苦手を追い払う
一呼吸ゆっくり思案知恵も出る
聞いて来た噂尾鰭のでかい事
子離れの自分をためす旅へ出る

兵庫県 安達 厚

寺の門出て凡人の顔になり
束の間の昼寝に長い夢を見る
右左読んで男は思案する
壇寺に煩惱一つおいてくる

奈良市 乾 春雄

テールランプ見送る女の背がゆれる
悔い残る小さな意地が深い傷
まだ消えぬ思慕にゆれてる花鉢
ゴミが流れて川は無口になつて行く

奈良県 江波正純

柿二つもいで贅沢食べる朝
宝石は君自身だと逃げておく
トラのVにわかファンも呑んでいる
カーナビに恋運吉と教えられ

生駒市 小西 稔

外づらに気をつけすぎて内輪もめ
内輪でもメールで話す新時代
座禅組み雑念捨てて生きかえり
雑巾をしぼる教えも役に立ち

和歌山市 根田 よしこ

酒飲んでちよっと優しく介護する
パーマかけおしゃれして行く診察日
一日の介護を終えて虫の声
あの時にご免と言えば済んだのに

和歌山県 村中悦男

あちこちへ置いて結局粗大ゴミ
上辺だけ眺めて噂できあがり
私は二人といたないから大事
秋冷に先ず下着から衣更え

田辺市 大崎可動

秋月や雲に踏まれてピカソの眼
血糖値さざれ石かや遠出かや
数えうた過去の駅から点になる
天の紺 自律神経陽を拝す

鳥取市 森 美智代

曼珠沙華ボキンと秋の音がする
哀しみはきっぱり青い空の果て
渋抜かれ柿の主張が甘くなる
傾いた重心戻るまでの道

鳥取市 山口 千代子

人生の幸も不幸も紙一重
自動ドア両手の荷物苦にならず
風なきに落ちる枯葉に老い感じ
幸せが続くと先が恐くなる

鳥取県 毎田 信翁

腹立てぬことにも馴れて老いの坂
無信心祈る心は持っている
心配の種を蒔かぬに生えてくる
その話聞いたらきつと熱が出る

鳥取県 西垣 美知子

秋夜長読書で脳の錆落す
この涙笑顔に変えて介護する
糠味噌の中から亡母の声にあう
少しでもバカになったら楽になる

鳥取県 鈴木 一弘

病みあがりめつきり減った酒の量
初恋は出会いの森の奥深く
久しぶり出会って長い立ち話
穴埋めを求められても土がない

鳥取県 福西 茶子

恋心褪せてポストも瘦せてゆく
地藏様お帽子どうぞ冬来ます
蛇口から尾ひれのついた話湧く
句読点見つけぬままに幕下りる

倉吉市 酒井 美美子

ロボットに使われ尻を叩かれる
親は子に自分のレール敷きたがる
雑草の生きざまマネが出来ません
丁度良い薄くて丸い妻の味

倉吉市 青砥 菊枝

年月が駆け足になる老後なり
この人も独り近況語り合う
優しくとつても上手な嘘を言う
初恋の人の名前は間違えぬ

米子市 池尾 保子

見苦しい姿は見せぬ老いの坂
揚げ足をとりあっている政治論
寝そべって見てもリモコン電池切れ
上げ膳と据え膳娘里帰り

米子市 猪森 スミエ

挨拶は以下同文というタイプ
しきたりで村が膨む秋祭り
たくましい人が隣にいる安堵
虎が勝ち晩酌重ねトラになる

松江市 山根 邦代

喜びが祝い袋に詰めてある
ふるさとで雲の流れを飽かず追う
満天の星が背伸びでつかめそう
太陽の匂いが眠り深くする

島根県 毛利 幸

ダイエツト稔りの秋が邪魔になる
ふるさとは私を過去に返す土地
想い出が走って過去を映し出す
せかせかと生きても空し人生譜

島根県 福岡 博利

秋彼岸栗の香りと母の声
影法師今夜お前と歩こうか
雲をみるお前もなやんでいるのかい
途中下車昔の風に会えそう

出雲市 梅 ミツエ

コスモスが肩を並べて踊ってる
彼岸花土手の彼方を赤く染め
風に舞う花びら何処へ散ったやら
タンポポのペールが風に舞い踊る

出雲市 川島 和歌子

さんま焼く食欲そそる裏通り
良い知恵を沢山持つてる他人様
千円で私を包む春衣
隙間風心のいたみもてあそぶ

出雲市 加藤 スズコ

お人柄にじむ言葉に味を見る
書きかえた余生の趣味に虹を見る
ほどほどの幸せつかみしかと抱く
暮しの灯匂う漁場の裏通り

出雲市 荒木 英子

残り火は過去を忘れてマイペース
幸せを掴んだ時の充実感
晩学に燃えて益々いそぎ足
前向きに苦あれば楽と亡母の声

府中市 馬場 利子

コスモスが秋の余白を埋めていく
絵手紙へわたしの風も詰めてみる
残り火を燃やす火種のワイン買う
ハンガーに今日の幸せ掛けておく

宇部市 高山 清子

怪我せぬよう詮索好きへ車間距離
古い二人話はないがお茶を入れ
風向きを読んで主張を裏返す
強がりの後を孤独が走り抜け

宜野湾市 杉谷 栄

波風を立てない別居しています
下手な絵を送り上手な絵を貰う
悪筆と思い込んでる表書き
タクシーで行ってずい分濡れた服

アルゼンチン 松井 美稚子

平常のペース乱さぬ冬將軍
此のカボチャ誰にあげよう種を蒔く
捨てた過去六十路を左右に夢が曳く
刑務所が不足で刑を軽くする

愛媛県 花岡 順子

言い訳がとことんまずくさせた仲
齒に衣を着せぬ男で叩かれる
足して二で割ったところで物足りぬ
出直しへ駄馬はやっぱり駄馬のまま

高知市 伊野部 和江

百均の壺にはまって片付け魔
赤い糸早く手繰れと焦る父母
反論を喉で堪えて聞く話
言い訳の無い人生に切り替える

高知県 貞岡 佐紀子

ぬくもりを乗せた車が会釈する
カーナビが欲しくなってる老眼鏡
紅葉マーク我が道をゆく過疎の村
あと戻り出来ない車依存症

高知県 近森 功

針千本のもんで小指に愚痴を言う
夕焼けを背負って急ぐ影法師
納豆の糸が甘える不精髭
米不足休耕田に罪はない

天竺の綻び雨を持て余す

青森県 福士 トキ

朝顔の明日咲くつばみもう数え
冷夏にもよくぞ耐えたる黄金波

日高市 根岸 方子

誕生日何も変らぬ日を過ごす

遺伝子があなたのウソも聞き流す

遺伝子にグチを言いたい血糖値

東京都 井上 つよし

影法師晴れの日にだけ従いて来る

絵に描いた平凡の日々過ぎてゆき

申訳けないが冷夏は楽だった

横浜市 金森 徳三

お互いに頼りにしてる喜寿の道

デバ地下に活気みなぎる年金日

使い捨て老人力を守る過疎

横浜市 石原 三郎

ひったくり青蛙でも入れとこか

鍵穴に蓋をしてからよく眠る

読める字の二割も書けぬ物忘れ

草津市 久保 和友

血圧は二百それから眠れない

人間はもう終りです火星さま

黒土が故郷にあった水たまり

しきたりを忘れぬ亡母のお赤飯

静岡市 中西 雅

夫婦鳩庭の木に来て朝を鳴く

たのみの絵馬神はうっかり地に落とす

京都市 三宅 満子

青春が夜行ちくまと共に消え

名月なら見ても許せる露天風呂

朝市は曲りきゅうりも胸を張る

大阪市 中村 忠敬

大家族今はわたしら二人きり

マタニティー子供産んでもまだ着れる

ルビ振って無理に読ませる四股名つけ

大阪市 辻本 登季子

新月に家族の健康ただ祈り

静かな夜娘時代が懐かしい

田舎より季節の便り栗届く

大阪市 井丸 昌紀

パソコンでめでたくもなし年賀状

ゆつくりと喋り頭はフル回転

秋の香にちよつと道順変えてみる

大阪市 平井 露芳

不況には勝てずニュースの灯が消える(丸ビル)

非売品金券ショップで金に化け

水分補給ビールは水と違います

大阪市 吉内 タカ子

車椅子押させてもらい知恵もらう

もう一月親の歳越せ未だ生ける

孫ねだる運動会の綱引きに

大阪市 近藤 正

内閣は二世議員の飾り棚

いるものは百円店で間に合わせ

季節ボケ月下美人が四度咲く

大阪市 三浦 千津子

彼岸花燃えて炎の吐息吐く

月満ちて不粋な恋を見届ける

ゆく夏へ美しく消す恋終焉

大阪府 畑中 節子

苦しみも辛さも生きている証

薄い知恵しほって今日も指を繰り

萩しだれ歩幅ゆるめる散歩道

大阪府 藤井 郁代

見てほしい見ないでほしい家計簿を

幸せは自分が決める欲ばらず

年老いて一つ返事は喉つかえ

大阪府 小栢 こずえ

鉛筆と紙で逝くまで良く遊ぶ

お出かけのあてもないのに白髪染め

孫の笑み輪をかけ話ジャンプする

大阪府 大向 ナツ子

幸せの煙逃がさず袋詰め

愛の花頑固な石の側で咲く

一歩出す影を視つめてまた迷う

大阪府 高木 道子

金木犀かおりのシャワーに酔いしれる

栗の実が目前に落ちて自己主張（栗拾い）

相槌は打たず笑ってすましとく

泉佐野市 備後 三代子

そよぐ風寄り添うように秋ざくら

赤の字で寿の字福の字祝餅

年代を選び分け出来る歌暦

大阪狭山市 羽田野 洋介

お日様を大きく描く子等元氣

大きい顔しても変わらぬ影法師

私は誰ちよっと危ない酔い心地

柏原市 伴 洋子

小器用に外国人の箸つかい

まだ恋を知らぬ乙女にあるツバサ

虹の橋越える翼を持つ若さ

門真市 矢阪 英雄

この病のりこえ迷路脱出す

ふるさとにいない母だが風の声

わが妻に似ていたはずだが母は

交野市 田岡九好

雑念を払うがごとく花が揺れ

くたびれて帰りはバスに乗る散歩

飽食の影が落ちてゐるごみの山

河内長野市 内海綾乃

ほおずきを鳴らす祖母見て不思議そう

携帯もどこまで進化恐いです

がんばれと杖に止まった赤トンボ

岸和田市 堤 梢代

最愛の方のためなら軽い腰

大好きな人が待つてゐる軽い足

叱る顔たまには見せて喝入れて

岸和田市 中島寿海

歳は増え収入減つて支出増え

お百姓自家用だけは無農薬

外国の会社が増えた保険業

岸和田市 坂口英雄

再選で三年眠る消費税

援助大国自分の国は火の車

ゆっくりと煙草も吸えぬ世の中に

堺市 荻野像山

大柄を小兵が決める技の切れ

取り敢えず似合つてゐると言つておく

ライバルになるとも知らぬ初対面

堺市 奥 時雄

古ネクタイ古着くくつてゴミに出す

運勢が生まれた月でみな同じ

乱雑に見える整理もあるのです

吹田市 須磨活恵

本人の返事待つてゐる秋ざくら

修羅のごと火のごと燃える曼珠沙華

波風が立たないようにひとり言

吹田市 木下敏子

お金では買えない森の酸素吸う

ふわふわと空気の中をゆく余生

ストレスに支配されたか胃の調子

高槻市 田中初恵

手を振つて別れるだけの車間距離

アンテナがキャッチし過ぎて疲れます

ブーメラン付けて背の君送り出す

高槻市 執行稲子

鋭さがすこし災いする乙女

業平とデートの夢のはかなさよ

カタカナに惑わされてゐる老いしきり

高槻市 大崎侑子

落日へただ肅然と立ち尽くす

真ん中は目立ちたがりの指定席

拡大を続ける宇宙芯有りや

豊中市 源 田 啓 生

エプロンで包んだ愛は忘れない
拝啓も敬具もいらぬメール来る
鬼も居る渡る世間を子は知らず

富田林市 古 田 千 華

母と行く湖東三山西明寺
時雨でも迎えがないと腹がたち
誘うはずなかった人が二人いる

羽曳野市 濱 口 フ ジ

秋祭り子供に戻り食べ歩き
故郷のダンジリ想い目をつむる
ダンジリの屋根で羽ばたくいなせな子

羽曳野市 仲 谷 真 一

虎の威を借りるバーゲン最後かな
独身でアタックチャンスのがして
独身の僕の心を慰めて

羽曳野市 森 下 一 知

万策に尽きて不貞寝の昼下がりに
あの人があると空気が丸くなる
良く喋るかなり回っているらしい

羽曳野市 永 田 章 司

音痴だが六甲おろし歌えます
リストラで現場の字引一つ減り
慰めの言葉の裏に冷えた笑み

羽曳野市 吉 村 久仁雄

移り氣に今生かされる趣味の数
君こそが晩成型と古希祝う
ひげ半分残したような電池切れ

東大阪市 今 岡 貞 人

秋日和布団重そう陽の匂い
スーバーに秋の匂いをかぎにゆく
人柄は別で財布は一つなり

東大阪市 田 中 美 弥 子

哀しみの底で気づいた夫婦愛
その度に結び直してルビー婚
ペン握りまだまだ私燃やしたい

枚方市 二 宮 紫 鳳

夫婦坂越えてねぎらう玉の汗
花ふぶき幸せこぼれるツーショット
子ら巢立ち淋しくもあり秋日和

枚方市 大 昇 隆 広

ピカドンがさらっていった父の膝
布団替えた床へ虫の音秋に入る
清廉と勇氣の話明日の糧

枚方市 小 川 良 吉

失敗の落ち込み癒す虫の声
失敗を里の野菊が忘れさす
失敗を重ね世渡り丸くなり

藤井寺市 増井 ヨシ枝

ここだけの話あちこち落ちている

玄関に亡夫の靴あり一周忌

コスモスと小さな恋の話など

藤井寺市 若松 雅枝

娘のスーツ手直しをして秋を着る

忘れてた真赤なバラに棘がある

一銭でどんぐり二つ買った日も

藤井寺市 伊藤 アヤ子

うれしくて気持は三步先に行く

生きている証に私爪を切る

どんぐりがぱんとはじけて旅に出る

箕面市 寺井 柳童

小さい秋見つけた胸の赤い羽根

あと一段いつも躓くあわてもの

初冠雪一色加え草もみじ

八尾市 中島 春江

笑わせるこつも心得彼岸僧

山の宿はりきる父の鍋奉行

さっそうと歩けぬ歳よ秋空に

兵庫県 岩本 美緒子

調子よいドリンク効いた今朝の靴

磨かねばあかん細腕最期まで

窓一ぱいのコスモス嬉しいピンク白

尼崎市 桑原 東園

ジェラシーの言葉キラキラ首飾り

まっすぐに歩いたつもり千鳥足

虫干しの背広名残の空気吸う

尼崎市 古川 正子

おろしそば豆腐も旨い灘の店

市バス乗る優先席は満員だ

高校生通路に座るなぜかしら

篠山市 谷田 多美子

第二子をまつ曾祖母の冬籠り

本家の証墓標にきざむ紋一つ

照る柿に心の髣も伸びる空

三田市 石原 歳子

マイホーム見晴らしだけは自慢出来

故郷を迎えてくれた国訛り

万葉を偲んで炊いた古代米

三田市 辻 開子

夏の花向日葵が好き夏も好き

今日の卓旬の味ですどの皿も

ウオーキング毎夜月見て会話する

奈良市 矢野 良一

玄関で言い分けしてる午前二時

絵心誘う明日香の里の彼岸花

稲刈りもオートメ化され風情なし

奈良市 田 中 賢 治

妻の声仕事と家族どちら取る
寒い日も夫婦車の野良仕事
更迭を蹴って水入り隠れんぼ

奈良県 南 海 美知夫

喉元を過ぎては失敗繰り返す
こつそりと鼻唄やがて全開す
人生の余白うめるは遅すぎた

橿原市 藤 永 実千代

待ち合わせ五分の壁が破れない
嬉しきは優しさ溢る母が居て
頑張れに代わる言葉の見つからず

和歌山県 辻 内 次 根

故郷へ帰ると何時も曇り空
愚かしい奴を映している鏡
老人にカネがあるとは誰のこと

鳥取市 西 尾 敬之介

担ぐもの何もないから縁起でも
山あいを聞こえてくるや秋囃子
飴玉をほおぼり過疎の秋暮れる

鳥取市 谷 岡 清 子

人生の幸拾い見る写真帳
介護するだけの絆に夫婦仲
さみしいと心が叫ぶ青い空

鳥取市 近 藤 秋 星

マニフェスト妻に実行迫られる
神さまが聞かないはずだ神無月
摘んで来た芒数本秋を活け

鳥取市 岡 田 信 恵

支え合い共に笑顔を身につける
想い出がゆつくり解ける老いの顔
脳味噌に刺激加えて夫婦坂

鳥取市 河 田 のり代

小言聞く妻は悟りの軽業師
ふるさとが四季を装い墓参呼ぶ
鮎釣りに短気の虫が騒ぎだす

鳥取市 横 田 春 名

詫びること次々浮かぶ秋の暮れ
やさしさも時にはへそを曲げたがる
秋夜長古い日記に亡母の愛

鳥取県 竹 信 照 彦

離婚した奴の強がり聞いている
逃げ足も来るのも速い秋の雲
神無月神は不在の秋祭り

鳥取県 西 原 真 一

エコーからわかばに替えて吸っている
ラジオしか聴かぬ生活にも慣れた
万策が尽きたあぐらをかいている

鳥取県 橋谷 静江
仲良しで夫婦ドラマをつづけたい

協役で夫婦ドラマを演じてる
満月へ心の中を見透かされ

鳥取県 藤山 弘子

なにもかも知りつくす下駄すてられず
父の下駄散歩のリズムきめてある

天高く舞い上がりたい目標値

鳥取県 岩崎 和子

読書後にぞくぞくとする波が来る

赤青黄色どり生かす白い皿

皿まわしきつとどこかで落ちるだろう

鳥取県 山岡 久枝

晩酌も秋刀魚もうまい夕の膳

好きだから鯛より鰯よくたべる

趣味の花咲かせて余生おくりたい

鳥取県 岡村 孝明

そろそろと歩き余生の夢を見る

軽く受け大役悔やみ眠られず

妻の指示短気は止めてのんびりす

鳥取県 平木 公子

相談はするが結論決めてある

百歳の笑顔に皺が味を増す

晩酌で今日の帳尻合わせてる

鳥取県 細田 裕花
深追いし知りたくもない事を聞き

決めたはずの心が今も揺れている
後悔をするよう人は出来ている

鳥取県 吉田 弘子

枯葉舞うまさかの悲報多過ぎる

玄関で留守番をする男下駄

猫舌を臨機応変使い分け

倉吉市 前田 喜美子

自転車に何時まで乗れる古希の坂

財布からカードが主張して困る

藍染めし緋に母の影にじむ

米子市 小塩 智加恵

お互いにけなし合ってる物忘れ

冷静だ私血圧低いから

悲しい日窓から冷たい風が吹く

松江市 松浦 登志子

横糸にぶらさがってる夢をみる

肉ジャガを喜ぶ人と温かい

もの心ついた時からダイエット

鳥根県 菅田 かつ子

コスモスが迎えてくれた無人駅

健やかにこの世で長居してみたい

癖が出てまたもブレイキ踏んでいる

島根県 武 島 ちよえ

作らない者が案ずる米の出来
気弱さが神や仏にまた頼り
ブレーキが利かぬお喋りまだ続く

安来市 原 煩惱児

拍手は打たぬ出雲の神在祭
青い空僕のころも澄んでいる
感謝して安近短の旅に出る

岡山県 矢 谷 富士野

寅さんがあらわれそうな秋祭り
褪せぬのに何故散り急ぐ藪椿
枯すすき蝶もとんばも寄りつかぬ

倉敷市 撰 喜 子

毘とわかる子の落し穴落ちてやる
楽々とカードで買つて払えない
椅子取りの椅子ヘリストラ風が吹く

府中市 岩 本 雅 代

母の味梅一粒を口にする
鈴成りの甘柿の黄青い空
解散の風に老木まだ元気

宮崎市 浜 砂 泰 子

約束をまだ果たせずに盆供養
犬にだけソフトにしゃべる孤独感
ゴミ箱の鉛筆拾う戦中派

唐津市 坂 本 兵八郎

母卒寿西方浄土へ舟を漕ぐ
なにくそと今日も男が本を読む
元の肩書がさせてる一人旅

唐津市 岩 崎 實

また会おうほどほどがよし自動ドア
打ち消してプラス志向がまたくずれ
曼珠沙華刈り残されて稲の畦

東かがわ市 向 山 治 延

さそうても寄つてくれない福の神
山頭火の句碑をたずねて結願寺
此の月も余命をのばす万歩計

松山市 山之内 八重美

足止めて見入る案山子のニユールツク
根つからの田舎育ちで口べたで
懐かしいこんがり妬いた遠い日が

愛媛県 宮 本 末 子

十月の白に始まるサルスベリ
寄せ植えが届き感謝の霧を吹く
水の裏見て来たような人に逢う

愛媛県 安 野 かか志

コスモスも私の影も夕暮れる
豊漁の秋刀魚に飽いた家の猫
絵に描いた改革論に飽きて来た

(西森善蔵・百田幸さんの句は51頁に掲載しています)

麻生路郎物語

(24)

―戦争と路郎一家―

東 野 大 八

昭和十九年九月十五日、私たち一家は三重県へ疎開した。毎年九月になると疎開した頃のことだ。脳裡にうずく。それは一つのあまのつばい懐しさでもある。

陽光に輝くB29の雄姿が、疎開荷物を運ぶ私たち親子のすぐ頭の上を東方めざして飛んでいったこと、はじめて知ったジャガイモのあまのつばい、柴拾い、百姓のマネゴト、何から何まですべてが原始生活への逆行であった。疎開の決行についてはしゅんじゅんしゅんしゅんだったが、そんな遠隔な地へどうして荷物を運ぶかと言ふなやみはなかなか大きかった。大阪から三重県まで疎開荷物を運んでくれるようなトラックはいなかった。たとえ運んでくれるとしても、彼等の申出る莫大な資金と多量の白米の要求には応じたくも応じられなかったのである。遂に私は当時十六歳の三男

(筆者註) 麻生一步。次男アイトは徴用で呉市へを対手に、私たちがその白米を食べることによつて私達が運ぶ決心をした。

私は一台のリヤカーを手に入れ、焼失したもう二度と手に入られそうもない書籍や家具を二回に運んだ。それは朝発つて三日目の午後二時でなければ行きつかぬ距離であつたが、足にまかせて大和川を目あてに王子へ出て奈良県を北へ突き抜け京都府に出た。

木津川ぞいに木津、加茂、笠置、大河原、島ヶ原を経て伊賀上野に出た。疎開地はそれから東方一里(四キロ)の山の中腹であつたが、とうとうそれを断行して友人をあきれさせたものであつた。

私はここに生活の一時的の根拠を見出し、四、五日分の食糧を手に入れリュックに詰めセツセと大阪への芭蕉の旅をつづけたのであつた。私や三男が大阪へ戻つてからも、妻は

疎開地に残つた。

その後、妻の疎開は三転四転して遂に奈良県宇陀郡に疎開荷物をあづけたまま、終戦四年して引揚げてきた。

はじめて疎開してから十年の歳月が流れ、昭和二十九年八月四日を期して疎開荷物を全部引きあげてきて再びあきられてゐる。箸と茶碗、イヤ茶碗がなくともカレー皿一枚あれば生きられることを骨身に徹して知らされながら、小さな欲望が捨て切れず、金と時間を費してまで疎開荷物を引きあげてきたことである。人生は簡単には割切れない。そこに川柳が永遠性を持つのかもしれない。

(川柳雑誌) No. 328・昭和9・麻生路郎

路郎一家は、大東亜戦争勃発の際の住所は堺市出島海岸通り二丁目一八二番地で、ここから大阪市西区江戸堀上通り二丁目四六の昭和ビルに通つて川柳の編集に當つてゐた。路郎一家が「堺みなと」と懐しんだ堺の家は、有恒倶楽部川柳部の橋本破夢造の紹介であつたが、入居の際の約束により昭和十八年五月ここを引き払つて大阪市住吉区万代西五丁目二五番地に転宅した。

この万代の家は、日本楽器株式の大坂店の支配人であつた川柳人村松夢裡が住んでいたところで、急転勤の辞令を受けたため、路郎一家がそのあとに住みつゝ形となつた。路郎

が葭乃と結婚以来、転宅転居の連続で、この万代の家にとどつた時が実に十四回目の勘定になる。

ともあれこの家は、路郎一家にとっては終生忘れ得ぬ思い出の住居となつた。この家から『川柳雑誌』奉還号を出し、終戦とともに復刊号で再スタートし、そして昭和四十年麻生路郎追悼号をもつて、その輝やかしい誌齢四六〇号の幕を閉じることになる。『川柳雑誌』と巨匠麻生路郎終焉の地こそ、この万代西五丁目二五番地の陋屋であつた。

「堺みなとの家にいるとき、アート（次男）は呉へ徴用にとられ、程なく大阪の師団に入営することになりました。

戦争ははげしくなつてきて『川柳雑誌』もとうとう奉還号を出し、私達は伊賀上野市から四キロへだてた一の宮の妙慶寺へ疎開いたしました。この寺の住職が出征したので、その留守の寺をお借りすることになったのです。これは、有恒倶楽部川柳部の立川さんの紹介です。立川さんは伊賀上野に立川ペン先の工場を持つておられましたから、便宜を図つて下さいました。

疎開先も私達は四度も住居を変えました。第一が一の宮妙慶寺、第二が伊賀上野市桑町、第三が奈良県宇陀郡向淵の川柳家上田翠光氏宅、第四が宇陀郡三本松頓光寺です。

一の宮のお寺の生活の後半ころから、路郎は大阪の万代の家に戻り、赤目芋やほうれん草などの私の手づくりの野菜を大阪へ運びました。

上野市へ移つてからも荷物と共に、私は疎開地へ残りました。路郎は絶えず往復しました。上田翠光さんのお世話で奈良県へ移つてから、北川春泉さんのお力添えでトラックを回してもらい、ようよう私も大阪の万代へ戻りました。静子（アートの妻）に、大阪の市内の地図を借りて見当をつけましたのが、昔あつた橋はなく、堀は埋められたのもあつて、おまけに交通網が入り乱れてサツパリ見当がつかずタメです。

木津川と安泊川が合流するあたりに「はたてくら橋」というのがあつた筈なのに見当りません。グレンシヨウ氏が、昔の川口町のことを詳細に英文で紹介している「なにわのあし」という本を、中島小石さんから借りて読んだことがあります。それには昔の街のありさまが鮮やかによみがえつてくるように描かれていました。

木津川を渡つて居留地へ行くまでに大阪府庁があつたと静子に説明したら、そんなところに府庁がおますかいな、大手前だんがな、といいました。（葭乃書簡）

「あの戦争で五女の梨里は、会社の寮が戦火に焼かれ、京都山崎まで時限爆弾の中を走

つて避難した経験を持っていますし、奈那（四女）は、和歌山で空襲にあい、紀の川で半日以上つかつていたと申します。中国のようないく国ならば、戦争はどこでしているのかも知らずに暮らしている人もいてしょうが狭い日本の空の下で、戦争のときも平和に暮らせたことは嘘のようでございます。敵も相手にできぬような山村僻地に私はいたのですから……」同

「私が第四回目の疎開地大和頓光寺の別棟に居りました時は、朝も昼も鶯（うぐいす）の声がかこえました。雷鳴はげしい夜などは宇陀川の流れにそつた山々へ稲妻の走る壮観は、キネオラマでも見ている様でした。平素は何の物音も聞えぬ静けさでありました。

「こんなところで一日いたらさちがいになつてしまふ」

と亜鈍さんがいわれたことがありました。

―鬼あさみ 無縁の墓を淋しうす 葭乃

この旧作はここで生まれた句なのです」

（同）

「回顧すると太平洋戦争の苛烈な昭和十九年九月十五日に私一家は一の宮の妙慶寺へ疎開した。

私は終戦になつてから大阪へ立ち戻り、葭妻葭乃は上野市桑町に移った。その後、連絡に不便を感じたので、上田翠光氏のあつせん

で葭乃は奈良県宇陀郡三本松村の頓光寺の離房に移った。昭和二十年十一月十六日のことである。

ここは非常に景色の美しいところで、山また山に取囲まれているし、脚下には宇陀川が流れている。ここへ移った時、私は障子を開いて前方に折り重った山また山の美にうたれ思わずくちずさんだのが

——名も知らぬ山の起伏をうれしがり 路郎であった。

葭乃は二十四年十一月に帰阪し、荷物は三本松村向淵の翠光居の二階にあずかつてもらった。向淵は頓光寺から二里半（約十キロ）の山上であり、近鉄の室生口大野駅下車、北方へ一里余（約五キロ）である。

今回そこへ句碑が建つことになったので、同じ三本松村であるし、眼界はどこまでも山の起伏であるところから「名も知らぬ」の句を選定したのである。」

（川柳雑誌 №280・昭25・9号・麻生路郎）

この句碑建立については、路郎句碑の項についての稿で後述するが、ともあれ路郎一家の戦時疎開に、よくねんごろに面倒をみたのは門下の上田翠光であった。

翠光は大阪で工場経営を行っていたが、応召のため廃業。復員後は戦死した妻弟にかわり三本松で百姓をする決心をする。こうしたにわか百姓の生活の中に路郎を招き、夜半ま

でよく川柳を語りあったという。こうした縁から、翠光は「先生のための一庵建立」を思いたち、路郎に相談したところ

「庵などとは聞いただけでも隠遁的だ。同じ作るなら大衆のためになる建設的な施設がよい」

と一蹴され、結局、恩師への記念に句碑建立を発願したのだという。路郎句碑では二番目で、昭和二十五年八月三日不朽洞会員多数が集り句碑除幕式をこの山上であげている。

昭和二十年の終戦の年は、路郎五十八歳であった。この年から路郎は、それまで愛用していた戦闘帽を捨て、本来の無帽主義にかえっている。

「戦時中には、私たちがよく挙手の札をさせられる機会が多かった。しかも平気でそれをやっていたのである。今から考えると一寸滑稽に感じられる挙手の札であったが、不自然というよりも、その頃の生活状態にピタリと調和していたのである。」

最近S消防署へ講演に招かれ、帰る時サイドカーに乗せて貰った私へ、署員が一斉に挙手の札をもって見送ったので、私も反射的に挙手の札を返した。無帽の私は天皇陛下のように帽子をさしあげて答礼するわけにはいかなかったのである。考えてみるとこの場合お辞儀をするより挙手の方がよく調和しているように思う。

作句にしても素材の調和、言葉の調和、音調の調和など巧みに塩梅されてはじめて佳吟が得られるのである。時には破調の佳吟がないでもないが、それとても厳密に言えば調和を破つて第二の調和を形成しているものであつて乱脈を意味するものではない。

私たち一家が三重県へ疎開していた頃の経験に、農家へ有形（衣料品）を与えるとすぐ有形（食料品）で返してきた。ところが無形（知識）を与えても何等返してはくれなかった。私は有形を与えても、無形を与えても返して貰うことを予期して与えたことは一度もなかったのである。

（中略）概して文化的感觸の問題だが、無形の価値を評価し得ない人たちが、過少評価される人たちがうける損失は小額とはいえない。文芸人の多くが富裕でない原因はこんなところにあるのである。しかしその罪が一方的でないことを認めないわけにはいかぬ。

文芸人の思い上つた無形財が真に無価値である場合もあり、また有価値であっても所謂猫に小判である場合もあるからである。特に恒産のない限り右に述べたような理由で文芸人の多くは清貧に甘んじなければならぬのである。殊に短詩文学で生活することの容易でないことは言うまでもなからう。」

（川柳雑誌 昭和25年・8月号「窓」・麻生路郎）

同人特集

酒百句

平成十一年、平成十三年
同人吟から 編集部

十二月まがりくねったところで飲み

冬の酒蛸の足こそ親しけれ

路郎

薫風

居酒屋で一人つぶやく濡れ落葉

一口の酒に今夜は隙が出来

酒と聞くだけで鳥肌立つてくる

ただ酒へ抑え込まれた腹の虫

顔の利く店 一番安い酒がでる

休肝日男に酒の灯がゆれる

酒とろり ゆっくり秘密こぼれだす

爛ざまし夫の老いを淋しがり

酒の量減って兄弟歳をしり

インターを歌ってならぬ酒の席

淋しさはまた一人逝く酒の友

川内 叭笑

鴨谷 瑠美子

川島 諷云児

平田 実男

藤解 静風

西村 早苗

植田 一京

門谷 たず子

渡部 さと美

田中 正坊

傍島 克治

光陰は刻々 僕は酒刻々

甘酒がぶくぶく先が楽しみだ

白酒や独りになった罐まつり

小さな春 酒の力で盛り上げる

酒こぼす亡父に似てきたなと思う

バランスを崩した酒と二十五時

快気祝い酒が病気を自慢する

病院の近所で酒を売っている

食べ放題酒など呑んでいられるか

居酒屋で学ぶ処世の裏表

酒二合朝まで安定剤になる

武田 帆雀

安食 友子

淡路 ゆり子

天正 千梢

高瀬 霜石

大橋 政良

福士 慕情

西村 黙光

山本 正光

井上 直次

須郷 井蛙

自転車を飲酒運転しています

一合で事はたりますうさばらし

口止めの酒だたつぷり飲んでやる

たわいない話に笑うだけの酒

晩酌の小瓶夫のエネルギー

好きな酒止めたらあんならしくない

言い負けて父は楽しく酔っている

残月もわたしも今朝は二日酔

問診へお酒の量が減してある

いい縁を感謝しながら酌み交わす

目が酔っているのに酔ってないという

老人と認めた父の酒の量

人柄を大切にする父の酒

タタ酒を呑んで吐いてる怪気炎

恙なく仕事も減って酒も減る

告白するには酒がちと足りぬ

果実酒は年代順に欠伸している

酒のうえだから尚更許せない

独り酌む昼酒に酔い淋しかり

お賽銭ほどのお神酒を注いでくれ

秋たけなわ私たけなわ赤ワイン

西出 楓楽

二宮 山久

太田 幸枝

井上 松煙

原 さよ子

初山 隆盛

川端 一步

神原 文

古谷 節夫

宮尾 みのり

片岡 智恵子

牛尾 緑良

刈田 泰司

谷口 義男

岩津 ようじ

安平次 弘道

吉田 孔美子

井上 勝規

小澤 幸泉

北野 哲男

太田 とし子

さればされば強い酒とはまた嬉し

酒 煙草のんで仲間にしてもらう

こんな酒くらいで酔うたりはしない

奥様は二合の酒で鬼退治

七人の敵を味方に変える酒

追加した酒が人生語り出す

ジェラシーは酒に溶かして捨てるもの

理想論酒はだんだん辛くなり

雪月花みな酒にする君だけど

酒の量減らして眠れぬ夜を過ごす

春の宵酒は目盛りのところまで

酒壺を提げた河童と縄電車

養命酒ただななく なんとなく

シャンパンをボンと抜いたら春が来た

桜にも酒にも雑魚はすぐ群れる

父の日も昨日と同じ酒二合

晩酌は奥さんがしてはるらしい

酒を飲み忘れた事にする男

すこしずつ飲めとは酒を知らぬ奴

もう三日酒呑んでない死にそうだ

薬だと毎食お酒二十ミリ

森下 愛論

藤田 泰子

松本 文子

志田 千代

中島 志洋

小白金 房子

神保 坊太郎

相馬 銀波

緒方 美津子

竹治 ちかし

仁部 四郎

岩崎 みさ江

小池 しげお

田辺 鹿太

梅田 宣司

西谷 大吾

谷口 義

児玉 蛙

三好 専平

早川 盛夫

岡井 やすお

缶ビール握ると夏の輪ができる
 安売りの酒で増え出す依存症
 酒なくば充電出来ぬうちのパパ
 手の届く範囲に酒と本がある
 ふと酒が呑みたくなつて秋を知る
 独学で覚えたタバコ酒おんな
 ヒレ酒を呑んで大海遊泳す
 とつておきの酒が出たから帰れない
 酒も好き饅頭も好き妻も好き
 熱爛とふんわりいのち長らえる
 ロゼワインかわいい魔女にしてくれる
 ほろ酔いで歌うは故郷の安来節
 盃の底に浮かんだ医者顔
 百葉の長は楽しく水いらず
 無礼講にも盃の順があり
 卑怯にもじわじわ効かす冷やの酒
 ワインの値 見分けるような舌でない
 徳利が転びそろそろ出る本音
 逃げ道のひとつおとこに酒があり
 梯子酒三次会まで覚えてる

古川 奮水
 相馬 一花
 長谷川 淳
 春木圭一郎
 神原まさと
 新家 完司
 籠島 恵子
 上田 俊路
 池内 かおり
 西口 いわゑ
 大内 朝子
 榎谷 郁子
 穴吹 尚士
 江原 秀夫
 堀江 光子
 杉澤 汀
 内海 幸生
 倉益 一瑤
 白根 ふみ
 小野 旬多留

酒を出す動きするから動かれぬ
 酒も煙草も女も父を越えられず
 真実が酒からぼろり漏れてくる
 酔客にどつと疲れた花吹雪
 涙などお酒に混ぜて飲んでおく
 後悔の酒こめかみを打ちつづけ
 ワンカップでも治まっている腹の虫
 ふわふわと一合分の無重力
 敗因をさぐるお酒を一人酌む
 独り酒つき合いの良い柿の種
 いい酒と言われておとなしくしてる
 紙パック酒もミルクも味気ない
 そう言えば晩酌注がぬ妻になり
 電話機の向こうにもいたひとり酒
 三合の酒に人格ポロリ落ち
 居酒屋に元氣な雑魚が群れている
 お酒がうまいまだ人間をやれそうだ
 茶碗酒美味い日まずい日飲めない日
 酒税なら自慢するほど払ってる
 ビールごときに男一匹黙らされ

土橋はるお
 小島 蘭幸
 久保田 千代
 西村りつえ
 川口 信子
 原 みさを
 清川 玲子
 居谷真理子
 吉田 あずき
 藤井 正雄
 高田 美代子
 和田 つづや
 岸本 孝子
 増田 紗弓
 小寺 花峯
 阿部 進
 海老池 洋
 川原 章久
 奥村 五月
 岩佐ダン吉

愛染帖

波多野五楽庵選

高槻市 乙倉 武史

合掌をして秋蠅を血祭りに

花道に見せたしぶとさ嫌らしさ

木枯らしや此の世に遺す思慕幾つ

弘前市 相馬 銀波

アキアカネ不稔粉にも来て止まり

策のない男泣かせる紙相撲

輪を抜けてスローライフを模索する

富田林市 中井 アキ

逢うてきた余韻ひと駅を歩く

女とは妻とは哀しいすれ違い

東京都 やまぐち珠美

かげひたない能面をつけあぐね

去るものはみんな明日の顔をして

和歌山市 桜井 千秀

小さな目まい別れの予感かも知れぬ

ままならぬ想いかかえて冬のバラ

和歌山市 木本 朱夏

夢に鍵掛けねば私毀れそう

蹟いた石から星が生まれる夜

弘前市 高瀬 霜石

新そばを吸るちいさな秋吸る

カラカラと下駄履く雪の降る前に

富田林市 池 森子

ありがちな話と墮ちるそして冬

隠さねばならぬ椿の火の匂い

和歌山市 西山 幸

訥訥とおんなを生きたる物語

風を見ているコスモスもわたくしも

岡山市 川端 柳子

約束の時間だ人形起き上がる

目も耳もまだ達者です秋の風

弘前市 高橋 岳水

人の世の無常見て来た道祖神

振り返る楽しみもある老いの章

横原市 安土 理恵

引き際の美学とあつさり消えた奴

直角の男で鉤裂きが得意

和歌山市 楠見 章子

抜け殻をそっとしておく秋桜

突然の別れもあろう耳が鳴る

尼崎市 長浜 美龍

然りげ無く頬笑み返す亡夫の椅子

今日こそは明日こそはと陽が沈む

松江市 三島 淞丘

大空が好きで戻らぬプーメラン

大の字に寝て青空を独り占め

四條畷市 吉岡 修

これ以上譲れぬところで生きている

消去法ボクに赤線引いて来る

黒石市 相馬 一花

自画自賛するから逃げる青い鳥

嗅覚が優れて街を歩けない

三田市 北野 哲男

リトマス紙浸すお酒を注ぎに来る

医学書は心配煽る記事ばかり

大阪市 川原 章久

倅せだなあ小さい声で妻に言う

乾杯のときに歌った海ゆかば

鳥取県 土橋 螢

喉仏 手強い関所だと思っ

紫に逢いたくなくて花の寺

和歌山市 上地登美代

積み残すものを数える秋の暮れ

慎ましく生きて疑似餌に寄りつかず

和歌山市 青枝 鉄治

虚言癖もった毯から弾みだす

旅の途でひと呼吸する絵巻陀羅

鳥取市 籠島 恵子

哀しみの数だけ深くなる祈り

てのひらで騒ぐ命が焦けてくる

弘前市 一戸 ツネ

生い立ちはいまさらふいば住居

秋風に乱れて主語のない会話

和歌山市 古久保和子

春城 年代

春城 年代

春城 年代

春城 年代

和歌山市 福井 桂香
コスモスの波の中なる捜しもの

大阪市 前 たもつ
魂をゆさぶる本と巡り合い

倉吉市 山中 康子
原点は神聖でしたうぶでした

和歌山市 武本 碧
輪の中にたった一人で浮く寒さ

京都府 丹後屋 肇
愛憎をくるんで冷凍庫にしよう

倉敷市 小野 克枝
生涯の内緒 喪服でけりがつき

京都市 都倉 求芽
いわし雲自分探しの旅に出る

米子市 白根 ふみ
キャベツさくさく 錯覚をせぬように盛る

富田林市 片岡智恵子
気が付くと老いと暮らしていたふたり

美弥市 安平次弘道
沈黙の果ては静かに笑い合い

寝屋川市 江口 度
そんな米粒で良かったのか雀

和歌山市 松原 寿子
風向きに添えば遮断機邪魔をする

唐津市 久保 正剣
昭和史に過去帳だけが厚くなる

堺市 矢倉 五月
他人ならんと思うて許すことひとつ

八尾市 高杉 千歩
老人会 執念深いのが一人

和歌山市 福本 英子
シレッダーかけたいたい記事の多いこと

愛媛県 中居 善信
海鳴りの遙か彼方が出生地

奈良市 乾 春雄
手を貸して噛まれた傷が深すぎる

米子市 青戸 田鶴
うつろえばあわだち草が見えてくる

堺市 山本 半銭
ざわざわと夜更けて森は鎮まらず

和歌山市 喜田 准一
譲れない線なら僕も持つている

弘前市 福士 慕情
塀の穴潜れば風となる童

西宮市 牧瀬富喜子
父の荷の紐が固くて解けない

鳥取県 石谷美恵子
会う度にますます開く車間距離

鳥取市 福田 登美
逆風が吹いても背中見せられぬ

大阪市 板東 倫子
秋空の青さやつぱり明治節

大阪市 神夏磯典子
情念の深さを思う柿の渋

吹田市 太田 昭
育ちのせいか日陰に居るとほつとする

武蔵野市 亀井 円女
土壇場に居ても笑えるのは女

横浜市 芦田 鈴美
秒針のずれに気付かぬ砂時計

東大阪市 北村 賢子
善悪のはざままで揺れる人間味

堺市 和田つづや
気配りが有難くあり癪であり

河内長野市 植村 喜代
暫くは孫と幸せこっこする

大阪狭山市 羽田野洋介
新しい眼鏡鱗がまた落ちる

唐津市 仁部 四郎
原発が来て原色の街ができ

堺市 志田 千代
練りあげた台本通り笑わない

倉吉市 松本よしえ
座り肝臓いつしか消えて母が病む

堺市 桜沢 千世
壁のしみ柱の疵も秋の色

鳥取県 上田 俊路
生き残るためにひたすら明日を抱く

海南市 谷口 義男
突き放す事も優しい思い遣り

羽曳野市 吉川 寿美
靴下の破れが亡妻を恋しがる

西宮市 門谷たす子
塩壺にまだ溶けきらぬ母の愛

今治市 野村 清美
肩の荷を下ろして知った丸い背な

横浜市 金森 徳三
ライターもカメラも人も使い捨て

和歌山市 吉村さち子
義理人情たと古い町に住む

和歌山市 玉置 当代
鰯にもブライドがあり意地もある

鳥取県 毎田 信翁
欲出せば直ぐ良心にとがめられ

鳥取市 武田 帆雀
猩猩のお面横からよく笑う

松原市 小池しげお
まだ欲があるから棚を吊っている

吹田市 山本希久子
初恋の遠きあたりの冬母

鳥取県 鈴木 一弘
影法師人間らしく生きて来た

竹原市 正畑 半寛
橋の真ん中で体操して帰る

鳥取市 岸本 宏章
もう一人の僕と出会ってから迷い

倉吉市 牧野 芳光
鳩尾の真ん中へんは雪景色

高知市 小川てるみ
温い輪の中では自我を閉じこめる

海南市 堂上 泰女
金木庫の香りで包む我が古家

西宮市 西口いわゑ
笑顔との背中合わせにある涙

米子市 林 瑞枝
幸福は心のすき間から逃げる

八尾市 吉村 一風
忙中閑 仏と話す熱いお茶

池田市 栗田 久子
振り向いて愛してまでと言わぬから

尼崎市 春城武庫坊
彼岸すぎ みな善人の顔になる

大阪市 岩崎 公誠
皮下脂肪たつぷり溜めて冬を待つ

八王子市 播本 充子
秋の陽に晒すと照れる足の裏

鳥取県 岩崎みさ江
感動を真空パックしておこう

藤井寺市 太田扶美代
淋しさが暴発絵の具こちゃまぜに

東大阪市 安永 春
オカリナを吹いてチャンスを保っている

唐津市 坂本兵八郎
コスモスも妻も勝手な方に向く

大和高田市 鍛原 千里
いくつもの涙でつづる花暦

鳥取県 西原 艶子
両親が火照るあなたの熱い息

鳥取県 田村きみ子
限りなく書いたわたしの自尊心

鳥取市 岸本 孝子
いい返事もらって橋を渡り切る

鳥取市 夏目 一粋
性格をばろぼろこぼす人の良さ

米子市 中井 ゆき
十三夜 逢えない人に逢えそつな

倉吉市 野口 節子
鬼になるまでの修業がからつきし

高槻市 田中 初恵
包まんてええからちよつとまけてんか

八尾市 生嶋ますみ
ブランド病患う人が溢れてる

箕面市 出口セツ子
心だけいつも童女でいたい紅

神戸市 山田婦美子
涙腺が緩みやさしい顔になる

宇部市 平田 実男
好きなんだけれどがついていない別れ

弘前市 櫻庭 順風
判定のトラウマやつと潜り抜け

尼崎市 田辺 鹿太
望郷の念に駆られる彼屋花

和歌山県 中後 清史
タンポポの種が行き着く運不運

八尾市 西川 義明
この歩み止めたなら山は登れない

愛媛県 花岡 順子
来た道をこの頃戻りすぎている

横浜市 石原 三郎
遠慮せず部屋に入った秋日差し

河内長野市 水谷 正子
変わった事なんにもなくて日が暮れる

西宮市 緒方美津子
歯を入れて急に暦は忙しい

羽曳野市 吉村久仁雄
一日の締めパッカスに会いに行く

鳥取市 西尾敬之介
鳴く声も弱々しいぞ秋の虫

札幌市 三浦 強一
一筋に生きて悔いない無位無冠

俳風柳多留二四篇研究 61

伊吹和男・大野秀二
橋本秀信・小栗清吾
粕谷長生・山田昭夫

清 博美・佐藤要人

471 松おしぞ思ふ吉野の御延引

伊吹 「ほのほのと明石の浦の朝霧に鳥隠れ行く舟をしぞ思ふ」(『古今集』・「羈旅」)からの文句取。吉野丸に乗つての花見が、雨のため延期になり、船のことをしみじみ思ひやつてるところ。

宵の朝霧雨になる御延引

傍三〇

大野 花見の延期説に賛。吉野丸に乗つての花見は疑問。

小栗 「吉野」とはつきりあるからには、「吉野丸の舟遊び」と思う。「史伝」に「吉野丸にて舟遊び」とあるのは如何なるものか。それにしても、「史伝」に「……船惜しぞ思ふ」と述べてあるのは理解に苦しむ。

ところの藤は、安藤家にて栽うるところなりといへり。」とあるように、佃島の住吉明神社は藤の名所であつた。佃島には橋がないので、渡し舟に乗らねばならないから、藤を見るにはまさに僅かな渡海なのである。

わづかな波濤をこして藤を見る 四七一

清・佐藤 賛。

473 きさらきハ藤て卯月にハ立て居ル

伊吹 釈迦の句。釈尊の入滅の「二月」十五日は涅槃会で、「寝」釈迦の絵像を掲げて各寺で法要が営まれ、誕生の「四月」八日は灌仏会で、誕生仏「立」像に参詣人が甘茶をかけるのを詠んだ句。

春夏の釈迦よこたてに拝まれる 三七八

清・佐藤 賛。

474 順こと有て四ツ手ハしづかなり

伊吹 吉原へ行く四ツ手の駕籠昇が、普通なら季節の移り変わりや天候の話、世情のたわいのない噂話など、乗っているお客に対して声を掛けてくるのであるが、今夜はいやに無口である。と言うのは、ここんところ景氣のいい客にサツパリ巡り合わず、今乗っている

佐藤 橋本説の船遊び説でしよう。なお、墨堤の花見は寛政以後のことと思う。

清 小栗・橋本説賛。

472 藤を見ながらにわづかな渡海也

伊吹 『江戸名所図会』の佃島の項に、「ある人の説に、このところは、始め安堂右京進のやしきの地にして、住吉の社頭に繁茂する

客はなんとか物になりそうだが、さてどう酒手はすんでくれと切出したらしいものと、思案している最中なのである。

じやりの上から願ひ出す四ツ手駕

寛元刈2

清・佐藤 賛。

475 おやちよりまつ見限るへたいこ也

伊吹 肉親の欲目、親馬鹿というのか、どうしようもない放蕩息子なのに、いつかは目が覚めてくれるだろう、なんとか立ち直つてくれるに違いないという思いを捨てきれない親父。ところが、馴染んだたいこ持ちとはいえず、そこは職業、この若旦那が親父から勘当されるのもう時間の問題であると、沈みかけた船から鼠が逃げ出すように、若旦那に見切りをつけるのである。

清 賛。むしり取った上で、早々と退散。

佐藤 賛。

476 しんぞうがしかると禿真似をする

伊吹 禿にとつて、いちばん恐いのは遺手。その次は遺手に比べてずつとましかれども、おいらん。新造なんてその二人に比べれ

ば、歳も近いし、もう恐くも何ともないと言つていくらしいのもの。だから新造が叱つても、全く気にせず、叱つていうすの、振り真似、口真似をして、馬鹿にするのである。

しんぞうがしかると禿古を出し 明四義7

清・佐藤 賛。

477 門下礼ハよこさぬ奴ツをねめて行

伊吹 暮に奇麗に支払いを済ませばいいものを、なんだかんだと言ひ訳ばかり、掛代金の支払を引き延ばし、お蔭で無駄足を踏まされたこちらはいい迷惑だ、たいがいしろ、と心中でつぶやきながら新年の門口で、年始に訪れた家の者を睨んで立ち去るのである。橋本 というより、掛金を払わぬ家には門礼に行かず、玄關をにらんで通り過ぎるのではなからうか。

清 橋本氏の「門礼に行かず」を「門礼に寄らず」と変更して賛。

佐藤 賛。

478 おふくろがつつかつて置なみのどら

大野 つつかう（突支）は、物にあててささえ保つ。つつかえる、の意。

どら息子でもなく、家を破産させるでもなく、散財するわけでもない。人並みに道楽する程度の息子（付合いで遊里に行く程度か）なら父親には黙つていて母親がかばつておく。息子に甘い母親の一端であり、これが將來どらを助長させる原因になるのか。

母おやのなさけがどらのもとで也 三五三

清 賛。大ドラでなく並のドラ。大概の若い者にはこの傾向あり、母親の手に負える息子である。

佐藤 賛。

479 後生をやめてやき持ちにかゝつてる

大野 後生は、（前世、今生と対応して用いる）仏語、死後の生存のこと。

一般的に年を取つてくると寺参りに精出して後生を願うのが普通であるが、この姑は後生を願うことを止めて、若夫婦の仲のよいのに焼餅を焼き、嫁いびりを始める。後生をやめなくても、姑の嫁いびりはできるのに、後生をやめるとは徹底的な嫁いびりをする気であらう。

楽しみは娘をいひると寺参り 一七四

清 賛。既に亭主の居ない婆アさんか。

佐藤 賛。

首香のむ

藤田 泰子選

この辺でタオルを投げてあげましょう
 緞帳が上がる人という字を飲み込んで
 豆を煮るただそれだけで癒される
 老いるってこういうことだったんだね
 空っぽの鳥かご夢を飼うことに
 嗚呼 加齢建へい率を余らせる
 ブライドを入れる袋を縫っている
 マンネリの身には程好い秋の冷え
 秋沁みて水晶の夜をページ繰る
 誰にでも親切すぎるだしの素
 福耳が拒むイヤリングの重さ
 ひとり旅耳をたくさん持つて出る
 昨日までのわたしを仕舞う更衣
 媚びたりはせずに地声のまま生さる
 煽られて椿が一つ咲きました
 丁寧を描いても眉の右左
 奪われる彩で咲いている彼岸花
 美意識はもう捨てました落椿
 運命とや拳の中の万華鏡

和歌山市	倉吉市	藤井寺市	和歌山市	藤井寺市	和歌山市	藤井寺市	和歌山市	東京都	アルゼンチン	和歌山市	吹田市	米子市	香芝市	大和高田市	三田市	西宮市
榎原 公子	野口 節子	鴨谷瑠美子	福本 英子	太田扶美代	高田美代子	西山 幸	佐伯 やえ	岸野あやめ	松井美稚子	福井 桂香	大谷 篤子	播本 充子	中井 ゆき	大内 朝子	鍛原 千里	西口いわゑ

菊好きの亡母が恋しい菊日和
 デッサンのまま捨てられた恋の絵図
 疑問符をひらひらさせる秋の風
 十指みな隙間だらけの秋の下
 どこまでも疑心暗鬼の先は闇
 彼岸花の赤と昔の話する
 青春の輝きあれば割れガラス
 片恋は自愛のまんま黄昏れる
 捨て猫の目が私を放さない
 いつまでも拗ねているわけにもいかず
 これからはひとりて渡る揺れる橋
 ペアリングこんなはずではなかったに
 自助努力という名の縄を縛っている
 この月の月に謝る事ばかり
 わたしのために私が唄うネンコロロ
 サムライが大勢居ってやり辛い
 お互いに立ち入らぬよう生きている
 好いことがあつて深夜の模様替え
 人柄が皺にしみでるいい笑顔
 腹割って過去を見せたい赤柘榴
 鍵穴をすりりと抜けてきた内緒
 内線が鳴って崩れた北の丸
 巣作りの鳩の愛には負けている
 捨ててきた過去が燦る落ち葉焚き
 良妻か賢夫かケンカせぬ夫婦

箕面市	樫原市	高知市	鳥取市	八尾市	神戸市	富田林市	富田林市	吹田市	奈良県	樫原市	富田林市	寝屋川市	寝屋川市	鳥取県	東大阪市	堺市	西宮市	堺市	倉吉市	尼崎市	大阪市	富田林市	神戸市	八尾市	鳥取市	高知市	樫原市	箕面市																				
出口セツ子	安土 理恵	小川てるみ	徳田ひろこ	生嶋ますみ	山田婦美子	片岡智恵子	津守 柳伸	米田 幸子	志田 千代	牧淵富喜子	桜沢 千世	北村 賢子	西原 艶子	籠島 恵子	森 茜	中井 アキ	居谷真理子	渡辺 富子	山本希久子	池 森子	上地登美代	安藤寿美子	西村りつゑ	堺市	豊中市	和歌山市	富田林市	吹田市	奈良県	樫原市	富田林市	寝屋川市	寝屋川市	鳥取県	東大阪市	堺市	西宮市	堺市	倉吉市	尼崎市	大阪市	富田林市	神戸市	八尾市	鳥取市	高知市	樫原市	箕面市

不安感消したく喋りつづけてる
小鳥囀る悩みはだれも持つている
残り火を辿る心が礎になる

見られたら困る日記を書いている
いい出逢いもあった昔の下駄の音
お風呂場の鏡曇りはそのままに

好きな風だから黙ってついていく
水色のハンカチ今も恋を待つ
幸せになるのに遠慮などいらぬ

偽善者の顔で法話を聞く彼岸
振る舞いを慎むように花が落ち
ささやかなプレゼントですハリ葉

飲み込めぬ話反芻くり返す
カード氾濫街で溺れている河童
難問のバズル数字が渦を巻く

あまりにも律儀な人であつとまれる
ええここはママ似と褒めて丸く住み
どのつながらりも何時かは風が解いてゆく

八十路来て喜怒哀楽の夢芝居
その時にこけないように竹を踏み
痛む胸癒す独りの秋の路

まさかまさか男が金を持つてない
定年にのつとられそう厨事
年金の暮らしに捨てる虚栄心

あの人に限って日頃の大切さ

大阪府	神夏磯典子	大阪府	八尾市	板東 倫子
西宮市	門谷たず子	大阪府	高杉 千歩	野坂 なみ
和歌山市	松原 寿子	大阪府	豊中市	樫谷 郁子
大阪府	小栢こずえ	大阪府	羽曳野市	徳山みつこ
米子市	木村 春枝	大阪府	本間満津子	宮崎シマ子
和歌山市	古久保和子	大阪府	八尾市	緒方美津子
芦屋市	黒田 能子	大阪府	西宮市	川久保睦子
大阪府	米澤 俊子	大阪府	大阪府	植村 喜代
八尾市	村上ミツ子	大阪府	八尾市	
大阪府	桑田ゆきの	大阪府	八尾市	
東京都	やまぐち珠美	大阪府	八尾市	
寝屋川市	平松かすみ	大阪府	八尾市	
和歌山市	桜井 千秀	大阪府	八尾市	
羽曳野市	吉川 寿美	大阪府	八尾市	
堺市	山本 半銭	大阪府	八尾市	
大阪府	板東 倫子	大阪府	八尾市	

要介護先の見えない紙おしめ

待針が昔の私を待つている

行き先は何処でもいいさ青い空

ランチョンマットセツトしてある予約席

母老いてなお口ずさむ浜千鳥

老母逝つたことも知らずに柿たわわ

障子貼り亡母の声が聞こえ出す

櫛の目をつましく通す祖母の朝

母の袖掴んで聞いた祭り笛

見守つてくれている亡父のソフト帽

自立して生きるあなたへ出すエール

もめるから行くな行くなと夫言う

虫の音と月に癒され今日を閉す

ロマン抱く窓辺へ月が満ちてくる

買い替えを勧めてるよな修理代

来年も元気で会おう赤とんぼ

いぬさんの句―企業戦士の体力にも限界があります。また余力

のある内にリタイヤして残された時間を楽しみます。伴侶にたい

する思い遣りが伝わってきます。そして阪神の星野監督にもご苦

労さまでした。千代さんの句―人を食って生きていたと言った政治

家がいましたね、食うか食われるかの境界、芸能界、そして選挙戦、

どんなドラマを見せてくれるのでしょうか？緩帳があるのを楽し

みに待ちましょう。千里さんの句―忙中間、独りレースなど編みな

がらとろ火でトトロトロ豆やジャム、季節の佃煮を煮る、上手にでき

たらお隣や娘の所へもお裾分けしよう、など思いながら、時間と心

にゆとりがないときでない実益と趣味、男性には理解できない楽し

みに主婦は癒されるのです。

倉敷市	井上 富子	大阪府	八尾市	板東 倫子
熊本市	永田 俊子	大阪府	高杉 千歩	野坂 なみ
愛媛県	花岡 順子	大阪府	豊中市	樫谷 郁子
東大阪市	安永 春	大阪府	羽曳野市	徳山みつこ
寝屋川市	堀江 光子	大阪府	本間満津子	宮崎シマ子
大阪府	津村志華子	大阪府	八尾市	緒方美津子
熊本市	岩切 康子	大阪府	西宮市	川久保睦子
鳥取県	石谷美恵子	大阪府	大阪府	植村 喜代
鳥取市	録沢 風花	大阪府	八尾市	
富田林市	古田 千華	大阪府	八尾市	
池田市	栗田 久子	大阪府	八尾市	
大阪府	大向ナツ子	大阪府	八尾市	
鳥取市	岸本 孝子	大阪府	八尾市	
尼崎市	内田美也子	大阪府	八尾市	
大阪市	大川 桃花	大阪府	八尾市	
和歌山市	根田よしこ	大阪府	八尾市	

時

吉田孔美子選



十八年待つ甲斐あり虎優勝
時々は道草をして花をつむ
ゆつくりと時が流れる新能
時刻表は喜んで熱いお茶を入れ
年金の時を楽しむ日向はこ
呑みましよう月下美人を真ん中に
チャンスだよ女心が動く今
美人との会話実感時は金
お洒落する時は菩薩の顔になる
ダーリンと呼ばれる時もありました
子を寝かすそのひと時にある至福
四世代チックタックと古時計
逡巡の婚期へ時は容赦せず
やさしさを見てはもらえぬ時間給
口レックスの時間見ている読経僧
時効にはしないあの日のあの誓詞
時間さえ守らぬ人の言う理屈
いらだちの時計を外す日曜日
たわいないドラマに時間盗まれる
パチンコ屋空しい時を食べている
人気出た時芸人の怖い橋
次会った時にきつちり謝ろう

(南) 正和 公誠 ミツ子 美明 たもつ 充子 章久 正雄 一花 武 花 武 子 愁女 武史 岳水 正 風 正 二 不 度 浜 丘 あずま 栄呼 朝子

非常時のリュック何処かへ置き忘れ
渡り鳥やむにやまれぬ時を追い
全身麻痺私はどこにいたんだろ
いつまでも時めく心研ぎすまし
歩かねば僕の時計は止まります
貧乏も一時のことひるまな
時により正義の基準変える国
椅子一つゆずるにしても時期がある
平和でも時効の来ない原爆忘
菩薩にも時には鬼となる蟻
あの時の約束を待つ地蔵さん
長い長い時間をくれる歯医者さん
夢のない時代だ狼がやせている
安心をさせたい時の使い分け
時刻む音が聞こえぬ離れ島
佳
美しく時を止めてる花の寺
未知数の時を信じて来た時計
野仏の時を稼げと深い慈悲
晩学へ残り時間のある限り
二度とないこの一刻と対峙する
人
静かなり人を許してあげる時
地
正確に時が万物淘汰する
天
その時は裸覚悟の種を蒔く
軸
にんまりとスローライフのまたあした

惠 勇 高 代 郁 代 敬 介 紫 見 昌 鼓 志 華 子 遠 野 霜 石 理 恵 伊 津 志 (南) 正 和 千 里 千 里 花 匠 権 悟 螢 静 かなり 人 正 和 俊 子 森 下一知

鉛 筆

岩佐ダン吉選



三菱とトンボを交換弟と
鉛筆の肌が恋しい肥後守
鉛筆の芯とがらせて書く投書
鉛筆が尖りすぎると人を刺す
追試験あ鉛筆が走らない
鉛筆を耳に棟梁患案中
鉛筆の転がる先に君が居た
鉛筆を友に余生の豊かなり
お節介赤エンピツを持ちたがり
鉛筆のミス消しゴムに叱られる
B4のタイプと組んで娘が帰る
鉛筆で書いては消したマニフェスト
鉛筆の芯尖らせて病んでいる
鉛筆の先で人間飛ばされる
鉛筆の音のみやがて時間です
鉛筆を削ってくれただけの仲
回覧のつけた鉛筆折れたまま
鉛筆を嘗めておいしいかと聞かれ
負けた日も明日の鉛筆尖らせる
鉛筆をおどして核の図面引く
4Bで描けば見事なふくらみは
鉛筆で書いた妻への借用証

(南) 幸生 忠 鉄 治 宏 臣 叔 子 輝 夫 朝 子 一 知 重 人 惠 勇 晴 翠 強 一 奮 水 修 實 三 喜 夫 ミツ子 登 美 德 三 隆 盛

初歩教室

題一 ケーキ

三宅保州

和菓子には賞味の前の季節感 章司

内心は和菓子が欲しい誕生日 幸

大家族四等分が夢だった 実千代

泡立てに一喜一憂懐かしく 実千代

失敗作そつと人目につかぬよう 政子

取り合ひの喧嘩も無くて一人っ子 政子

この六句は、今回の題の「ケーキ」に投句

いただいた句です。これらの句に共通してい

る問題点は「ケーキ」という題がわかり難い

ということです。自分は題がわかつているの

で、出来上がった句が「ケーキ」という題と

わかり難いことに気付かないことがあるもの

です。「ケーキ」という題は必ずしも読み込

まなくてもよいのですが、読者や第三者が

「ケーキ」という題ということがわからない

といけません。（四月号の当欄も参照して下

さい）

景気よくかけ声弾むギヤル御輿 節子

景気よく大きなバックと旅をする 節子

この二句は、「景気」を「ケーキ」の題に

当てはめた句と思いますが、題の語呂合わせ

のようでまちがっています。

今回も同想句が多多あり一例を挙げます。

【同想句】

「ダイエットとケーキ」を詠んだ句

肥満氣に一ケ足らないケーキ箱 栄呼

腹が出て氣になるケーキやめておく 真一

これ以上ふとるケーキに近寄れず 清

肥満度と食い氣天秤ケーキ買う 侑子

ダイエットケーキ横目におなか泣く みね代

ケーキ売場無視して通るダイエット 弘子

ダイエットジム終えてからケーキ食べ 勝久

ケーキだけ食べて出来ませダイエット 信子

ダイエットケーキまんじゅうみな怖い 昌鼓

「ケーキは別腹」を詠んだ句

腹一杯食べてもケーキは別腹に 洋子

満腹をしても別腹ケーキ好き 昌鼓

満腹もケーキは別の腹へ入れ いさお

満腹の後のケーキは別の腹 登志子

満腹にケーキを入れる隙はある 正和

「ケーキ切る」を詠んだ句

ケーキ切る八つの眼見詰めてる 智加恵

等分にケーキ切る手がふるえてる 真一

大きさに子らの目刺さるケーキ分け 照彦

ケーキ切る母の手見入る子沢山 満子

「ケーキよりお金」を詠んだ句

ケーキより小遣いおくれと孫の顔 円女

ケーキよりお金はしがるおませな子 栄子

【添削・批評句】

原 誕生日ケーキもなかったカレーライス と き

中八、下六音字でリズムが悪いです。

添 ケーキなど幻だった戦中派

原 悔しいねデコレーションケーキ眼の前に 雅代

中九音字、なぜ悔しいのわかるように。

原 イウの宵ワインとケーキの交換会 千華

中八、下六。基本は出来るだけ守るように。

添 ケーキ切りワインを交わすクリスマス

原 お土産のケーキ戴く嬉し顔 像山

中八、嬉し顔という表現は無理。

添 お土産のケーキに家族皆揃う

原 汗かいてお茶受けケーキ意欲湧く 孝明

何もかも詠んでいるのに意味が不明瞭です。

原 ウィンドーのケーキ覗いて生っぱ飲み 綾乃

添 ウィンドーのケーキ生唾飲み込ませ

原 兼題のケーキ作れずケーキ食べ 志津子

兼題は一般に通じない楽屋吟のきらい。

添 先ずケーキ食べて一句を考えろ

原 高脂血好きなケーキは見てるだけいさお

添 一病息災好きなケーキも我慢して

原 パースデー赤飯やめてケーキです 信子

添 赤飯よりケーキ喜ぶパースデー

原 こないかなケーキと二人喫茶店 清

待ち惚けのことですか。読者にわかり難い。

原 虎ファンケーキを食べて景気つき 稔

ケーキと景気が語呂合わせのようです。

添 祝勝はケーキで下戸の虎ファン

原 顔一ぱい俵せはうの子のケーキ映子

添 幸せを頼張っている子のケーキ

原 クリスマスケーキも食べて秋の旅和友

季節が矛盾しています。

添 旅先でも好きなケーキを探します

原 父と母ショートケーキでパースデー 益子

原 蔵出しのお茶にケーキの隠居部屋 喜子

一句ともの添削句ですが。

添 ショートケーキ二人で分ける隠居部屋

原 ケーキ焼き孫のよろこぶ声待つ 美恵子

原 ケーキ焼く毎日ママの奮戦記 美恵子

添 ケーキ焼くときは手伝う子どもたち

原 さつぱりとチーズケーキが大好きよ タカ子

添 チーズケーキがとっても好きな老夫婦

原 口喧嘩ケーキとお茶で和む仲 郁代

添 口喧嘩ケーキとお茶で仲直り

原 ウエディングケーキカットがハイライト

英 旺

そつですわという説明句になっています。

添 ケーキカット無しでも挙式できますが

原 ケーキ食べ和菓子も食べる天高し こずえ

添 食欲の秋和菓子食べケーキ食べ

原 ケーキより同じことならおはきです 時雄

添 ケーキよりお秋が好きな戦中派

原 お彼岸にケーキ供えて新世紀 敏子

彼岸も新世紀も今と時季がずれています。

添 お供えのケーキがひとつ消えている

原 涙してケーキを分ける別れの夜 敬之介

涙してと別れが重複的。

添 思い出のケーキを分ける別れの夜

原 ケーキ屋の前を素通りする上戸 准一

「前を」を「前は」とすると強調されます。

原 おいしいとケーキの噂足が向く 侑子

添 遠くとも行く評判のケーキ店

【少し工夫すれば佳くなる句】

原 モンブランケーキも山も最高級 トミノ

原 女の子一度はケーキ屋志望する 正和

原 無骨全夫がくれたケーキは唯一度 円女

三句とも発想は良いが、字余りが気になる。

原 クリームに孫の数だけ指の跡 淳司

添 孫の数だけ指跡があるケーキ

原 じみ婚の手作りケーキで盛り上がる フジ

添 手作りのケーキじみ婚盛り上げる

原 敬老日手書きのケーキ独り占め 栄子

添 敬老日手書きのケーキくれた孫

原 クリスマスよりもケーキを待つ子供 善蔵

原 手作りのケーキ甘さを加減する 洋介

原 リストラへ今年はケーキ我慢する 秋星

原 誕生日ケーキ兼ねてクリスマス 栄呼

原 クリスマスケーキ安売り時間待ち 賢治

原 ケーキにもすかさず母はアベマリア 信翁

【佳句】

気休めに甘さ控えたケーキ買う 好

金かけたケーキは甘くないケーキ 照彦

ケーキなら袂からげて舞妓さん 昇

縁談もケーキ一つで実を結び 利子

寄り添ってケーキにナイフ入れたのに 初恵

お祝いのケーキ御無沙汰しています (十) 武

ケーキ皿舐めつくしても足らぬ顔 重之

ケーキ屋の前で気がつく誕生日 弘之

カロリーを気にするケーキおちよぽ口 幸

焼き過ぎた妻のケーキを孫が誉め 良一

ストレスが濃い目にケーキ焼き上げる つよし

友が来るそんな予感のケーキ焼く 登志子

存分に叱った後でケーキ切る (寒) 武

【今月の推せん句】

ケーキ屋の前はお伽の匂いする 伏見雅明

お伽の匂いというメルヘンがピッタリ。

鋭角の先から食べていくケーキ 田岡九好

甘いケーキに鋭角の先という衝撃の見つけ。

【私の句】

華やかな愛盛った日もケーキ皿

キリストはどうあれクリスマスケーキ

秀句鑑賞

同人吟 福井桂香

— 11月号から —

赤い星と月が並んでいる白露

板東倫子

約六万年ぶりの歴史的な接近した火星。南東の空に一際大きい赤い星を、肉眼でも見ることができました。名月と肩をならべた赤い星に出会えた喜びでしょう。今年は火星探査機が相次いで打ち上げられましたが、火星の地表に液体すなわち水の流れたような跡も確認されているようです。火星生命の証拠も探査されればと、ますます宇宙への夢が膨らんでいきます。

触らねば妻も地雷も破裂せぬ

奥村五月

一見、恐妻家の句に思われますが、得てして亭主面白かも。ユーモアでまとめられていて、きつと仲のよいご夫婦なのでしょうね。しかし、近ごろ自爆テロというのもありますから、ご用心ご用心。

菊花展金賞だからそうだろう

志田千代

秋もたけなわ菊の香あふれる展覧会。旧暦九月九日は重陽、いわゆる菊の節句です。「菊の滋液が溶け出た水は長寿のくすりとなる」という中国の故事があります。「四君子」の一つとして数えられる菊は、きつと俗事を忘れさせてくれることでしょう。

昭和五十五年、地元のマスコミ紙に載って

いた川柳教室に投句したのがきっかけで、早二十余年になります。何も解らぬまま歳月を重ねた感がありますが、川柳を通して沢山の仲間と出会えたことが何よりの宝物と思っています。締切に追われてバスしようと思ったことも幾度かありましたが、自分自身のスタンスで作句を続けていくうちに、自分らしい川柳が生まれているようです。私の座右の銘である「破壊は一瞬・建設は死闘」との言葉を心に、作句に励んでゆきたいと思っています。

この度、同人吟の鑑賞を仰せつかり、皆様の一句一句と対峙いたしました。作者諸兄の意に添わない評になりましたら、お赦しを。

二ワトリの卵に深い恩がある

新家完司

かつては、初殻を敷き詰めた上に、新鮮な卵を丁寧に並べて、病人のお見舞いに行ったものです。今やバック入り十円の大売出し。その上、コレステロールの含有量が高いとかで敬遠されています。卵さんが可哀想。

赤トンボツンツンと秋運ぶ

岩本笑子

秋は釣瓶おとしに日が暮れます。その前のしばしの間、茜空には赤トンボがスイツと飛んでは動きを止め、再びスイツと飛びます。コスモスの花が風にゆれ、まるで谷内六郎の世界が広がっています。

涙目の原監督を見たか見たか

北野哲男

見たか見たか“のリフレインに気持ちの昂ぶりが窺えます。ファンだったら誰しもが原監督の巨人退団に悔しい思いをしたことでしょう。また、十月十七日のスポーツ新聞一面には星野監督の今期かぎりの引退が大きく報道され、これにもファンの溜め息が洩れました。これでまた球界が淋しくなりますね。

いつまでもワルツのままの喫茶店

嵯峨根保子

別れたあの日にも、この曲が流れていたのです。心のなかの喫茶店には、今でも静かにワルツが流れています。ロマン溢れる句。

曼珠沙華あの世この世の真ん中で

籠 島 恵 子

今年は気象の加減で、彼岸花の枯れるのが早かったようにおもわれます。子供の頃にはシビトバナなどと教えられました。有毒植物のため子供が触れないよう戒めていたのでしょうね。なのに、私は子供の頃からこの花が好きでした。燃えるような朱色の花びらは外側に反り返り、白い雄しべ雌しべを長く突き出して、華麗にすくっと立っている。秋にはこの花と会えるのが私の楽しみの一つです。

簪より帽子の好きな魔女も古稀

指 宿 千枝子

もう六年前になりますね。貴女にはじめてお会いしたのは、「川柳塔みちの十周年記念句会」に参加するため、薫風先生の一行に加えて頂いて、夜行列車に乗ったときのことでした。モダンな帽子の似合う、ほっそりとした貴女。今も当時の懐かしい想い出が脳裏に甦ります。

桃割っても竹を割ってもない童話

海老池 洋

むかし、むかしで始まる「日本むかしばなし」市原悦子の声が耳に残っています。今の子供たちに人気のあるのは、戦闘的なアニメですが、何だか哀しい気分がいたします。

大阪のと真ん中でも標準語

黒 田 能 子

テレビの普及により、最近の子供たちは方言を使わなくなっています。私はNHKの朝ドラ「てるてる家族」を毎朝のしみに観ていますが、ドラマのなかで繰り上げられるやさしくて元気な大阪弁の会話が大好きです。幼い頃、和歌山地方では良く耳にした「のし言葉」を使っている方に、最近とんとお目に掛かれなくなりました。

こんもりと残暑見舞のきさみ葱

榎 原 公 子

今年は、いつまでも残暑が続いて、やっとお彼岸過ぎから一息つくことが出来ました。そうめんや薬味でしようか、こんもりと盛り上げられた刻み葱の優しさが心に沁みます。

宇宙から見れば地球は危険物

小 谷 はるみ

なるほど、なるほど。そうかも知れません。よその人に笑われないように、と、よく教えられたのですが、今では「宇宙人に笑われないように」と。核兵器の廃絶や二酸化炭素の排出抑制、省エネ、また限りある地球資源の再利用etc. 運命共同体である地球を、私たちの手で守らなければなりません。身の周りの出来ることから手掛けましょう。

おもいきりテレビが脳をかきまわす

山 中 康 子

読売テレビお昼の人気番組、みのもんだ司会の面白い放送。時々見ますが健康になるという食品が、手を替え品を替え出てきます。その都度「あれ買ってこい。これ買ってきてほしい」と、夫に言われます。まさに脳をかき回されているようです。

星くずで洗濯をする山の宿

高 瀬 霜 石

山の澄んだ空気と、きれいな夜空の星達と申し分ない景色です。きつと、心もからだも洗われて生きる喜びに浸れる一刻でしょう。安住する穴の深さを計ってる

鴨 谷 瑠美子

社会保障制度の根幹である年金がゆらぎ始めています。かつてない高齢化社会を迎えてこれからを考えねばなりません。

◆次に、紙面の都合で取り上げられなかったのですが印象に残った句を紹介します。

さつそうと歩きたいのに背が曲がる

井 上 松 煙

いつまでを風に乘れるか秋の蝶

門 谷 たず子

バーチャルの海で溺れている未来

渡 辺 富 子

秀句鑑賞

— 11月号から —

菊地政勝

川柳の三要素は「うがち」「おかしみ」「軽み」と言われておりますが、最近ユーモアのある句が少なくなっていることに気がきました。ユーモアのある句は読むだけでその場の緊張をはぐし、周囲を明るく和やかにしてくれます。今回は三要素の濃い秀句を鑑賞させていただきます。

主役にはなれぬ運命のかすみ草

須磨活恵

美しい花束にはかすみ草が使われます。美しい花を引き立たせ、脇役に徹し主役の花をとり囲み、目立たぬようにかれんに咲いて自分の境遇に、甘んじているかのように感じられます。

濡れ衣は晴れても噂乾かない

乾 春雄

広がった噂はなかなか消えないものです。半乾きのままでは身体に良くない。心を切り換えマイペースで乗り越えたいものです。

幸せのライン低めに引いておく

秋野 宏

目標が高過ぎると幸せと感ずる回数は少ない。低めに設定することで、幸せを多く感じることができ、楽しいことが多くなります。

ありがたい言葉聖書を写経する

吉村 久仁雄

お経を書き写すことを、写経と頑なに思い込んでいた頭の堅さを反省。ありがたい言葉なら自分のお経にしてしまえば良いのです。半熟のまんまで親になっている

吉田 弘子

まわりを見渡すと、満足に自分の子の巣がでない親が多いのに気がきます。

一の蚊のかたきを二の蚊取りに來る

黒田 茂代

かたきを取りに來る蚊の気持ち、判るような気がします。

風除けに時には杖になり夫婦

百田 幸

老いても仲むつまじい夫婦そのまま。

消しゴムで消したい人がひとり居り

大久保 伸子

消したい人はどのような人なのか、興味があります。私もひとりならず、数名消したい人が居ります。

ミスのない男同時に頼りない

永田 章司

計画をキチンと立て、そして何事も慎重に行動する。しかし大胆な行動は出来ない。どうしても頼りない男に映るのだ。

有難いもつたない旅の宿

安達 厚

太平洋戦争の貧乏生活を体験した自分としては、旅へ出るたびいつも感謝の気持ちが湧いてまいります。この感謝の気持ちがある限り、旅は楽しいのでしょうか。

百までも遊ぶつもりの方を練る

堀 正和

すごい元氣と決意ですね。このパワーの源を知りたいものです。

嫁がせて腑抜けの部屋で妻とお茶

西川 義明

可愛がった娘を嫁がせたあとの、両親の様子が伝わってまいります。

青春を白髪になつて追いかける

平川 幸枝

セーターを編みおえぬ間に恋終わる

伏見 雅明

人生を思い通りに読み切れず

脇 俊子

何があるかわからないから人生は面白い。

第18回 国民文化祭・やまがた2003 (10月12日)

本年度国民文化祭は山形県長井市民文化会館で開催された。事前投句高校・一般の部は2335名、小・中学生の部は3689名、当日参加579名。大会各賞は下記のとおり。

◎高校・一般の部

文部科学大臣奨励賞

子に分けて涸れることなき父のダム 兵庫県 三輪美智子

国民文化祭実行委員会会長賞

椅子取りゲーム善人一人弾かれる 山形県 山川 草苑

山形県知事賞

民謡で地球の風を友にする 和歌山県 大城 好男

国民文化祭山形県実行委員会会長賞

大都市の鼓動支えるダムの自負 千葉県 小倉 利江

山形県教育委員会教育長賞

紅たして老いの突っかい棒にする 東京都 井上 文子

長井市長賞

口紅を変え決断の席に着き 神奈川県 鈴木柳太郎

国民文化祭長井市実行委員会会長賞

枝打ちの空から落ちてくるおけさ 富山県 村きんじろう

長井市教育委員会教育長賞

米びつを満杯にして八月忌 大分県 秦 たえ子

財団法人全日本川柳協会会長賞

縫代はたつぷり母の鯨尺 兵庫県 津組万智子

山形県川柳連盟賞

負けゲーム母は拍手を惜しまない 福岡県 神谷 幸恵

◎小・中学生の部

文部科学大臣奨励賞

ダムみたいかんにんぶくろあふれだす 秋田県 門間 大樹

国民文化祭実行委員会会長賞

仏壇にご飯あげたら次はばく 山形県 後藤 理徳

山形県知事賞

しりとりで会話がはずむ家族の輪 山形県 小杉 法子

国民文化祭山形県実行委員会会長賞

ダムの水不毛の地へと旅にでる 新潟県 清野 佳祐

山形県教育委員会教育長賞

人生をゲームのようにあやつられ 鳥取県 長岡優布美

長井市長賞

三才の目がらんとするゲーム 北京 今村 友洋

国民文化祭長井市実行委員会会長賞

一つぶのお米の旅を考える 群馬県 長浜 夕夏

長井市教育委員会教育長賞

ダムの底今は魚の村がある 群馬県 大野 樹

社団法人全日本川柳協会会長賞

日本の伝統文化白い米 群馬県 横尾 柊道

山形県川柳連盟賞

いすとりゲーム私はいつもとろいんだ 群馬県 小金澤友里

本社 十一月句会

十一月六日(木) 午後一時
アウイーナ大阪

霜月というのに今日、十一月六日は少し蒸し暑い。一一名の参加のもと一時から開催。はじめに大阪の同人浦田綏子さんのご逝去が告げられ一分間の黙祷を捧げる。

お話は森本弘風氏。人間は朝起きてから眠るまで、強いては生まれてから死ぬまで、どれほどいろいろな粉のお世話になっているかという、ユニークな内容だった。

まずは歯磨き粉に始まり、お碗、カイロ、鉛筆の芯、車、切符の裏の茶色、赤ちゃんの天花粉。おどろいたのは冷蔵庫の塗料(表面)にまで使われているという事である。そして最後はお線香まで、数え上げればきりがないと、会場を笑わせたり、湧かせたり流暢なお話ぶりはとても楽しく、30分はあつという間だった。

初出席は城陽市の中井三重子さん。
月間賞は西宮市の西口いわあさんに輝く。
(司会)玄也 (記名)恵子・真理子
(受付)寿美・ふりこ (清記)扶美代

席題「鏡」

福本 英子選

とつておきの笑顔鏡に見てもらう
鏡見るほども夫の顔は見えず
(笑)五 月

コンバクトへおさめた愛がふくれ出す
ピカピカの鏡ころもつている
良縁に恵まれますと天眼鏡
見栄張ったサイズ鏡に呆れられ
鏡を見る母さんそつと言つてくれ
バックミラーそでいちゃいせんとい

て銅鏡の発掘卑呼起こされる
悲しみの記憶うすめてゆく鏡
デパートとうちの鏡は似て非なり
男前揃つた鏡遠慮する
わたくしにアツカンベエをする鏡
美容室魔術をかけている鏡
善人に化けても鏡妥協せず
可能性無限に秘めている鏡
試着室の鏡の答手厳しい
容疑者のような鏡の中の僕
昨日から娘の鏡も言わぬ
バックミラー昨日ばかりを追うでない
鏡見る気持になつた退院日
午後からの鏡は少しずつ曇る
鏡見ていると涙がすぐ乾く
皺と染みだけが映っている鏡
善人の顔で鏡に映つて
内视镜に腹の黒さを見抜かれる
恋をしています鏡を拭いています

正 雄
雅 文
真理子
東 雲
扶美代
かすみ
千里
富美子
楓 楽
重 人
メ 女
みつ子
賢 子
恵 子
つづや
美代子
義 重
正 坊
重 人

短足がすなりと映る水たまり
姫鏡母の襟を聞いている
日がな一日鏡の中にいる少女
同情を嫌う鏡の負け惜しみ

佳
鏡から秋のピーナス飛び出した
ご期待はもう無理ですと言う鏡
鏡覗かなくなつたらもうアカン
お怖い鏡の顔が皆しやる
植山行きのバックにそつとコンバクト

人
よう皺の見える鏡にあかんべえ
夢見ている時がしあわせ万華鏡
天
熟女みなうぬぼれ鏡持っている
軸
カーブミラーばかり眺めている熟女

兼題「拾う」 黒田 能子選
おみやげは街で拾つた善い話
携帯で拾つた恋の不幸
拾い読み伏せて煮豆の番をする
火中の栗拾つてくれる友がいる
週刊誌拾い読みする好奇心
逢つてきた秋を拾つて帰る道
内緒話までもマイクに拾われる
さりげなく拾つてさりげなく捨てる
虫の声拾いながらの回り道

朋 月
岳 人
鹿 太
朝 子
月 子
俣 子
深 雪
高 栄
寿 美
天 笑
俣 子
順 子
満津子
照 子
きらり
いわゑ
瑠美子
冬 葉
玄 也
義 明
美 明

拾うのは金目の物と決めている

九好

土砂降りに私を拾ってくれた人

更紗

定年後破片拾っている余生

正雄

あの時のあなたは拾う神でした

昭三

今に生き命拾いの過去一つ

五月

拾われた恩番犬に徹してる

五月

二匹目が拾われてゆく器量よし

耕治

優しさを拾う渚の桜貝

雅文

雑誌で拾った知恵を愛にする

シマ子

拾った恋捨てちゃうなんてできません

伽羅

拾うなよそれ地雷かもしれないぞ

寿美子

思い出を何度も拾う紙コップ

千里

メルヘン行きの切符を拾う花畑

度

わたくしを拾ってやったと申します

志千代

免疫もなく転げ出た恋拾う

民

ロバの耳やさしい話だけ拾う

富美子

命拾う言葉だったと今思う

ダン吉

補聴器が余計なもの拾うて来る

菜月

別姓で夫婦の良さを拾い合う

潤子

転ぶ度拾った石は宝物

洋

満腹の暮らし情けが拾えない

典子

結局は私が拾う後始末

茜

いいことを拾って楽しく生きている

いわゑ

佳

拾う神あると信じて米を研ぐ

睦子

命拾いしてから恐いものがない

玄也

ドングリを拾う豊かなポケットに

志千代

拾われたご恩いっばいあつて今

洋

投げ返すための小石を拾つてる

三喜夫

人

人生の余白で拾う夢の数

朱夏

地

雑音を拾って迷い深くなる

楓楽

天

ゆつたりと暮す物差し拾う秋

朝子

軸

あたたかい手に拾われた花の種

兼題「拭う」

山本

義子選

おびんずるさん拭われどしどしピッカピカ

きらり

過去一切拭って新たな光る朝

満津子

涙拭く真似が上手なおばあちゃん

天笑

長旅になるだろう窓拭いて出る

冬葉

やわらかい布で拭っておく噂

希久子

骨ばった母の背中を拭く日課

瑠美子

涙拭く母さんを見た背をみた

ダン吉

四世代同居手拭い名前入り

保州

傷口をしつかり拭いて出直す気

英子

ごつい手で涙を拭い負けました

美代子

キュツキュツと鏡を拭ううれしい日

義

男なら涙拭わず空を見る

昭子

冷や汗を拭うばかりの参観日

玄也

年金の破綻は税で尻拭い

尚士

泣いた児の涙を拭いてくれた風

淑子

生き生きと流した汗は手で拭う

朱夏

汗拭いて生きる幸せ噛みしめる

一風

口拭いておいしかったと手を合わせ

伽羅

ゆずる日も近い厨を光らせる

女

若者が拭う汗には明日がある

なきさ

負け犬は傷を拭って強くなる

篤子

汗涙拭い人間出来上る

扶美代

口拭う罪へ心は痛まぬか

賢子

拭いても白に戻れず黄昏れる

みつ子

拭いきれない不安老老介護する

希久子

お手拭きで顔ふく癖はお父さん

たもつ

曖昧な儲け話に眼鏡拭く

孝一

惜敗の汗は拭わず糧にする

楓楽

拭いても拭いきれない拉致問題

舞夢

おあいこよ老母のお尻を拭きながら

耕治

男の汗だ女には拭わせぬ

真理子

拭いて貰うてよけいしみひろがった

天笑

佳

黙々と軍手で拭う父の汗

鹿太

日本史に拭えぬ一つのこ雲

愛論

見ざる聞かざる私でいたい机拭く

美籠

御身拭いの如寝たきりの母を拭く

保州

汗拭う今日の私にマルをやる

ダン吉

人

口拭う度に良心瘦せてゆく

富美子

拭うても朝の鏡は嘘つかぬ

一風

地

拭うても朝の鏡は嘘つかぬ

萬的

天

涙拭うてあげたい民話の竹人形

萬的

軸

とびつきり白いタオルでは拭う

兼題「干す」

塩満

敏選

日本晴れあつげらん布団干す

陽は落ちて干し物たたむゆつくりと

持ち味を塩が引き出す一夜干し

幸せは日向の匂いする蒲団

干上がった川に告発されてる

過ぎた日の恋は語られ干しぶどう

禁酒禁煙男の覇気が干涸らびる

標的に赤いタオルを干してある

布団ごと私も干してほしい晴

幸せで布巾雑巾たんと干す

洗わずに干す優勝のユニホーム

洗濯物干して留守とは思わせず

孫の布団まだ一枚が干してある

陽に干した束の間の恋冬支度

炎天に丸干ししたい奴がいる

干からびた脳にせつせと酒をそぐ

説教はほどほどが良い一夜干し

一夜干しつまみ食いしたのは月か

こころで老化防止の虫干しを

干し物をする目の隅に白い月

軒に干す柿大根は母の彩

夢と不安の三三度度の杯を干す

太陽の子を孕むまで布団干す

頂上で汗のシャツ干すにぎりめし

干柿を七ツのカラス見て育ち

陽燦燦ペランダに干す反戦旗

干蛸ゆらり瀬戸内の海夕焼ける

満津子

あやめ

小雪

朱夏

朱夏

柳弘

美代子

保州

哲男

泰子

柳伸

昭

民

たもつ

修

柳伸

保州

光久

寿美子

シマ子

賢子

比る志

りつえ

とし子

(矢)

五月

萬的

手を添えて飲み干している中ジョッキ

定年制元老格を干しあげる

Eカップほどの干してある窓辺

外に干すことはないのよ乾燥機

三人目生まれらしい物干し場

佳

妻漬けた梅干しやはり日本一

酒あびるほど飲み干してから禁酒

つぎはぎの作業着高く高く干す

ワイキキの浜辺ビキニの甲羅干し

脳味噌もハートもからり天日干し

人

秋日和女の過去を干しておく

地

私を干して叩いて灰汁を出す

天

太陽の祝福受けて干すおむつ

軸

ワイキキに一寸甲羅を干しに行く

兼題「ゆさゆさ」

海老池

神迎えゆさゆさ森が揺れている

腰みの優雅ゆさゆさハワイアン

白い巨塔ゆさゆさ揺れている手術ミス

九条がゆさゆさ揺れている平和

九条のゆさゆさ隠すマニフェスト

ゆさゆさと日本列島揺れつつく

やじろべえ核と平和がせめぎ合い

これ以上地球を揺すらないように

耕治

久峰

天笑

冬葉

かすみ

たもつ

舞夢

昭子

なぎさ

朝子

篤子

典子

真理子

神様が地球を蹴った震度六

震度七あのゆさゆさは忘れない

銀杏やゆすれば秋が落ちてくる

ゆさゆさと大樹が揺れて冬仕度

寄る大樹ゆさゆさは揺らす不況風

ゆさゆさと大樹のはずの社が揺れる

父の樹をゆさゆさは揺る反抗期

ゆさゆさと若人の髪天を向く

ゆさゆさの髪が恋しいベレー帽

ゆさゆさと揺れてオカッパ一等賞

七人を育てた乳房ゆつさゆさ

ゆさゆさと恋の序曲へ揺れる胸

ゆさゆさと神輿男をかきたてる

ゆさゆさと祇園の鉦が古都巡る

ゆさゆさとかくれんぼする麦畑

母さんの巨体ゆさゆさと和ませる

リユックゆさゆさと右にいつも追い抜かれ

火のついた噂ゆさゆさと揺り返す

象の恋ゆさゆさと歩み寄る二頭

ゆさゆさと揺れる思春期魔が潜む

ゆさゆさと青いリンゴの落さるる

秋晴れにパンダゆさゆさと小屋を出る

正と邪の間に揺れる羅針盤

大柄な裸婦が笑って画布揺れる

佳

ゆさゆさと雑木も持論譲らない

老犬も綱もつ人もゆつさゆさ

ゆさゆさの気持のままで逢いにゆく

ゆさゆさと前のラクダについて行く

尚士

伽羅

菜月

更紗

哲男

富美子

朱夏

妙

昭子

シマ子

英子

愛論

求芽

倫子

日出子

たもつ

恵子

弥生

正雄

ふりこ

能子

希久子

セツ子

孝一

美明

天笑

篤子

民

ゆさゆさと揺ると青い実も落ちる 千里

母の樹はゆさゆさたわわなる愛よ 朝子

ゆさゆさを耐えてふたりの今がある 能子

樹を揺らしどこまで母を悲します 扶美代

ゆさゆさもあつた夫婦の長い坂 軸

兼題「送る」 河内 天笑選

星野さん浪速にバワーありがとう 節子

必勝の選手を送る冬の陣 螢

バレードを見送る雨の御堂筋 柳弘

米寿まで先送りする古希の宴 りつえ

栄転を送る温い目冷たい目 洋

公約を先送りして知らぬ顔 公誠

ニューヨークからの無心で無事を知る 舞夢

早送りテープのように日が暮れる 希久子

母からの宅急便で秋が来る 菜月

娘のアッシーして幸せなお父さん 賢子

娘を送る父は孤独なチャップリン 扶美代

リストラの同僚送る発泡酒 楓楽

かあちゃんの送るサインのまま動く 玄也

送られた笑顔で消えたわだかまり 篤子

迂闊にも送り込まれたのはスパイ ふりこ

見送りは要らん泣かれるのが辛い 鹿太

良く笑って歩いて老いを先送り 楓楽

送られて金いる話聞かされる 耕治

友が来る邪魔な亭主を送り出し
はいどうぞ妻を送り出し昼寝する
気難しい夫見送り今が春
浮き浮きと単身赴任送る妻
写メールで私丸ごと送りたい
送り狼かも知れぬスリリング
金送って欲しい時だけ来る電話
振り向かぬ子を見送って村はずれ
見送りへ窓の息子はそっぽ向く
ひとまずは見送るわりのいい話
ボクを送った小づかい母は自慢する
みんな送って自分の末期待つばかり
喧嘩中も朝は笑顔で送り出す
送るのか送られるかは神の匙
左遷地へ送る言葉を選っている

佳

人生の秋に月日の早送り
見送ってばかりでしねお母さん
見送って嬉し淋しい子の巣立ち
最後には敵にも送るありがとう
写メールでときめき送るぶらり旅

人

送られた松茸義理の匂いする
母の味待つてくれているから送り
賑やかに送り出されて淋しかり

天

霊柩車みたいに左遷送られる
軸

弘風
見清
更紗
欣子
セツ子
重人
セツ子
愛論
理恵
真理子
シマ子
順子
りつえ
五月
シマ子

(矢)

小雪
伽羅
千枝子
みつ子
富美子
高栄
小雪

第3回湯けむり川柳募集

温泉にまつわるものなら何でも自由

いなば温泉郷 岩井温泉・鳥取温泉・

吉岡温泉・浜村温泉・鹿野温泉

締め切り 1月31日 官製ハガキ使用

賞 湯けむり大賞1名10万円と温泉招待・

特別賞(1名)5万円と温泉招待・

各地温泉賞1万円・佳作(50名)

宛 先 680-0037鳥取市元町124

鳥取観光コンベンション協会

問い合わせ 事務局0857-26-0756

11月までの本社句会皆出席者は次の通りです。間違ひがありましたら、事務局まで申し出て下さい。

浅野房子 石森利昭 岩崎公誠 安藤寿美子
江口 度 榎本舞夢 大内朝子 居谷真理子
太田 昭 大谷篤子 鍛原千里 奥田扶美代
河内月子 河内天笑 川原章久 神夏磯典子
熊代菜月 志田千代 田辺鹿太 神夏磯典子
玉置重人 寺井東雲 中澤伽羅 鴨谷瑠美子
長浜美龍 西内朋月 西出楓楽 川久保睦子
板東倫子 藤井正雄 藤村メ女 高田美代子
藤田泰子 坊農柳弘 前たもつ 出口セツ子
村上玄也 森下愛論 森本弘風 飛水ふりこ
安永 春 吉岡 修 吉村一風 長谷川春蘭
吉村雅文 平松かすみ 山川日出子 (47名)

ろくでなし

毎月24日締切・30句以内厳守

編集部

川柳ささやま (前月号) 遠山 可住報

笛太鼓日本の祭りが踊りだす
理想像いまも心に秘めている
百巻の写経歴史がまだ残り
ロボットはいいなあ歳をとらぬから
ロボットも手伝ってくれ野良仕事
夢一つ追うて若さと呼び戻す
若い日の橋は思い出持っている
そのうちにロボットと食事しそうです
ロボットと一度握手がしてみたい
歴史ある足踏みミシンでんと居る
工場は静かロボットよく動く
妻と娘が若さを競うファッションショー
ロボットも鎖切りたい時もある
漬物の味ロボットに負けやせぬ
合併へ路地の歴史が一つ消え

ロイズ川柳会 山崎 君子報

ああもこうも何も書けない一ヶ月
ほろほろの心に母の子守歌

恵美 純子 多美子 かほる 八重子 とみ子 つや子 君代 朝子 康子 美紗子 開子 寿子 哲男 可住

キク子 みつ子

疲れたら九ちゃん之歌口ずさむ
弾みすぎ何か悩みがあるようだ
奈良坂の疲れた足に鳳仙花
疲れてる脳とのバトル続くなり
彼岸中日皆善人の顔になる
すこしですが素直をくれたそはの花
付和雷同する群れにいて気疲れ

岸和田川柳会

長谷川昌万報

爆薬の匂いがするぞ此の荷物
手荷物も軽目に支度小旅行
御先祖の墓が荷物と親不孝
荷はいらぬ裸でこいと所望され
地獄から出る抜け道も金次第
抜け道を作っておいてする悪さ
抜け道に誘い込まれた崖ツ縁
蟻の列抜け道捜したりしない
抜け道を胸から消せと子を諭す
献金は抜け道使え保険です
お互いの寝息確かめつつ眠る
寝たくない眠ると夢が醒めそうで
山越した看とりゆつくり眠れそう
睡眠時私無呼吸症候群
疲れた妻の軀だそつとしておこう
明日のない軒で眠る青エント
三代目のれんを捨てたガラス張り
酒の字が三つに割れているのれん
ふる里ののれん西郷どんと良おこじょ
名人芸のれんに恥じぬかくし味

哲子 貴代子 孝一 いわゑ 武庫坊 義子 美籠 美子 盛之 路子 穰一 香代 房枝 守 ゆい 弘子 甚一 一脩 みつ江 ゆり子 笑司 笑子 蛙城 あい子 照子 力子 寿海

のれん分けいま拳骨の温み知る
五十年色えてくる藍暖簾
のれんより学問好きの三代目
湯どうふにのれんが生きる南禅寺
人生を走り続けて今がある
運動会走っているのはママの口
走るより歩けと医者に諭される
コースター走るスリルにある不安
かあさんの心が温い走り書き
走り抜いた道深々と礼を言う

東大阪市川柳同好会

森下 愛論報

石積んで崩して狂った青春期
かたつむり時には狂いたく思う
寸分の狂い許さぬ宮大工
金と欲人の心を狂わせる
家族構成犬猫人間皆雑種
獣医さんの顔見た事のない雑種
寝そびれて羊千匹夜がしらむ
食って寝た猫に無職が嫉妬する
狸寝でしつかり噂聞いている
寝言でも子は父を呼び母を呼ぶ
悪友の寝た子を起こす飲む話
青葉の茂るノンキヤリアの道だ
婆ちゃんの炊いたご飯は立っている
経験が失つ張り物を言う社会
神様の一言使いく動く
神様を質屋の前で見失う
縄文杉のいのちと語る島の神

仁緑 苑子 呂万 狸村 珠子 英雄 基 東吉 さよ子 ダン吉 弥生 度 柳弘 賢子 シマ子 とみを 三重子 猪太郎 秀夫 雅文 克己 定男 良子 太郎 東雲 哲矢 湖風

煩悩を洗う十字へ膝を折る

川柳塔みぞくち

小西

雄々報

愛論

浜風に風船は舞う甲子園

横綱を倒し座布団舞い上がる

蝶も舞うお宮参りに良い日柄

神楽舞う夢は世界の大舞台

まだ傘舞も神楽もこれからよ

隠し芸勇気をだした舞扇

枯葉舞う思うがままに風の中

蝶乱舞いずこの花に誘われる

幸せの舞い込む扉あけて待つ

幽玄な仮面の舞に魅了する

ブーメラン舞うてみたくて夢を居

川柳塔打吹

大森

孝惠報

花かかえ父いそいそと亡母の墓

秋風が吹けばいそいそ燭をつけ

パチンコへいそいそ出かけるはだか

君と僕もつれもつれて七十年

あやしむともつれる糸をはぐす妻

舌もつれ次は頭か心臓か

舌もつれ蜂がもつれて風になる

酔いつぶれ口がもつれて文句言う

舌先がもつれ悪口ばかり言う

担がれているとは知らず有頂天

六人で担ぐと丁度良い極

倉吉に縁起担いだ福の神

晴光

担ぐほど金があつたら寝てくらす

顔見れば下手な嘘だとすぐわかる

嘘と知りながら本気で聞いたふり

嘘と本音七分三分で煙にまぐ

愛のある嘘は確かめなごらぬ

二枚舌今日はどちらで暮らそうか

ピンクの嘘春は桜の花になる

百も承知の嘘に相槌打っている

おみくじは嘘かほんとか見ぬけない

嘘ならばそこまで芸をしなくても

嘘の城なきさの砂で出来ている

嘘完成三面鏡の真ん中に

嘘でいい元氣そうだと云つてくれ

糸解きに野麦峠を越えてきた

嘘も方便友の名何度借りたや

川柳塔おつぱこ吟社

木村あきら報

軽い日も重い日もある朝の靴

取敢えず笑顔一つを提げてゆく

程々の倅せ角に積んで生き

許されて許して回る夫婦独楽

新米が瑞穂の国を語り継ぐ

立食いのウドン発車のベルが鳴る

夜も更けて親父を偲ぶ虫の声

大海を知らず養殖魚は太る

嫁ぐ娘に裏口透かす親心

拾う神あると信じて明日を待つ

季芳

たけ代

公恵

勝見

泰山

順江

善山

友楽

克枝

節子

紀美恵

玲子

玲坊

芳光

博丈

石花菜

孝恵

初恵

かおり

賢

ひかり

八重子

あきら

いさむ

吟笑

輝夫

よしみ

童謡の世界に浸る鬼ヶ島

やりくりを知らぬ振りする明細書

大部屋の役者にもある芸の意地

長旅の疲れを癒やす妻の笑み

一晚で良いからお泊り福の神

竹原川柳会

時広

一路報

コオロギよ森の宴は終らない

神代から宴の好きな日本人

終らない宴会幹事酔いつぶれ

満月の宴にすすき踊り出す

宴果てて無口な父は動かない

あお向けに蟬の宴は終りたり

よその娘の披露宴なら唄えます

どの曲も同じ踊りで沸く宴

佳句地十選

高橋

岳水

冷めた目で書く鋭敏なベンの先

母の手の皷きを知らないにぎりめし

何色を添えても白は拒まない

何処へ逃げても射手座の矢は射たれよう

張り切っても曲つてしまふ釘

正論を吐こう失う物はない

大海に私の悩みのみすばらし

疑問符が消えぬ厚いマニフェスト

惜敗の胸の炎は明日に活き

二番目を泳ぐ河童の処世術

正和

重人

一知

ダン吉

紀乃

日枝子

さち子

銀波

美籠

水

放任

寿々女

勝

貞月

坊太郎

蘭幸

幸子

貞子

輝恵

栄恵

万年

力

慶子

茜背に老いには老いのスケジュール
 童心に戻つて犬とかくれんぼ
 赤とんぼ夕焼けの街染めている
 ふるさとの夜景が呼んでいる霧笛
 海中花火夜景の海がもてます
 普明閣の夜景ひときわ輝きて
 火星接近と夜景の中にある
 風のすがたみえる気もする漁火よ
 便利さも此処まで来たか無洗米
 湧水でもったいなくも顔洗う
 富士山頂貴重な水で洗う手よ
 顔の染み洗い流した夢を見る
 夏草の意地洗うても指にあり
 眼圧を下げる弱視の目を洗う
 私を洗うもうひとりのわたし
 いのちの洗濯つてそれぞれにあるよねえ
 家族みなこつちやになつて洗濯機

川柳大阪

高木

信路報

孝枝 千枝 史子 節夫 規代 房子 笑子 不朽 正宏 菁居 汎美 敬子 淑子 静風 半覚 民恵 一路

外出へよろいかぶとが欲しくなる
 飛びついたチャンスの枝が折れました
 女房は水は遣らぬが花を誉め
 ええ風呂や無事故で入るこの気持
 靖国へ捧げる子供は産みません
 折り返す人生ですと鏡あふく
 意気込みに花を咲かせた手が温い
 ジー・ジーと七日余りの蟬しぐれ
 暑中見舞い書いて初盆に友思う
 遅くなりや赤提灯が手招きし
 心意気だけは負けんと老いの意地
 暇あつてストレス病と言う太目
 はなぞうし折れたようだが折れない
 もう一度乾杯しようその心意気
 一本の筋を通しているこぼう
 泣くほどに昼から晩も暇なやつ
 飲み込みの早い男の空財布
 二三杯飲んで男の意気あがる
 礼儀から始まる日本のお茶に花
 愛情を確かめあつた炊飯器

尼崎いくしま川柳会

春城武庫坊報

本蔭坊 章久 隆司 いわお 三十四 美花 柳昌 功 一步 照月 鉄心 司 かよこ 青道 比呂志 叭笑 柳弘 まつお 信敏 信醉

アメリカで火星の土地が売られてる
 誠実を翹にたんで千羽鶴
 季は巡る金木犀の香り来る
 秋薔薇恋淡くしてすぐに散る
 子に残す系譜半ばに秋雨前線
 萩咲いて尼僧の眉のやさしかり

川柳若葉の会

宮崎シマ子報

昭三 しづ子 正子 光穂 薫子 和子 加津子 慶子 欣史子 喜美子 弘直 シマ子 扶美代 アキ 能子 重子 達子 茂子 東雲 重人 あい子 トヨ子 正

城北川柳会

川久保睦子報

万景峰号拉致者の子達乗せてこい
 気まま虫都合よいことばかり追い
 長老といわれたときはなにかある
 欠点を話して男さっぱりと
 お月さん駆け落ちしてもよろしいか
 子に甘い親が子の道まよわせる
 貧乏くじでしたと妻が目で笑う
 米不作盆と梅雨とのけじめなし

青田風開けつ放しの通し土間
米寿まで生きて今更不足なし
七回忌迎えあの日も暑かった
不便なくらしアイティー等なくて
草笛が夏の匂いを乗せてくる
ときめきが失せないうちに秋を抱く
ここの他役立つ場所はボクにない
戦犯を拝み平和に徹します
プラトニックラブで活性さす右脳
一粒の種が沃野を恋しがり
草臥れたいのちをのばす露天風呂
作り手の汗は見せない京料理
飾らない太い十指は宝物
まだ女口紅ひとつ買ひ足して
歳幾つ取るうと母の子守唄
どっち抜こか閻魔も困る二枚舌
独り身のいつかケアの羽根の下
敬うは態度で見せてほしいもの
親離れ大空を飛ぶ竹とんぼ
忘却の結び目を解く重うた
いがみ合う国にも月はまんまるい
愛らしい年寄りなんて無理なこと

三幸川柳教室

古久保和子報

春 蘭 久留美 喜美子 順三 求芽 柳弘 史修 セツ子 昭子 倫子 あやめ 高栄 千里 典子 公一 志華子 柳一 ひさ乃 綏子 はじめ 千歩 靖子 智三 登美代 武 碧

随分と稽古をしたが紙めるほど
鵜呑みした返事へ雷が落ちます
飲んでいるはずの薬が残ります
たつぷりと税金飲んだ隠し芸
ああでもないこうでもない時稼ぐ
時々は里の元気を確かめる
長電話予定時間を狂わされる
二度とない今日を素敵に生きてます
日めくりをはがして今日も恙ない
アルバムを開けば時は過去を向く
時は金とは限らない待ちぼうけ
時がきてジワツと溶ける蟻
自転車もタリの時間も歪んでる
初恋はあの時だったかくれんぼ
時を下さい目先の欲が失せるまで
汗を拭くように時々止まる蟻
雲行きが怪しくなってきた会議
異常気象戸惑いながら茄子の花
土砂降りとなつて喧嘩が盛り上がる
デパートで収まる妻の低気圧
ひでり雨他人の胸は読みにくい
見知らぬ人に声掛けられたよい天気
上天気嫁も姑もよく笑う
漁港には天気を読める猫がいる
街もわたしもさっぱりとする雨あがり

川柳塔唐津

久保 正剣報

清 清史 保州 鉄治 義男 美一 イセ 純子 三千子 昇 桂香 朱夏 起世子 千秀 次根 准一 美枝子 みね 町子 公子 さち子 信子 和子 章子 兵八郎 實

来て去つて孫は何度も喜ばせ
バイキング血糖値など気にならず
変わる早さについてゆけない日暮れ坂
惜しめられ歳まで生きてみたい欲
明神様を出雲に送る行事から
寄り添った女房に照れる親爺さま
太古蒼茫海は神秘を語り継ぐ
原発が完成人口もどおり

川柳塔なら

坊農

我を捨てて歩けば虹が見えて来る
経験に勝る知恵なし古希生きる
佐と寂ひかれて歩く京の寺
子育ての知恵は昔とかわらない
昼食は回転寿司で老いふたり
再選のニュース秋茄子食べながら
吟行へ心浮きうき朝の靴
知恵袋たいぶ傷んできたワタシ
年の功乾杯音頭回来る
引出しにしまった知恵を整理する
まだボケず傘寿頭に残る知恵
知恵借りに來たと無心を匂わせる
清貧の暮らしに知恵を借りに行く
一夜漬け唄を覚えてバスの中
結局はあなたの腕を杖がわり
知恵のある魚は領海線泳ぐ
さりげなく喜ばず知恵素晴らしい
回復の病院食に手を合わす
五周年たえてくれる日本晴れ

柳弘報 積子 彰治 ふりこ 蘭香 むつみ 佳子 秋泉 まつお 春蘭 春久 章雄 真理子 冬葉 理恵 茂雄 一風 太一 絹子 晴翠 輝夫 勝視 水笑 虹明 高汀 正劍 四郎

高 任 郎 良 和 佳 哲 美 成 まき 悦 典 善 竹 圭 快 孝 風 可 哲 開 富 寿 靖
 榮 宥 報 雄 江 風 史 々 美 子 ゐ 子 雄 藏 萌 二 風 雄 住 男 子 美 子 子

アリガトウ僕の人生ワンセリフ
人生はシナリオ通りいかないよ
シナリオに振り回されている家族
階段で転び下まで一直線
割勘も飲めぬつらさに身を嘆く
トラ旋風景氣を煽り世直しした
独りでも退屈知らぬひろがる輪
虫の音に秋の風情の夢の旅
習慣病克服しつつ夢描く
重陽に菊はなくても酒少し
これからの生き方探しあぐねてる
虫の音に誘われ歩く万歩計
本質が言葉の端に出る怖さ
夏終る手首に時計跡残り
今までの苦労余生で取り戻す
孫と行く公園馴染みの猫が居る
身に覚え無い催促のメール来る

西宮北口川柳会

黒田

熊子報

さとし 星花 とし子 三峰 昭一朗 団地 はつよ ゆき子 とよ子 一炊 ルイ子 れい子 みさと さち子 政雄 一幸 三郎 春蘭 美代子 利子 孝一 野鷲 光久 庸佑 松煙 能子

さよならする時の笑顔はとってある
心から笑う笑顔は美しい
フランスパンの固さへ笑い合っている
生き生きて笑い百態はひふへは
子大来て笑いあふれる家となる
家裁では治しきれない深いひび
ささやかなひびだ二階と下で寝る
ひび入った器に過去が盛つてある
ひびのある器に私さばかれる
歳月に小さいひびが味になる
ひび割れ土器で学者がシグノーバズする
ひび埋める目立たぬ酒が高つくき
金木犀覚悟はとうに出来ている
母の忌よ今をゆつくり話したや
情熱に溺れた日もある紅
陽が沈む無限の愛を振りまいて
体重減る心のどこか瘦せたのか
国訛り聞いて疲れがふつとんだ
亡父に似た羅漢としはし対話する
ゆるやかに風吹け父母の墓なれば

かわはら川柳会

上田

俊路報

たず子 比ろ志 哲子 富喜子 貴代子 晴美 良恵 メ女 哲男 いたる 奮水 房子 文 美籠 鹿太 嘉彦 歳子 正坊 曙蝶 余史子 聴 余史子 かず恵 悦子 登生 道子 静子

はめ言葉いろいろ言つて注がせる
いろいろの生きざま見せる砂の顔
いろいろの過去見えかくれ万華鏡
いろいろのドラマを秘めた古手紙
むらくも川柳会 毛利
食欲も不作で少し心得る
食欲のあるが生き甲斐掌を合わす
天高く食欲そそる秋の旬
メ切日筆がなかなか走らない
搭乗のアナウンス聞き走る君
いつ見てもせかせか動き背の丸み
古里にそろう笑顔のなつかしさ
留守番に大も協力たのもししい
太陽を食べた野菜で生き延びる
病院の待合室の同窓会
想い出にやがて涙の色がつき
川とんぼは仏間に入りて盆供養
メ切日とつくに過ぎた句をひねる
子供達少し見ぬ間に背丈のび
柿一つ真つ赤に染めて陽が沈む
退屈をタバコの煙で紛らわす
つまずいて溜息一つずつためる

川柳塔わかやま吟社

牛尾

緑良報

寿子 雅子 泰良 俊路 幸報 明朗 定子 彰 信夫 定男 ます美 八重子 恵美子 茂光 ふさえ 昭子 美喜子 清吉 俊夫 早苗 さち子 克子 緑良 輝子

アニメより夢を貰っている大人
子の世界アニメの話から入る
青い鳥鬼門の方へ逃げて行く
ハンドルの飛ぶ方向にある日本

テポドンの飛ぶ方向にある日本
方向は白紙で親の腰裏り
方向を立ちどまりつつ探りあて
牙を剥くことに疲れて眠くなる

牙むいてかかって来いと言う自信
お茶碗が大きいだけの父の牙
牙も抜きますと出口に書いてある

お氣をつけ下さい牙を研いでます
保証印思いがけない牙をむく
牙出さぬようにご機嫌とっておく

身勝手な医療行為に向けた牙
心の牙隠して妻は紅をひく
そんなことで君が振り向くはずがない

そんなこと位と軽く言う他人
そんなこと水に流してうまい酒
そんなことに埋めた日記がいとおい

そんなこと言うから不眠症になる
そんなことあなた女に言わせるの
淋しがり屋で方向などは風委せ

西の国方向知らず行けません
水野 黒兎報

ほたる川柳同好会

水野 黒兎報

水野 黒兎報

水野 黒兎報

水野 黒兎報

水野 黒兎報

泰子

美子

大輪

保州

鉄治

豊太

和度

三男

裕美

あき子

優子

和子

英子

怜

佐一

寿子

正博

稚代

富美子

三喜夫

恵

太茂津

和代

長一

契子

メ女

メ女

メ女

メ女

メ女

メ女

メ女

メ女

メ女

メ女

メ女

メ女

ひまわりの種太陽へ背伸びする
姿なき敵だと思ふ雑草くさの種

夢の種飽きずに播いている余生
おでん種家族の顔が見えてくる
ちよつと来てためごとの種播いていく

種播いただけで花など咲くものか
それとなく話術巧みに種明し
染め抜いたのれん撫でてる不況風

都会の色に少し染まってる故郷の駅
たそがれの色に染まってるまわり道
いま一度紅葉に染める赤い色

保護色に己を染めて生き残り
はつとさせぬように切り出す電話口
子供らの作文はつとする視点

はつ今日はクラス会だと今気付く
ハツとする前行く友の背な淋し
艶つぽい夢はつとさせずつと覚め

悪友の証言妻は信じない
しゃくりあげ涙の証言子を信ず
おばちゃんがおやつ取つたと目で言う子

川柳藤井寺 高田美代子報

席譲る茶髪嬉し声を掛け
嬉しさもそれほどない不戦勝
せんべいが食える入れ歯ができ上る

戎橋十八年目の嬉しい日
何の日か当てるでぐらん黄色いバラ
ポケットに入れて何度もみる手紙

挫折した男を癒す虫の声

石舟

保子

桂子

雪子

敵子

緑骨

柳童

祥風

蛭柳

久子

黒兎

正三郎

ヤギエ

春代

恵勇

志洋

一筒

善之助

扶美代

アキ

鐘造

鐘造

鐘造

鐘造

鐘造

鐘造

鐘造

鐘造

鐘造

鐘造

鐘造

鐘造

鐘造

鐘造

鐘造

鐘造

鐘造

鐘造

鐘造

鐘造

鐘造

鐘造

鐘造

鐘造

鐘造

鐘造

鐘造

鐘造

火遊びに虫が良過ぎる手切れ金
胸に棲む短気の虫をもて余す

鈴虫の美声に火星寄つて来る
怒りん坊だだけ泣き虫笑ひ虫
争いの角は持たない蝸牛

遅生まれの蟬がいつびき啼いている
虫けらは虫けらなりの椅子がある
お見合いをこっそり抜けて火星見る

こっそりと見たライバルの愛読書
音も無くこっそり戻る負け勝負
こっそりと洗つてくれた台所

大福をこっそり食べて喉に詰め
大和路でこっそり癒し探してる
こっそりと聞けば本当かと思う

勘定のころにこっそり消えている
沈む陽にこっそり折る事がある
こっそりと一人でかける釣り穴場

こっそりと握らす母の手が温い
こっそりと耳打ちされた三人目
盗み食いした時もつとうまかった

こっそりと諭吉に鎖つけておく
こっそりと裏地に金をかけてます
こっそりと愛を伝えるタイミング

川柳塔おとり 原みさを報

お祭りの次の日力ぬけている
見る阿呆踊る阿呆がいてまつり
秋祭に妻を呼びたくなる今宵

お祭りだ酒だビールだ胃薬だ

史郎

絹歌

耕策

登志子

春蘭

美代子

昭子

井竿

庸佑

一知

アヤ子

雅枝

栄一

シマ子

かつみ

マサ子

誠良

悦子

ヨシ枝

六点

みつこ

重人

瑠美子

真一

宏章

雄々

光

彼岸花無縁仏の水祭り

楽しみは母の実家の秋まつり

古里の祭りは山も錦だよ

老若の心を掴む笛太鼓

投票をことわり以後はそれつきり

愛の鞭その一喝に飢えている

叱つてた子に叱られてる私

大怪我をしてはいけなから叱る

忙しい母ソプラノで叱つてる

将来を思い隣の子も叱る

子を叱る声両親に生き写し

お祭りが好きで男をやめられぬ

刻み煙草明治の父も遠くなり

ネジを巻くと明治を刻む鳩時計

海軍魂刻みこまれた跡がある

時刻む音がだんだん早くなる

時刻むように点滴落ちつづけ

亡父の顔祭太鼓に乗ってくる

襟あしが祭りの少女羽化させる

今日だけは過疎が祭りに揺れている

余命知りあれから時を刻みだす

連風のような沢庵そえてある

川柳塔まつえ吟社

津川

紫見報

嫁さんの武器沈黙と涙です

暴投をひらりと躲す嫁と居る

嫁さんは小粒で達者いい加減

嫁ご機嫌まな板の音リズムあり

一弘

仁子

清子

庸二

富貴子

幸次郎

風花

艶子

せつ子

以和乃津

和子

小生

紀子

彩子

舍人

螢

孝子

由多香

道子

登美

邦昭

義弘

みさを

美女才女うちの嫁には程遠い

嫁が嫁がと自慢話に聞き飽きる

割り勘に万札そろそろしまいいこむ

割り勘できれいに酔った万歩計

はしつこに座つて割り勘仲間入り

肌が合い割り勘進む午後の雨

割り勘に男と女差別され

割り勘のコップの泡がよくしゃべる

栗の実がはじけて落ちる里の秋

青空がとっても似合う里の秋

絵手紙へいっぱい書いた里の秋

人間が恋しくなつた里の秋

木守りを残して里の秋暮れる

芋の葉に露ころろと里の秋

白旗を上げて気楽に生きてる

子の夢にいま日の丸の旗はない

旗取りに走らぬ帽子撫でやる

白旗を掲げた勇気貰つていてる

寄せ書きの日の丸風化せぬように

目立つ場所応援の旗振つていてる

体調は良いのに心病んでいてる

体調をおちよに聞いて呑んでいる

体調も声もさきいろいさくらんば

体調が悪いしずかにして欲しい

体調がよくて逆風やり過す

体調を書けば日記が笑い出す

人生の舵が狂つて塀の中

浜丘

町紅

政子

たけし

秀子

義良

昭二

知恵子

操子

治代

ちえこ

久枝

ちかし

きみえ

きみ子

螢

玲子

茂美

桂子

静恵

邦代

幸子

日出子

博子

多賀子

紫見

なるがまま舵など要らぬ吾が余生

舵取りは嫁に任せて楽隠居

舵取りが下手でぐうたらしています

家中の舵を握つて惚けられぬ

心電図乱さぬほどにとさめくか

運動会またも日延べの雨男

嘘つけず胸のとさめき押えてる

カルチャーで遊んで学び楽しんで

ときめきは無いけど今日も化けました

子沢山遊びを知らぬ父の靴

ママチャリのハンドル枕にねる子供

女の子に受難な時代新世紀

海の香の残る水着をたたむ秋

過労死にゆとりが見えぬルーレット

褒め言葉ばかりで相手傷つける

休憩の刻も欲しいから蟻の列

ときめきを胸に納めていてる夕陽

八尾市民川柳会

宮崎シマ子報

百本のバラにくらんで棘見えす

迂闊にも田圃に鍵をかけ忘れ

迂闊にも言った一言飛びはねる

知らぬのは自分一人という迂闊

うかつにも出番忘れたあひるの子

もう誰も瘦せた指にはたからない

指笛の合図に闇を走る恋

エイサーの指笛先祖も輪の中に

医者の指示通りに食べている肥満

まだ耳朶に自分に勝つて父の声

その

江美

全彦

玉枝

美代子

よし子

カズ子

信子

秋子

まさ

耕治

亀与子

イサミ

義芳

孝一

正治

美龍

弥生

シマ子

欣子

宏至

弘直

とみを

欣之

幸生

なごさ

己代一

勝つことを信じ風船ふくらます
 言い勝った夜の枕が落ちつかぬ
 正論で勝つてはしこり残す人
 負けて勝つ母のふところ温かい
 愛さめた分だけ指輪きつくなる
 宝石好きどうやら卑弥呼の遺伝子か
 子に残す宝石一途丸い背な
 宝石の心のない言葉たあたりがとう
 婚約に心のタイヤくくれた人
 宝石も人を選んでみたくなる
 補聴器が小耳にはさむよい話
 枯渇する頭を森で眠らせる
 夢に見た絵とうらはらの暮し向き
 隠されたら見たいと思うのが心理
 なるほどと多く領く日は素直
 青空にマイナス志向似合わない
 頑張った案山子不作へがっかりし

はびきの市民川柳会 徳山みつこ報

柳伸 千里 幸美 昌子 きよみ 頂留子 東雲 ダン吉 ますみ 洋 庸佑 ひさ乃 民 はじむ きらり 加津子 一風 かつみ 六点 真一 吐来 遠野 重人 みつこ ヨシ枝 専平 久仁子

税金の一部が戻る喜寿祝い
 敬老会馴染みの顔がひとつ消え
 敬老が空しくうつるきのう今日
 慰めの言葉につまる黍れよう
 慰めにかけてまた泣かれて通夜の席
 ごめんねで慰められて仲直り
 病む友を元氣そうやと慰める
 慰めるつもりが逆に勞れる
 慰めるつもりが逆に勞れる
 教えるに慰められる負け将棋
 慰めは優しいペンの走り書き
 元氣だせあしたになれば風が吹く
 ライバルに慰められている惨め
 慰めは言えず両の手で包む
 報われぬ汗慰めるコップ酒
 バラ百本氣障な男が慰め出す
 反抗期老いた乳房が疼き出す
 朝のミルクで今日の体調整える
 牛乳を飲まぬと今日が始まらぬ

岬川柳会 八十田洞庵報

たけし いさお 昭平 庸佑 喜久子 志洋 章司 耕策 さとみ フジ 泰子 ダン吉 一知 美代子 りつえ 昇 一壺 令子 翔仙 昌夫 とみ 和香 富美子 桜琴 茂平

筆のあとにじみの残る父の文
 筆書きの案山子武蔵の目鼻立ち
 前歴を言わず守衛の筆見事
 秋の空内緒話は似合わない
 話題性さぐるメディアの強引さ
 逆境に耐えて野心を貯える
 大手衛生死の境のり越える
 相続権妻と言う名の重さ知る
 川柳さんだ 北野 哲男報
 弾けたくないのに弾く柘榴の実
 原点は乳を飲ませた母にある
 再会で錆びた右脳に恋敵
 栗御飯炊いて夫の笑みを見る
 車窓より実りの秋も愁いあり
 娘を待つて超特急で愚痴こぼす
 本当は弱虫だから棘を出す
 敵もさるもの騙しには乗ってこず
 絵一枚掛ただけでも風が抜け
 七人の敵よりまずうちの敵
 のりけと聞こえる愚痴をこぼす女
 長柳会 西山 幸雄報
 砂をかむ思いとじ込め鍋磨く
 飽食の肥満嘆きの秋旨し
 性善説書はみんな純白だ
 今が花そんな悲しい蕾たち
 喝采たバラの蕾はどつと咲く
 拉致家族嘆きの涙かれ果てて

俶子 悦子 洞庵 孝子 勇 みやこ 里子 朋月 忠 一之 歳子 ちあき 開子 房江 千代 章子 正和 哲男 史 けい子 正子 由一 和一 正一

懸命で嘆く暇ない雀蜂

減反を嘆く案山子の背に夕日
幼稚園恋の書が出来始め

欠けてゆく月と嘆きを分かち秋

不景気を嘆いて去って行く諭吉

華やかでどこか淋しい彼岸花

毒すこし飲んで妖しい彼岸花

望郷の胸に燃えてる彼岸花

子を感じ同じ文句で騙される

いつまでも書のままを欲をいう

墮ちるだけ墮ちたら出ない嘆き節

意地のあとサンドバックが揺れている

飲み足りて書のようなやの口

愚妻だと嘆いてみせる愛妻家

大輪に咲くと信じている書

ケイタイがあたり書を散らす惨

いずも川柳会

佐藤

治代報

足湯をして疲れた癒す遊園地

師の胸に記憶が残るいたずらっこ

猫の目はいたずらっぽくマイペース

静かな街の並木きれいなモデル地区

いたずらが好きなあの子を連れて来た

表札の裏に疲れが溜っている

新米をはおぼる秋の顔になる

この顔でよろしかったらお貸しする

エプロンの似合うモデルのままで老い

疲れたら癒してくれる音がある

真実を語った顔がすがすがし

三和子

和代

武男

芳野

英美

敬二

富美子

一慧

マサ

良男

たけし

淳司

潤子

正美

幸雄

直樹

みち子

スズコ

英子

邦子

啓三

桂子

玲子

治代

テル子

昌枝

多喜

疲れると貴方の顔が二重丸

今はもう歩き疲れた靴の底

友に逢う心の顔が見たいから

とげを抜くまあるい顔であるように

読書の森で知恵の輪転っている

日を浴びて埴輪の顔もまぶしそ

先頭を風除けにして走る知恵

よくしゃべる女が前に居て疲れ

疲れなどみせず歯切れの良い返事

広告のモデルが秋をつれてくる

ひたむきな顔から汗の竹とんぼ

独り居の作り笑顔が黄昏れる

いつの間にモデルはモデルらしくなり

知恵の輪がからんだままで捨ててある

屋根の下生きるドラマの顔がある

輝いている顔夢を持つ人だ

あざやかなモデルになった唐辛子

いたずらな花を投げると投げ返す

大根畑で立っているモデル

くらぼ川柳会

前坂なお美報

風の音わたしを呼んでいるような

般若心経鐘の音ひびく仏間かな

漏水のパイプ直して安堵する

鉄パイプ持つてあはれた日を想う

わたくしの名を世に残すつもりない

昭和史の残した傷が深すぎる

口達者過ぎて非難を受けている

達者でも人の心は読みにくい

美佐子

秀子

歌子

久子

蘭水

まこと

寿美

夢酔

多輝子

房子

満江

多賀子

ちかし

茂美

紫見

文子

きみえ

章峰

れいじ

つや子

常子

(伊)富子

小鹿

あらた

悦子

ふみ子

菜美

熱帯夜おれの自画像七変化

あなたと私つなぐパイプが細すぎる

人脈のパイプに悩まされている

生き残るための戦いくり返す

肝心な時に証拠が残らない

便りなくとも達者ならそれでいい

達者でも借金で死ぬ歳となり

人間にだけは化けたくない狸

変化する色を忘れたカメレオン

達者だと離れ住む子に言っておく

軟化して提灯持ちがうまくなる

妥協した背骨の音がやかましい

豊中もくせい川柳会

田中

正坊報

高望みし過ぎて梯子外される

能力はないが望みは高く持つ

高すぎる望みは持たぬかつむり

自分史に無理に渡った橋がある

井の中で世渡りヘタな時過ぐす

小商いの老いのリズムで日が暮れる

コスモスが風のリズムに乗っている

気に入つた楽しいリズムに酔っている

トンネルを抜けてリズムを取り戻す

一日のリズムが狂う朝の客

口上で売ったバナナの美味しさよ

母子手帳貰い嬉しさ満ちてくる

にこにこ手を振る孫に見送られ

にこにこ何かいたずらしたのかな

重忠

幸子

はるお

和代

(宇)美智子

なお美

涼子

静生

(山)みち子

富子

一眸

公弘

萬の

野鷲

正坊

諷児

巴子

知香子

タミ

蛙

重人

英子

啓生

慶子

和子

博子

千鶴子

にこにこの笑顔が苦勞かくしてゐる
手判押すばあさま米寿はしゃいでゐる
皆の衆只事でない選挙だぞ
野の仏さぬいに染めて秋の月
願わくば過不足なしでおる日々
父ちゃんは今日もおならへん祭り好き
子と孫はツーカーわたし蚊帳の外
子を叱る娘よあまり叱るなよ
故郷の秋軒け出す荷物解く
読み了えて二十三夜の月を見る
マニフェスト解りづらくて悩みます
こうこうと住屋の窓に十三夜

倉吉川柳会

竹信

照彦報

百歳の三段跳びに見惚れてる
ビヨナンで平和運動してみろよ
死神が坊主めくりをやつてゐる
不夜城が続いています立候補
運動し歩いて天国行くつもり
重箱に秋を詰め込む運動会
名水がゴクリと喉をすべり落ち
長雨の土産に怖い土石流
空き腹に胃にすべりこむ鮭茶漬
どんぐりが地球の上をすべる頃
リストラで社の地滑りの音を聞く
不器用で直滑降にしか行けぬ
東京寒波すべつてころふハイヒール
締め切りの間際に投句すべりこむ
女優かも知れぬサングラスが歩く

見清 玲子 久太郎 求芽 春 満寿巳 則彦 庸佑 寿美子 郁子 都代子
ゆり子 次男 石花菜 日出子 賀寿恵 和枝 玲子 螢 忠良 茶子 重忠 京子 芳光

リスよりもシャリーマクレーンが好き
個性派もあつて女優のバラエティー
親の死も笑顔で舞台立つ女優
カードには仏も修羅も棲んでいた
診察のカードもはずむ快復期
風呂上がり椅子で屈伸ダイエツト
血糖値軽い散歩だりズミカル
登りつめ滑る勇氣のない高さ
走るより頭の運動五七五
光らないまんまで去つた元女優
天国が地獄になったカード潰け
負け惜しみ負のカードだけ強く生き
男優が女優に化けて歌舞伎舞う
女優にはなれぬ歌舞伎の立女形

川柳ふうもん吟社

杉本

孝男報

遺書がわりだろ今日日記を今日も書く
生涯の伴侶を決めてからのうつ
決をとればいつも親父の一人負け
大吉を肌身離さず持っている
ひと呼吸おけば気分いい軽くなる
決着がついた途端に腹がすく
くやしいよガッツ数字に乗って来ぬ
ガッツだけ有つても身体付いて来ぬ
逢つてから決断のネジ緩みだす
百歳のガッツの声に励まされ
勢いのあるうち一步踏み出そう
ガッツしたこぶしに闘志ふくらませ

玲坊 喜美子 龍枝 雄々 完司 康子 和子 勝江 萩草 秋子 節子 よしえ 十三男 かつみ 照彦 洋々 圭一郎 金馬 金祥 節子 裕子 裕花 保子 夢路 茂登子 一京 京子

引力が飛びたい僕を離さない
合併は賛成字名離さない
一滴もこぼさぬ決意には勝てぬ
皮むけバナナの打撲現われる
青い鳥スリと抜けるのがうまい
蜘蛛の糸蜂を射止めて離さない
つまずいて流した涙糧になる
ジャンケンで決めると誰も傷つかぬ
万札もガッツないから利もつかぬ
八起き目の綱はしつかり離さない
帰るなと孫は鞆を離さない
極楽へ行くと決まつてゐるんだよ
苦勞など無かつた顔でガッツする
嫁に出す親の気持が決まらない
決断が早過ぎたのかあ夫婦
生涯の決算きつとプラス出す
瀬戸際の外交核を離さない
決着がついた安堵が高いびき

川柳塔みちのく

小寺

祝い酒雲の上からちちの手袋
向日葵の花に蹴られたことがない
エノケンの貌になつたりして孤独
ベルリンの壁が崩れた日の花火
日展を出ればゴッホの貌になる
いろいろな姿をみせる千切れ雲
嬋天下いつもめでたい日が続く
おめでたい時もふつつつ出る涙
羨望の視線の中で読む誓紙

昌鼓 志緒 一粹 益子 一瑠 和代 朋恵 無限 行男 雅女 宗明 螢 宗明 孝男 花菱報 夕香 鉄男 霜石 あすなろ しげる 一光 きよし 岳水

ぼろぼろと街が崩れる音をきく
崩れても崩れても積む雪たるま
土砂崩れ不慮にそなえて平素から
崩れるなマグマを諭す岩木山
飢餓の子へ届いて欲しい義援金
今年また家族で気張る赤い羽根
世話になる寺社の奉加を断われぬ
百万の予想を崩すタイガース
気を許す型に崩れる横座り
崩れてもすぐ建てなおす蟻の城
抜擢の内示が休火山に来る
少年はゲームの間にのめりこむ
孫という鏡が一人笑つて
足のある幽霊が出る歓楽街
立秋大吉あなたの胸にいた蜜

川柳クラブわたの花

吉村

一風報

フルーツゼリー宝石箱をたべている
おもしろい切り叫んでみたい気の滅入り
カバークロイの旅立ちニューシンガー
言い勝てばよむ空気が背に重い
朝顔を数えひととき癒やされる
宇宙への夢を生んでる小企業
泣いて勝つ女最後の武器を出す
乗客のほとんど降りた花の駅
鶏かなし十田玉子生みつつけ
財布よりケイタイ忘れ飛び帰る
ストレスも開き直つて勝ち組に
手抜きする技を生み出す主婦の知恵

正純
一道
(赤)妙子
(本)たえこ
ますみ
まさこ
いつみ
義明
春江
順生
知佐子
美代子

生い立ちの夢絵に描いた餅でした
どん底に生きた気迫がゆるがない
一ミリのメダカ目もありヒレもある
大海に心の中を洗われる
夏休み子供天国親地獄
保険証たらいまわしで医者通い
いらんこと言うて後悔ばかりする
昼からのかたい講義は眠くなる
油断して馴れた廊下で蹴躓く
久しぶり元気ですかとクリニク
さりげないひと言男立ち直る
子と同居角を抜いとく二三本
葉包紙増えて折鶴また一羽
収集車ナスビのへたを足す袋
人気盛り上げ勝たねばならぬ選挙戦
青春は宝石よりも輝いて
勝つことは勝つたが空し口げんか
雪解けてリンゴ花咲き気もうらら

川柳塔鹿野みか月

土橋

民
明
八寿子
はじむ
道子
宏至
ミツ子
キク子
君江
宏
一風
きり
欣子
幸枝
晴美
俊子
恭一
奈良司
螢報
みどり
永子
八重子
武子
幸枝
弘子
実満
睦子
孔姜子

平凡でいい墓碑にするわが言葉
ふるさとに生きた証の句碑ひとつ
風除けに使う広場の忠魂碑
苔むした石碑だけ花供える
どっこいしよ膝が笑つてよろめいて
よろめいた足が小石と対話する
よろめいて卒寿はすでに過ぎている
エライコッチャ鬼が私によりすぎる
寄り添つてよろめく足を支え合う
よろめいて美人の方へ肩寄せる
ふらりふらり老境をよろめいたり
よろめいて蓮華の里へ導かる
よろめいて見ようか銭のあるうちに
エンピツの根に負けそうあと僅か
幸せと思う鉛筆まだ持てる
誤字脱字鉛筆君ははずかしい
鉛筆で書く闊歩の薄い文字
鉛筆をポツケに入れて野良に出る
鉛筆を束ねて敵に立ち向かう
けずり削つて鉛筆の芯を出す
鉛筆の芯を舐めたら知恵が湧く

岩美川柳会

石谷美恵子報

立亥
彩子
茶子
きみ子
かおる
八重
汲香
菊乃
和子
久枝
諷人
公子
はるお
かつ乃
くに子
節子
宣子
房子
盛桜
喜与志
螢
重忠
圭一郎
節子
一夫
公乃
螢

生き延びて秋のメニユーのむかごめし
旅先で朝のメニユーはバイキング
付き合ひのメニユーは右へ倣えする
うまそうなメニユーは時価と書いてある
今一度教えて欲しい金儲け

完 司
よしえ
公 子
稔 郎

過去年問わぬ今の素顔で逢ひに來い
今ここで止めたら僕が消えそうだ
千の花今一つ嘘もない
あやまれば今なら出来る仲直り

蟹 郎
孝 男
静 生
和 歌子

溺れるな自慢ばなしは聞きとうない
ネクタイを締めると急に溺れだす
接待に溺れて濁り水を飲む
生きる術溺れるたびに学びます

裕 子
裕 子
裕 子
裕 子

五七五溺れるほどの虫となる
幸せに溺れてそれと気付かない
強がりを言っても飲めばすぐ溺れ
渡りたい橋へ一歩が踏み出せず

忠 良
一 玲
一 玲
一 玲

主婦の留守おでんかカレー作つとく
用心をすればするほど金が出る
糖尿へ目の毒旅のバイキング

照 子
照 子
照 子
照 子

満月が顔出すようなゆでたまご
半熟が美味しい角の喫茶店
いじめには結構つよい茹でたまご
魔刊にしたい雑誌がよいらんし

一 京
一 京
一 京
一 京

魔刊を噂に乗せて売りつくす
家柄を気にしていない叩き上げ
反抗期背中にいいえの文字ばかり

た ぬ
た ぬ
た ぬ
た ぬ

南大阪川柳会
吉川 寿美報

美 恵子
美 恵子
美 恵子
美 恵子

いえいえと断りながら右手出し
投げようか捨てよか石を握りしめ
手を握り戻れぬ橋を渡り出す
九条を握りつぶしてなるものか

初 太 郎
千 里
千 里
千 里

いぶし銀茶室に湯気の立つゆとり
聞き上手忘れ上手な老成で
老成の辞書をよこしている手垢
老成の祖母生活の知恵袋

柳 伸
柳 伸
柳 伸
柳 伸

石庭の石と語れる歳となり
緻密な線が墨重から出る宮大工
老成の娘演じる森光子
老成のボスにちらついている頑固

楓 楽
楓 楽
楓 楽
楓 楽

舞い終えて五枚こはぜを脱ぐ老成
定年に誘う人もない家建て
魔刊と知れば欲しくて探し抜く
父がいて母がいた家そのままだ

萬 的
萬 的
萬 的
萬 的

握られた秘密が人生狂わせる
時間通り者抜きが出来てあわてない
老い威張る彼の態度が気に入らぬ
経験の助言馬鹿を花にする

柳 弘
柳 弘
柳 弘
柳 弘

さすが老成隅すみ気をくばり
母さんの生き甲斐村の雑貨商
雑用の谷間で一服がながい
私にも悲しみがあがり雑記帳

タカ子
タカ子
タカ子
タカ子

雑然どしてもすぐに取り出せる
雑然どしてもすぐに取り出せる
雑然どしてもすぐに取り出せる
雑然どしてもすぐに取り出せる

度 度
度 度
度 度
度 度

雑然どしてもすぐに取り出せる
雑然どしてもすぐに取り出せる
雑然どしてもすぐに取り出せる
雑然どしてもすぐに取り出せる

洞 庵
洞 庵
洞 庵
洞 庵

雑然どしてもすぐに取り出せる
雑然どしてもすぐに取り出せる
雑然どしてもすぐに取り出せる
雑然どしてもすぐに取り出せる

庸 佑
庸 佑
庸 佑
庸 佑

雑然どしてもすぐに取り出せる
雑然どしてもすぐに取り出せる
雑然どしてもすぐに取り出せる
雑然どしてもすぐに取り出せる

朝 代
朝 代
朝 代
朝 代

雑然どしてもすぐに取り出せる
雑然どしてもすぐに取り出せる
雑然どしてもすぐに取り出せる
雑然どしてもすぐに取り出せる

民 代
民 代
民 代
民 代

雑然どしてもすぐに取り出せる
雑然どしてもすぐに取り出せる
雑然どしてもすぐに取り出せる
雑然どしてもすぐに取り出せる

三 男
三 男
三 男
三 男

雑然どしてもすぐに取り出せる
雑然どしてもすぐに取り出せる
雑然どしてもすぐに取り出せる
雑然どしてもすぐに取り出せる

珠 美
珠 美
珠 美
珠 美

雑然どしてもすぐに取り出せる
雑然どしてもすぐに取り出せる
雑然どしてもすぐに取り出せる
雑然どしてもすぐに取り出せる

千 梢
千 梢
千 梢
千 梢

雑然どしてもすぐに取り出せる
雑然どしてもすぐに取り出せる
雑然どしてもすぐに取り出せる
雑然どしてもすぐに取り出せる

三 男
三 男
三 男
三 男

雑然どしてもすぐに取り出せる
雑然どしてもすぐに取り出せる
雑然どしてもすぐに取り出せる
雑然どしてもすぐに取り出せる

三 男
三 男
三 男
三 男

雑然どしてもすぐに取り出せる
雑然どしてもすぐに取り出せる
雑然どしてもすぐに取り出せる
雑然どしてもすぐに取り出せる

三 男
三 男
三 男
三 男

雑然どしてもすぐに取り出せる
雑然どしてもすぐに取り出せる
雑然どしてもすぐに取り出せる
雑然どしてもすぐに取り出せる

三 男
三 男
三 男
三 男

雑然どしてもすぐに取り出せる
雑然どしてもすぐに取り出せる
雑然どしてもすぐに取り出せる
雑然どしてもすぐに取り出せる

三 男
三 男
三 男
三 男

雑然どしてもすぐに取り出せる
雑然どしてもすぐに取り出せる
雑然どしてもすぐに取り出せる
雑然どしてもすぐに取り出せる

三 男
三 男
三 男
三 男

春

舞 夢

絹 子

み 子

真 子

昭 子

正 坊

孝 一

美 龍

正 雄

千 梢

さと美

尚 士

東 雲

恭 昌

日の出

志 華子

蛙

会 美

希 久子

理 恵

良 一

石 舟

義

照 子

平松かすみ報

九 好

愛される老人演じてくたびれる
 老人が無邪気で家族睦まじい
 老いてなお悩みが深くなる祈り
 老人が溢れる国の一人です
 老人は力で負けて知恵で勝つ
 老人パワー活かしあなたが主役です
 喜劇にもならぬ二人の物忘れ
 実験もしたが善人にはなれず
 疑問符をためて実験室を出る
 転ぶ度生きたヒントを掴まえる
 水溜まりもう飛び越えぬ転ぶから
 寝転んで浮雲見てる青テント
 転ぶときわたくしの手は離してね
 寝転んで父の命日繰っている
 浮雲に思いをはせる拉致家族
 浮雲の行方見つめるホームレス
 浮雲のような暮らしをやつと抜け
 浮雲を支えてくれている家族
 浮雲を縛る鎖を買いに行く
 浮雲の父浮雲の子を案じ
 雑兵へ寄り忘れない知将
 旅人はワァーキレイだと棚田褒め
 せせらぎの葉っぱで憩う赤とんぼ
 一線を引いて波立つこともない
 サンマ焼くすだち頂きましたから
 幸せがくしゃみしている耳掃除
 真っ先に起きて大した用もなし
 曲線を辿ると人間らしくなる

一炊 亜也子 亜成 弘風 高栄 祥昭 良知 修 俊雄 弘一 利昭 三郎 朝子 たもつ 勇太朗 忠央 一矢 一笑 ルイ子 れい子 仁清 庸佑 さち子 かすみ 恵子 一風 度洋

川柳塔きやらぼく

福代 天雀報

隣から電話でお茶においでませ
 夜明けから始まる秘密ダイエット
 白い皿にあるたぐさんのかすり傷
 変りなく今朝も味噌汁具を刻む
 目に見えぬ翼にかかった日の焦り
 時々は無視をしながら共存す
 ガラス戸をすべる雫の行方など
 二世帯を結ぶ階段さしみ出す
 遠慮がち地虫ごこかで鳴きだした
 激暑大雨わたしを癒す曇り空
 さるすべりの花もややと咲ききれず
 新しい着物タンスでうつになる
 静かな人の声つれてくる白い萩
 すすき野の芝居セリフがもろくなる
 コギヤル語に首をかしげているオウム
 盆が来て種々な言葉で飲み交わす
 歳重ね引き算ばかり多くなる
 今少し待つてください髪を梳く
 縮む背に孫の背丈が追いつがる
 九・十一のテロ日本の秋は十五夜で
 口下手と言われる触手もっている
 むにやむにやと戒名読んだ初の盆
 何もかもやめてしまえばらくになる

富柳会

池

森子報

それぞれの掟で暮らす自尊心
 難民の素足に熱い砂の月
 鐘造 紅紫朗

海も空も知らず鈴虫秋を知る

夕子

着てもよし脱いでもよろし十八九

亮幹

月光に冴えるシラノの愛の歌

扶代

みんな逝つて長いロープが残される

花梢

カタログを集めて心あそばせる

和虹

どつしりとカタログ抱えている孤独

冬

わたしが溶けてゆきそな青い空

アキ

カタログがそつと窺う顔の色

和代

赤とんぼ亡父がだんだん偉くなる

深雪

一仕事すませて空が美しい

和喜子

闇一つ抱えて月夜に背を向ける

浩子

秋空を抜ける快音草野球

キミエ

つなぎ目がちよつとゆるいな母だらう

東雲

長い脚すらつと並ぶスカートで

春蘭

風鈴の舌を今年は句に替えて

鬼焼

につこりと答えいくさの汗をふく

萩乃

一喜一憂生きた甲斐のワンセット

巳代一

真実は敗者の側にある暮らし

哲矢

月に棲む卑弥呼にもらうミステリー

奈保美

空っぽを束ねて花の旅に出る

欣之

くちびるを盗むすすきの海人中

誠

胸襟を開けば涼し鈴の音

一夫

八朔の苦餅を食べて取る眠気

ひろこ

誘惑の手がカタログに付いている

信子

一通の便りに孤独から覚める

宏至

金かけて汗までかいてやせる謎

奏子

三日月が私に問うている空虚

森子

柳界展望

月26日吹田メイシアターで183名の出席を得て開催された。同人の天位は次の通り。蓋をした秘密熟して甘くなる 山本希久子
なお吹田川柳会年間の句報の中から

○第54回西宮市民文化祭川柳大会は、西宮市民会館で参加117名により10月19日開催。当日の天位は次の通り

亡き人のメールか月が美しい 奥田みつ子

○第53回岸和田市民川柳大会は、10月19日参加者74名を得て、春木市民センターで開催された。

○文化協会賞
ひと鉢の土を舞台に咲いて散る 居谷真理子

○文化祭奨励賞
わたくしが私を叱るのも喜劇 川上 大輪

○文化祭賞
貴禄がついて人間らしくなる 松原 寿子

○吹田市民川柳大会は、10

差し上げる 中原みさ子
なお、5月に募集された鳥取県川柳作家協会賞(日満賞)も当日表彰された。本社同人受賞者は次の通り。
○日満賞準賞1 岸本 孝子

○日満賞準賞2 中原 汲香

○佳作 徳田ひろこ・中原 諷人・西原艶子・上田宣子

○第53回富田林市民川柳大会は、11月1日に中央公民館で開催された。当日の本

社同人の特選は次のとおり
二幕目はきつと花野の真ん中に 池 森子

むらさきのひとつの嘘を差し上げる 中井 アキ

○第45回和歌山文芸まつりは11月2日表彰式が行われ、本社同人受賞者は次の通り
○県議会賞 長賞

ひとすじの糸から編んでいく絆 武本 碧

○商工会議所会頭賞

新同人紹介

深^{ふか}田^だ 倶^ぐ久^{きゅう}
―由多香・雄々推薦

伊^い勢^せ田^だ 毅^{つむぎ}
―天笑・洋々・公弘・完司推薦

背信の踏絵も踏んで生きのびる 西山 幸
○第58回尼崎市民文芸祭の川柳部門入賞の本社関係は次の通り。

○文化協会賞 三宅保州・上地登美代・中後清史
○第27回寝屋川市民川柳大会は、11月3日に市立総合センターで開催された。

○秀句
配当は孫の笑顔という投 資 森本 弘風
天国と信じ渡った飢餓の 国 角野 仁清

一冊の本をわが師に秋灯 下 森 茜
▽同人動向△
○読売新聞10月21日朝刊の

「編集手帳」に、薫風名譽主幹の「秋風に傷なきものはなかりけり」が、秋を代表する句として紹介された。

▽御芳志御礼△

岩佐ダン吉氏（参予、岸和田市）から、川柳句文集「熱い汗」発刊記念として、金一封を拝受。

▼出版▲

☆反戦反核平和を願う文学の会は、詩歌句集『いまこそ花を』を出版。B6判・464頁・価千円。川柳部門は塩満敏氏らが呼びかけ人

▼計報▲

■小原ツルエさん（常任理事、籠島恵子さん母堂）は、

原稿募集

2月号掲載の同人の原稿を募ります。テーマは「心に残る一冊」。これまでに読んだ本の中で感激をした本、人に薦めたい本など、広く本にまつわるエッセーのご応募をお待ちしています。

締切りは12月15日 400字詰原稿用紙一枚半（二枚（600字・800字）本社事務所宛ただし、原稿の採否、添削は編集部に一任して下さい。

編集部

お知らせ

10月27日の常任理事会で、役割分担が次の通り決定しましたので、お知らせします。（太字は部長です）

総務部		企画事業部		編集部		句会部		同人部		渉外部		会計部		発送部	
前	たもつ	坊農	柳弘	西出	楓楽	山本希久子	大内 朝子	河内 月子	長浜 美籠	松原 寿子	山本希久子	鶴田 遠野	米田 恭昌	高田美代子	
藤田 泰子	石森 利昭	木本 朱夏	山本 義子	籠島 恵子	籠島 恵子	籠島 恵子	籠島 恵子	石森 利昭	石森 利昭	石森 利昭	石森 利昭	石森 利昭	石森 利昭	石森 利昭	石森 利昭

10月27日逝去。78歳

■浦田綾子さん（同人、大

阪市）は肝炎のため11月4

日逝去。葬儀はベルコ大阪

法宴会館で行われた。78歳

▽訂正と削除△

11月号P1下段9行目、

宮園射芳→宮園射月芳 P

82中段7行目、やわくと→

やわくと P 86中段2

行目とP 88中段24行目→名

前の上（欄）を入れる P 90

下段21行目、佳句→作句

P 93中段2行目「真ん中で

右往左往……」を本人の申

し出により削除

常任理事会11月27日（月）出

席19名 ①川柳塔まつりの

反省、会計ほか各部より

②常任理事会役割分担決定

③これからの大会参加、合

同句集刊行、10月まつり講

演人選 ④同人承認1名

11月7日（木）出席17名 ①提

出されている3氏の提案事

項について検討 ②合同句

集チラシの件 ③高野山合

記事前報告 ④同人1名

次回常任理事会11月27日

9時 アウイーナ207号室

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
川 柳 塔 わかやま	14日(日)午後1時から 包帯・プレゼント・しかし 「冬」	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
もくせい 川 柳 会	15日(月)午後1時から 放送・とつとつ・バッグ 自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根駅南東徒歩5分 〒561-0826 豊中市島江町1-3-5-801 田中正坊
南 大 阪 川 柳 会	17日(水)午後6時から 相撲・背・そう・脱皮	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造駅西徒歩3分 〒543-0012 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲
高槻川柳 サークル 卯 の 花	18日(木)正午から 書く・不況風・がたがた 嘘・自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-1142 高槻市宮田町3-8-8 川島諷云児
岸 和 田 川 柳 会	20日(土)午後1時半から 抜目・熱中・のぼせる・白紙	市立福祉総合センター2F 南海線岸和田駅東徒歩3分 〒596-0827 岸和田市上松町610-85 芳地狸村
東大阪市 川 柳 同 好 会	20日(土)午後6時から 変わる・企み・ポスト・芸	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
川 柳 藤 井 寺	21日(日)午後1時から 赤札・つもり	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール3F 近鉄南大阪線藤井寺駅下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市藤井寺公団1-105 高田美代子
川 柳 ねやがわ	21日(日)午後1時半から 暮れる・百貨店・姉妹・自由吟	寝屋川市立総合センター4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前下車 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
岬川柳会	21日(日)午後1時半から 内緒・ていねい・根気・自由吟	岬町 みさき苑ふれあいセンター 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
京 都 塔 の 会	22日(月)午後1時から 状・残す・無難	ハートピア京都 地下鉄丸太町駅南改札⑤番出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽
川 柳 塔 みぞくち	22日(月)午後7時半から 人相・今年の出来事・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県日野郡溝口町溝口757-3 小西雄々
川柳クラブ わたの花	26日(金)午前10時から 頭・動く・盛大・雑詠	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
はびきの 市 民 川 柳 会	28日(日)午後1時から 市営・ネオン・もやもや 「そっくり」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
城 北 川 柳 会	12月に限り休みます。	〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-8 神夏鏡典子

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所（06-6629-6914）へご連絡ください。

12 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
西宮北口 川 柳 会	1 日(月)午後 1 時から 暢気・組む・ゴール・自由吟	西宮北口南自治会館 (会館及び日程注意) 阪急西宮北口駅南西出口 西200m緑地公園内 〒663-8202 西宮市高畑町2-82-308 西口いわえ
川 柳 塔 な ら	4 日(木)午後 1 時から 握る・ラスト・野暮	奈良市立中央公民館 4 F (近鉄奈良④出口歩 5 分) 〒636-0311 奈良県磯城郡田原本町八尾62-6 渡辺富子
尼 崎 いくしま	5 日(金)午後 1 時から 越える・歴史・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎 3 F 阪神尼崎駅南西徒歩 5 分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
富 柳 会	6 日(土)午後 1 時から 外・結果・雑詠	富田林中央公民館 (近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m) 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
倉 吉 川 柳 会	6 日(土)午後 1 時から 動物・自由吟・産む	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡大栄町由良宿2072-17 谷口次男
川 柳 塔 唐 津	8 日(月)午後 1 時半から つじつま・巻く・具合	唐津市 栄町公民館 〒847-0824 唐津市神田1517-13 宗 水笑
ほ たる 川 柳 同 好 会	9 日(火)午後 1 時から 先生・夢・書く	豊中市立蛭池公民館 阪急・モノレール 蛭池駅前ビル 5 F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒鬼
尼 崎 尾 浜 川 柳 会	9 日(火)午後 1 時半から カレンダー・軽い・自由吟	尼崎市立立花公民館 尾浜分館 阪急武庫之荘北口から市バス⑧番尾浜 2 丁目下車 〒661-0976 尼崎市潮江 5-2-47 田辺鹿太
川 柳 塔 打 吹	13 日(土)午後 1 時から やる気・ぎりぎり・忘れる	倉吉市上灘町 上灘公民館 〒682-0924 倉吉市河原町1879 高多博文
堺川柳会	13 日(土)午後 2 時から 阪神タイガース優勝記念川柳大会	11月号 (P.109参照) 〒593-8305 堺市堀上緑町 2-16-3 河内天笑
川 柳 塔 ま つ え	13 日(土)午後 1 時半から 目立つ・相談・幕	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0015 松江市上乃木9-23-22 三島裕丘
川 柳 塔 みちのく	13 日(土)午後 4 時から 消す・シナリオ・ぶらぶら	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ 2 階「川柳道場」 〒036-8002 弘前市元大工町50-5 波多野五楽庵
川 柳 ふうもん 吟 社	14 日(日)午前 9 時から 没句供養川柳大会	10月号 (P.128参照) 全労災ビル 〒680-0033 鳥取市二階町3-102-2 植田一京
八尾市民 川 柳 会	14 日(日)午後 1 時から 敬・弾む・余白・雑詠	山本コミュニティセンター内3F学習室 (近鉄山本駅) 〒581-0845 八尾市上之島町北1-15 宮崎シマ子

編集後記

☆P117でご覧いただいたように、本社執行部署の役割分担も決定した。編集部は、従来通りのメンバーで取り組むことになったので、よろしくお願ひします。

☆先月号に続き本号（P117）にも案内の通り、同人の原稿募集をしている。10月本社句会の席題「本」の句でわかるように、皆さん中々読書家の様子。六法・聖書・詩集・林真理子・パールバック・マンガ等々と、レパートリー豊か。どんな原稿が出るだろうと楽しみにしている。奮って応募して下さい。奮って応募して下さい。☆編集の中核にいると忙しくて本が読めないのが悩み。と言えは語弊があり、自分が怖いから読めない、と言うのが正しいだろう。それ

は何のことかと説明すると、長編が好きな私は、読み始めると面白さに虜になって途中で止められず、寝不足・眼精疲労などで編集作業に差し支えること必定。そうならぬ様、コントロールして読めない意志薄弱な自分が怖くて、本を遠ざけている、という訳である。

☆けれども、元来活字中毒のため、そう簡単には諦め切れない。そこで本の新聞広告の中から、面白そうなのをスクラップして、机の横に次々とマグネットで止め、気安めにしている。

☆晴れて読める日が来るまで長編はあきらめ、世に遅れないための週刊誌・熟年向きの写真の多い雑誌・途中で止めやすい短編集・エッセー・柳誌の拾い読み・次々出版される個人句集、というところでお茶を濁している。

ひとこと

川柳の役割

どこの県にも、県の教育委員会が直接間接にかかわる文学賞があると思うが、佐賀県では知事部局の生活文化課が間接的にかかわって、佐賀文学賞が平成十五年度で四十一回を迎えた。小説・詩・随筆・短歌・俳句・川柳の六部門で、川柳には約二〇〇人、一〇〇〇句あまりの応募がある。

○和歌山の古本屋で岸本水

府著「川柳読本」(創元社)

を見つけた。昭和28年5月25日初版発行。定価二六〇円が一五〇〇円の売値である。装丁が鈴木信太郎という贅沢な本である。

○「川柳一分間手引き」にはじまり巻末に「課題の参考」としてジャンル別に課題を列記している。「戦後のもの」として「ブギウギ・アバン・カストリ・アプレ・青空文給」等、時代を反映しているのが面白

私は入賞・入選の実績に乏しいが、結社や地域のバランスで審査員を推算で十年ほど務めている。応募の顔ぶれに毎年大きな変化はないが、入賞・入選（十八名）のメンバーには時にずいぶんの異動があつて楽しい。生活詠が多いのは当然だが、時代を射抜く社会科の句が少ない。全国どこの句会や句誌でもそうなのだろうか。

仁部 四郎

い。○本のあちこちに赤いボールペンで書き込みがしてあり、小さな几帳面な文字から自ずから前の持ち主の性格が彷彿とする。多分、傘系の方であろうか。川柳塔系の人なら麻生路郎の名著「川柳とは何か」を手引きにするのではないだろうか。

○「川柳とは何か」は昭和30年11月に至文堂から「学生教養新書」全五十巻の中の一巻として発行され、サ
ブタイトルに「川柳の作り方と面白い方」とあり、定価二五〇円なり。復刻版が川柳塔社から発行されている。定価二〇〇〇円。ご希望の方は本社事務所へ問い合わせられたし。
○私の書棚にはまだ読んでいない本もたくさんあるが、古書店巡りが好きだ。古本の匂いには不思議に人を癒す要素があるようだ。薫風先生の名吟に「路郎の忌 天牛に来て落着きぬ」

(朱)

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

「発表（2月号）」

地名

姓・雅号

きりとりせん

◎ 8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようにお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

川柳塔誌新規購読申込書

年 月 日

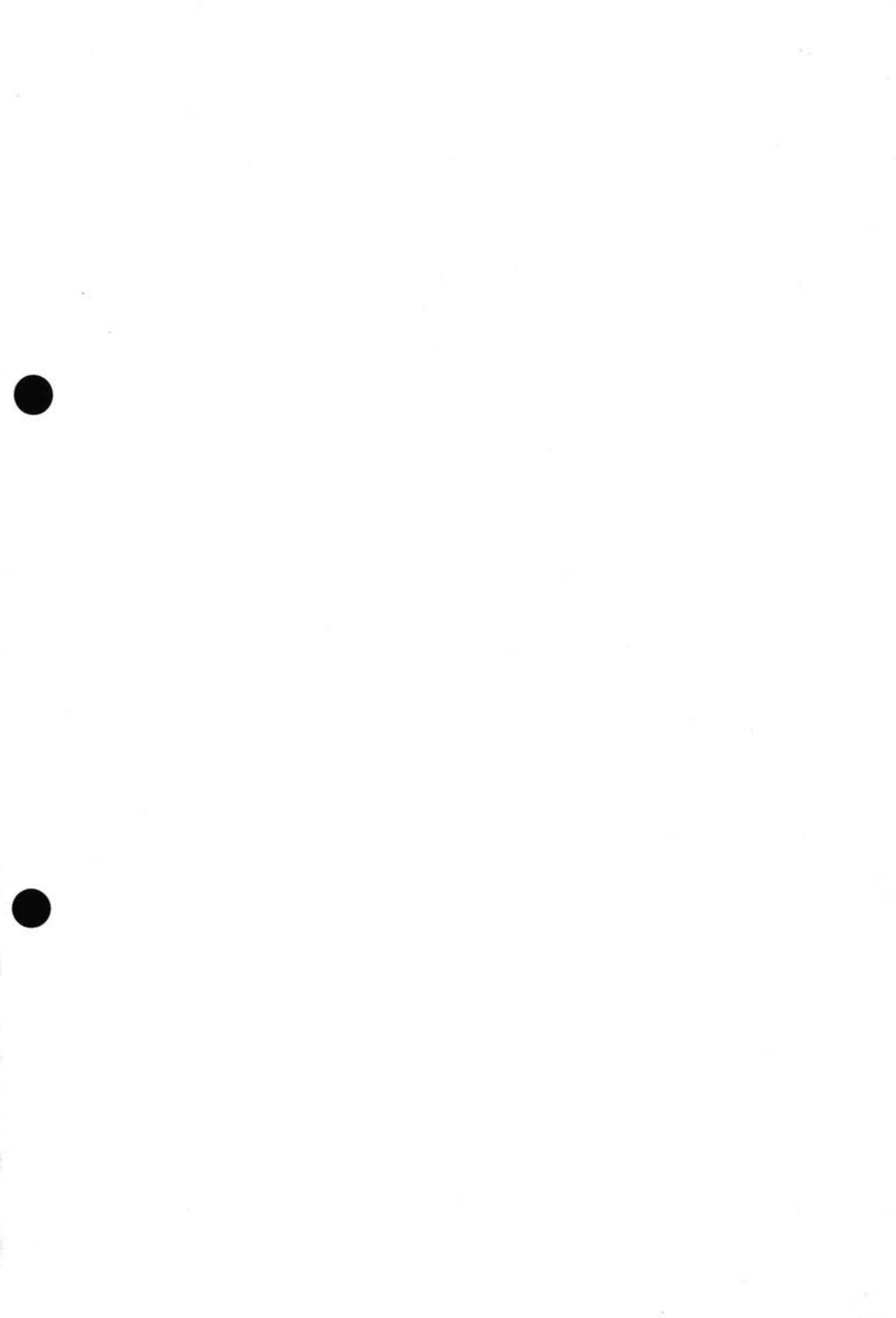
氏名	住所	電話	紹介者	☐ ☐
	〒 一			
				年 年 月 月 から から 一年 半年 9 5 8 0 0 0 0 円 〃 該当の方に○をつけて下さい

〒545-0005

大阪市阿倍野区三明町2-10-16 ウエムラ第2ビル202
川柳塔社 (電話 06-66629-6914)

振替 00980-5-33368

◎この用紙は必要があればご使用下さい



作品募集

川柳塔(8句) 河内天笑選
水煙抄(8句) 板尾岳人選
愛染帖(3句) 波多野五楽庵選
茴香の花(3句) 藤田泰子選
吟題「つじつま」 吉川寿美選
課題吟「巻く」 江原秀夫選
「具合」 奥谷彩子選
初歩教室「雪」(3句) 三宅保州担当

2月号発表(12月15日締切)

3月号
課題吟「ルーズ」「墨」「みえみえ」
初歩教室「まさか」

本社12月句会

とき 12月8日(月)午後1時・2時半締切
―開催時間にご注意下さい。―
ところ アウィーナ大阪 4階 金剛東
天王寺区石ヶ辻町19-12 電06・6772・1441
兼題 「荒れる」「温い」「ほのぼの」「クリスマス」「隠す」
高杉千歩選 桜井千秀選 都倉求芽選 宮口笛生選 河内天笑選
会費 1000円 当日発表(各題2句以内) 投稿料 500円

本社1月句会 10日(土)午後1時から

兼題 「目指す」「初恋」「白い」「酒」「おもしろい」

第22年度 夜市川柳募集

第7回「運」 本田智彦選
ハガキに3句 12月末締切
投句先 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺川柳会

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌最終ページの投句用紙を使用してください。
 - (2) 愛染帖・茴香の花・一路集(課題吟)への投句は、同人・誌友に限りません。ただし茴香の花は女性だけ、初歩教室は誌友のみとします。何れも川柳塔柳箋を使用してください。
 - (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
 - (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお問い合わせいただけます。

定価 八百円(送料76円)

半年分 五千円(送料共)
一年分 九千八百円(同)

二〇〇三年(平成十五年)十二月一日発行

編集兼 発行人 河内権治

印刷所 美研アート

〒545-0005 大阪府阿倍野区三好町二一〇一六
ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川柳塔社

電話(06)691-194番

振替 〇〇九八〇一五三三六八番

全日本川柳誌上大会のご案内 (柳多留第九集)

日本の全柳人が、だれでも、どこからでも参加できる「全日本川柳誌上大会」(柳多留第九集)を開催します。日川協年次大会・国民文化祭文芸大会と並ぶ社団法人全日本川柳協会の権威ある三大自然行事ですので、こぞご参加ください。

課題と選者 (各題2句・連記)

「屋根」	進藤すぎの	橋爪まさのり	共選
「中身」	板尾 岳人	深町 金鳥	共選
「ギヤラ」	福島 直球	廣島 英一	共選
「他人」	和田 宏	荻野美和子	共選
「留守」	新畑ひろし	奈倉 楽甫	共選

第二次選者

磯野いさむ	橋高 薫風	大野 風柳
斎藤 大雄	松岡 葉路	

参加費

2000円 (投句料・『平成柳多留』第9集代)
平成柳多留賞・川柳大賞・NHK会長賞・

(社)日本青少年育成協会会長賞・(社)全日本川柳協会会長賞

全日本川柳誌上大会賞・秀作賞 (予定)

締切

平成16年1月20日(火)〈当日消印有効〉

発表・表彰

第28回全日本川柳埼玉大会 (平成16年6月)
参加用紙 (雑詠1句) と出句用紙 (2通1組)

に記入し、参加費2000円 (振替又は小為替)

〒530-0041

大阪市北区天神橋二丁目北1-11-702

社団法人 全日本川柳協会

電話 (06) 6352-2210
FAX (06) 6352-2433

信頼され、社会に役立つ製品を作る

高級封筒専業メーカー



コーキ封筒株式会社

本社 富田林市若松町東3丁目7番8号 〒584-0023
TEL 0721-25-7210 FAX 0721-25-9484

東京営業所 東京都中央区日本橋本石町4丁目5番8号 〒103-0021
(日本橋川村ビル4F)

TEL 03-5255-5158 FAX 03-5255-5159

<http://www.koki-envelope.com>